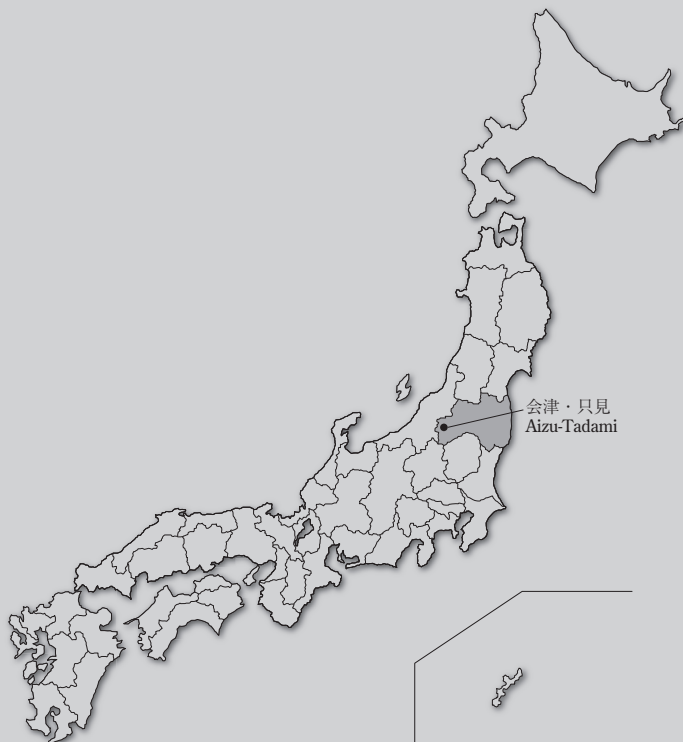


# 会津・只見の民具

*Mingu* of Aizu District-Tadami

佐々木長生



## 凡 例

- 1) この表は、『只見町史資料集第1集 図説会津只見の民具』（只見町史編さん委員会 1992年）をもとに作成したリストに『只見町文化財調査報告書第13集 会津只見の生活用具と仕事着コレクション』（福島県只見町教育委員会 2005年）の要素を加え、佐々木長生が加筆修正したものである。
- 2) 本表の分類および掲載順は、『只見町史資料集第1集 図説会津只見の民具』記載の「只見町民具分類総括表」に準じた。ただし、「社会生活用具」「信仰・年中行事用具」「芸能・娯楽用具」「人の一生用具」「民俗知識用具」は省いている（下記目次参照）。
- 3) 「名称」欄の民具名は、『国際常民文化研究叢書6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014）に記載の名称に揃うよう心がけたが、[民具名一覧編]に記載のなかったものについては便宜上つけるか、空欄のままとした。
- 4) 「只見での呼称」欄には只見地方で一般的な呼称を入れた。×印は、只見には当該民具がないことを表す。
- 5) 将来的に本表が「福島県の民具」一覧に発展することを期待し、別称は福島県全体に視野を広げ、「福島県での呼称」欄とした。
- 6) 「画像ファイル名」欄に記載のあるものは、本叢書39ページ以降の画像一覧にまとめて掲載した。なお、画像はすべて上記資料からの転載である。快くご許可いただいたことに改めて御礼申し上げたい。
- 7) 「画像ファイル名」について  
画像ファイル名は、出典をたどれるように名づけた。出典は2資料ある。  
例) 只1\_p016\_ハダッコ  
→「只1」は『図説会津只見の民具』、p16掲載の「ハダッコ」（当該地の呼称）であることを表す。  
例) 只2\_11101-56\_シゴトシ  
→「只2」は「只見町インターネット・エコミュージアム (<http://www.himoji.jp/tadami-item/>)」に掲載された「分類番号」11101-56の「シゴトシ」（当該地の呼称）であることを表す。  
※「只見町インターネット・エコミュージアム」はweb上の民俗博物館である。民具名や分類で民具を検索して「民俗資料調査カード」を呼び出し、画像や使用法などの詳細を見ることができる。

## 目 次

生活用具・衣類	p. 19	生産用具・養蚕用具	p. 34
生活用具・食生活用具	p. 21	生産用具・染織用具	p. 35
生活用具・住生活用具	p. 25	生産用具・手工用具	p. 36
生産用具・農耕用具	p. 28	生産用具・諸職用具	p. 36
生産用具・山樵用具	p. 31	交通・交易／運搬用具	p. 37
生産用具・漁撈用具	p. 32		
生産用具・狩猟用具	p. 33	画像一覧	p. 39
生産用具・畜産用具	p. 33		

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
<b>生活用具・衣類</b>				
<b>衣類【上衣】</b>				
仕事着	シゴトシ	カセギキモノ、ヤマキモノ、ノーシ	春から秋にかけて着用する単衣の上衣。シゴトギという地域もある。主に外仕事に着用したが、屋内作業にも使った。	只2_11101-56_シゴトシ
	ハダッコ	ジバン、ジュバン、サシコジバン、サシハダッコ、ボロサシコ	秋から冬にかけて着る丈の長い仕事着。古くなったシゴトシに布切れを厚く当て継ぎしたり、小さな木綿布を継ぎ縫いして着物の形にしたりしたもので、ジバン、ジュバン、サシコジバン、サシハダッコなどさまざまな呼称がある。	只1_p016_ハダッコ 只2_11102-5_ジバン 只1_p016_サシハダッコ 只2_11103-2_サシハダッコ
晴着	サシコハンテン	サシコジュバン、サシコジバン、サシコワンバリ、サシコモッコ	白木綿で麻の葉や七宝などの幾何学模様を施した刺子の上衣。サシコジバン、または単にサシコともいう。建前や堰普請など大勢の人が集まる共同作業のときに着用した。一種の晴着。	只1_p017_サシコハンテン 只2_11104-1_サシコジュバン 只2_11104-2_サシコジバン
綿入れ半纏	オミンノコ、ヤマンノコ、ミジカワタイレ		膝までの長さの綿入れの上衣で、シゴトシの上に着る。冬から春先の山仕事や野良仕事に着用。集落によって名称が異なる。	只1_p018_オミンノコ 只1_p018_ミジカワタイレ 只2_11105-1_ノッコ 只2_11105-5_オミンノコ
袖無綿入	ソデナシ		袖無綿入の上衣。秋口や春先の寒い時期に、シゴトシの上に着用して寒さをしのいだ。	只1_p018_ソデナシ
仕事着	クモクケツ		ゼンマイ採りに着る袖無型の仕事着。尻部が大きな袋になっており、左右の口から折り採ったゼンマイを入れる。ゼンマイでふくれた尻部が蜘蛛の尻のような形になる。	
普段着	ヘーゼキモノ		平生着物。普段着の総称。	
冲着物	×	ドンザ、サシコ	南相馬市鹿島区の漁師は、冲着として長着のドンザ、短着のサシコを着用した。	
袴	カミシモ		袴。冠婚葬祭など祝儀に着用する。	只1_p020_カミシモ
紋付	アフセモンツキ		裕紋付。結婚式などの晴れ着として着用する。	只1_p020_アフセモンツキ
	ワタイレモンツキ		綿入紋付。冬の結婚式などの晴れ着として着用する。	只1_p020_ワタイレモンツキ
<b>衣類【下衣】</b>				
山袴	カリアガリユッコギ、カリアゲユッコギ、ホソユッコギ、ホソツバカマ	サルツバカマ、サラツバカマ、サツバカマ	山仕事や野良仕事に着用する下衣。地域によって名称はさまざま。ユッコギは南会津郡から大沼郡にかけて分布、「雪こぎ」の意とも考えられる。	只1_p019_カリアガリユッコギ 只2_11207-16_ユッコギ 只2_11201-5_ホソツバカマ 只2_11201-48_カリアゲユッコギ
	サシコユッコギ		冬期間の山仕事をするために特別に丈夫に刺してあるユッコギ。	
もんべ	ブタユッコギ、ダフツバカマ、ダフユッコギ	フンゴミ、フグミ	冬季の屋内で用いる普段着兼屋内仕事着。上衣にナガワタイレ（長綿入）を着るので、その裾が入れられるように腰周りを大きくして作る。もんべ以前に普及。	只1_p019_ユッコギ（ブタユッコギ） 只2_11203-14_ダフユッコギ
	モンベ		ふだん着の下衣。春から秋にかけて屋内で着る。ブタユッコギの後普及。	只1_p019_モンベ
	カスリモンベ		子供用。	
	ズボンシキモンベ		子供用。	
<b>衣類【その他】</b>				
帯	ボロオビ		ボロ帯。古い着物や切れ端を裂いて横糸にして織り込んだ長さ約8尺、幅4寸ぐらゐの女性用の帯。シゴトシの上に締め、ホソユッコギをはく。	
	オビ		帯。	
	ハンハバオビ		半巾帯。	
	ヒッコキ		子供用。	
	カワオビ		皮帯。	
<b>雨具</b>				
蓑	ミノ		雨や雪を防ぐために着用。背当てにしたり、休憩時の敷物にしたりと、用途は多様。	只2_11401-5_ミノ
背中蓑	ケミノ		雨・雪除けと軽い荷を背負うのに使用する。	只1_p022_ケミノ 1 只1_p022_ケミノ 2
着蓑産	ヒゴモ	ヒデリゴモ	日菰。ガバ（ガマ）をコモ状に編んだもの。炎天下での田の草取りの際、背中が暑くならないように着用する。	只1_p064_ヒゴモ
	キゴザ		飯豊山・伊勢参りなどの旅行に着用する。	只1_p023_キゴザ 1 只1_p023_キゴザ 2
風合羽	カザガツバ		旅行に着用する。	只1_p023_カザガツバ 1 只1_p023_カザガツバ 2
傘	カラカサ		唐傘。	
	ジャノメ		蛇の目傘。	
<b>防寒具</b>				
蓑帽子	カンゼンブシ		雪の日の外出時に被る。	只1_p021_カンゼンブシ 1 只1_p021_カンゼンブシ 2

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
背中蓑	ネコ		ネコミノともいい、主に荷背負い運搬に使う蓑。家印や縁起の良い模様を布で織りこんだ雨用と兼用のものもある。	
インパネス	エンパネス		ラシャ。	
外套	ガイトウ		外套。	
角巻	ケット		只見ではカクマキ（角巻）。	
<b>履物類【冬物】</b>				
藁沓	ゲンベイ		歩行用のゲンベイ。仕事用はヤマゲンベイという。短靴形。平地で履くゲンベイをサトゲンベイといい、オトコゲンベイとオンナゲンベイの種別がある。	
	ヤマゲンベイ		仕事用のゲンベイ。特に冬の山仕事など。紐付き。	只1_p026_ヤマゲンベイ
	ワラグツ		冬季の祝言や葬式のときに履く。	只1_p026_ワラグツ
草鞋	オソフキワラジ		秋から初冬、または春先の山仕事や野良仕事の際、保温と危険防止のために履く草鞋。オソフキとワラジは別々に作り、先に爪先にオソフキを履き、その後ワラジを履く。	只1_p025_オソフキワラジ 只2_11603-2_オソフキワラジ
爪掛け	オソフキ		ワラヤガバで編んだツマガケ。ワラジを履く際、つま先の保護と防寒のためつける。	只1_p025_オソフキ
深沓	フカグツ		ゲンベイにハバキをつけたもの。只見地方の特色である。	只1_p028_フカグツ
甲掛け	シブッカラム		シブは藁の別称でカカトガケのこと。木綿布を3〜4枚重ね、麻糸で刺子を施した丈夫で保温性のある甲当てで、ゲンベイをはくとき、防寒のため足に巻く。コウガケと呼ぶ地域もある。	只1_p027_シブッカラム1 只1_p027_シブッカラム2 只2_p027_シブッカラム3 只2_11606-4_シブッカラム
脛巾	ハバキ		脛巾。防寒と危険防止のための脛当て。冬の山仕事の際、脛を保護するために巻く。	只1_p026_ハバキ
	フカグツハバキ		深沓脛巾。ゲンベイハバキともいう。只見ではフカグツ（深靴）、ゲンベイハバキと地域により呼び名が変わる。	
足袋	サシコタビ、サシッタビ		刺子足袋。木綿布を2〜3枚合わせ、麻糸や木綿糸で細かく刺して縫った足袋。じょうぶで耐久性に優れており、ゼンマイ採りには必須。	只1_p025_サシコタビ
	サシコタビゾコ		刺子足袋底。底だけ丈夫に刺したもの。	
雪下駄	ユキゲタ			
輪標	マルカンジキ		円形のカンジキ。雪上歩行に用いる一般的なもの。新雪の歩行及び雪道踏みに使用する。また、湿田の稲刈りにも着用。	只1_p029_マルカンジキ 只2_11613-1_マルカンジキ
	コカンジキ		小型のカンジキ。春先の雪が固まったところに履く。屋根の雪掘り、山仕事や狩猟の際に使用。また、ツルカンジキに付けて雪道踏みにも使う。	只1_p029_コカンジキ
	ツルカンジキ		コカンジキを取付けて使う大型のかんじき。輪は根曲竹、ノリオは藁・麻などでできている。	只2_23513-1_ツルカンジキ
	ツメカンジキ		堅雪の山仕事や狩猟のときに使用。両側に爪状の堅木を取り付けたカンジキで、ツメがすべり止めの役割をする。	只1_p029_ツメカンジキ 只2_23508-2_ツメカンジキ
<b>履物類【冬以外】</b>				
足半	アシナカ		仕事用の履物。土踏まずより少し長めに作られた小型のゾウリ。	只1_p024_アシナカ 只2_11701-4_アシナカ
草鞋	ワラジ		藁で編んだ履物。チ（乳）に紐を通し、足にしっかり結びつける。ゼンマイ採りや山仕事には欠かせない履物で、雪が消えてから降雪前まで使用。草刈り・山仕事のほか旅行時にも履いた。	只1_p024_ワラジ 只2_11702-20_ワラジ
	ヨツジワラジ		乳（チ）が4つあるワラジで、旅行時に履いた。	只1_p024_ヨツジワラジ
草履	ゾウリ		ふだんのはきもの。	只1_p024_ゾウリ
爪掛け	ツマガケ		初冬の仕事の際、ワラジにつけて爪先を保護する。木綿を麻糸で刺したじょうぶなつくり。	只1_p025_ツマガケ1 只1_p025_ツマガケ2
脚絆	キャハン		脚絆。	
	マキキャハン		巻脚絆。	
	カワキャハン		皮脚絆。	
脛当て	スネアテ		脛当て。	
型	ゲタガタ		下駄型。	
靴	ボッコグツ		ゴム。	
鉄標	カナカンジキ		滑り止め用のかんじき。ゼンマイ採りや狩猟のとき、急斜面の岩などを登るのに使用したり、まだ雪・氷のあるところで履く雪・氷のあるところで履くいわゆるスパイク的なもの。十字型で左右にツメをつけたもの、格子状で4カ所にツメをつけたものなど形状は多種多様。村の野鍛冶が作った。	只1_p029_カナカンジキ
<b>かぶりもの</b>				
手拭	フタスジテンゲ		二筋手拭。古くは一枚の手拭だったが、会津若松方面から2枚縫い合わせたフタスジテンゲが流行ってきて、戦後に普及した。	

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
笠	アミガサ		山仕事の日除けやイバラ除けにかぶる笠。ヒロロ（ミヤマカンスゲ）やクグを材料とし、アンブ（編符）はシナツカワ（オオバボダイジュの韌皮）で編む。	只1_p021_アミガサ 只2_11801-8_アミガサ
帽子	ボウシ		帽子。マタタビ。	
	ナカオレボウシ		中折帽子。ラシャ。	
	ヤマタカボウシ		山高帽子。ラシャ。	
	カンカンボウ、イチモンジボウシ		かんかん帽。イチモンジボウシ（一文字帽子）ともいう。	
	ボウカンボウ		防寒帽。	
日傘	ヒガサ		日傘。	
<b>その他</b>				
手鏡	テカガミ		手鏡。	只1_p030_テカガミ
櫛	マルマゲヨウノクシ		丸鬘用の櫛。	
型	マルマゲノカタ		丸鬘の型。	
簪	カンザシ		ベッコウや真鍮など。	
櫛入れ	クシバコ		櫛箱。	
爪切り	ツメキリ		爪切り。	
鉄漿壺	オハグロツボ		御歯黒壺。お歯黒用の鉄漿を入れる壺。	只1_p030_オハグロツボ
袋	コブクロ		小袋。	
手水鉢	チョウズバチ		手水鉢。手や顔を洗うのに使用する。	只1_p030_チョウズバチ
半切桶	ハンギリ		タライともいう。杉。	
盥	カナダライ		金盥。銅。	
おしめ干し	オシメホシ		上におしめを掛けて干すドーム状の枠。こたつの上に置いたり、火鉢の中に入れて干して乾燥した。木製や針金製。	只1_p046_オシメホシ
足袋干し	タビホシ		足袋干し。木製。	
物干し	モノホシダイ		物干し台。	
針箱	ハリバコ		針箱。	
くけ台	クケダイ		箆台。	
火熨斗	ヒノシ		火熨斗。真鍮や銅。	
鍔	コテ		鍔。ヒノシゴテともいう。	
<b>生活用具・食生活用具</b>				
<b>炊事用具</b>				
蒸籠	セイロウ		米や雑穀などを蒸す。干し栗なども蒸した。杉。	只1_p034_セイロウ
	セイロウノフタ		蒸籠の蓋。杉。	
	セイロウノダイ		蒸籠の台。杉。	
甑	コシキ		麻。	
蒸し器	ムシガマ		蒸釜。	
	ムシキ		蒸器。	
湯釜	ユッカマ・テドリ		湯を沸かす道具。湯釜。鉋と口が付いている。鉄瓶と同じだが、会津地方ではユッカマと呼ぶところが多い。	只1_p035_ユッカマ
鉄瓶	テツビン		鉄瓶。	
	ナンブテツビン		南部鉄瓶。	
鍋	ナベ		鍋。	
	ニショウノオ		二升ノオ。	
	サンジョウノオ		三升ノオ。	
	ゴショウノオ		五升ノオ。	
	シッコノオ		七升ノオ。煮物や汁を煮る。オオナベともいう。	只1_p035_シッコノオ（七升ノオ）
炒鍋	イリナベ		トウミギなどの雑穀を炒る。	只1_p035_イリナベ
釜	ツバガマ		鑄釜。羽釜。鉄製またはジュラルミン。	

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
釜	ツバガマノフタ		鍔釜の蓋。	
	テツガマ		鉄釜。鉄製またはジュラルミン。	
行器	ホケイ、ホカイ		結婚式など振舞に御飯（赤飯）を入れる。楕円形の漆塗の半切型の桶製のものが多い。	只1_p035_ホケイ1 只1_p035_ホケイ2
飯櫃	オヒツ		ご飯入れ。	
半切	ハンギリ、オヒツ		半切。脚付盥洗用の丸い桶。結婚式などの祝い時にご飯や赤飯・もちなどを入れる。	只1_p035_オヒツ 只1_p040_ハンギリ
お櫃入れ	イズミ、エジッコ、イツッコ		薬製の保温容器。只見ではチグラともいう。	
鍋敷	ナベシキ		鍋敷き。	
箆	ササラ		竹製。	
束子	トギナ		山ブドウの皮でつくった一種のタワシ。台所品を洗うのに使う。	只1_p043_トギナ
<b>調理用具</b>				
杵	キネ、モチツキキネ、ウチキネ		横杵。	只1_p034_ウス・キネ
	テツキネ、テギネ		手杵。堅杵。一方の先が丸く、もう一方は偏平になったものが多い。丸い方を粉搗きに用い、偏平の方を脱穀に使う。クボウスで雑穀を搗くほか、もちつき・粳ようしにも使用する。ハナノキ、ブナ、ケヤキなど。	只1_p033_テギネ
臼	ウス		餅搗き用。材質はケヤキやミネバリエが多い。	
	クボウス	コナウス	窪臼。小型の胴部がくびれた臼。脱穀用と粉搗き用があり、アワなどの雑穀を搗き砕く。	只1_p033_クボウス
輪	ツキワ		搗き輪。縄を巻き付けた輪。米搗きをする際、臼の中に入れ、輪の中をキネで搗く。	
鉢	ヒキバチ	デッチリバチ	挽鉢。ブナやトチなどを削り抜いて製作した木鉢。ソバなどの粉を練る。	只1_p033_ヒキバチ
	ブチバチ			
	ヒキバチノキドリ		挽鉢の木取り。荒型。	
押し棒	モチオシボウ		餅押し棒。	只1_p034_モチオシボウ・モチオシパン
押し板	モチオシパン		餅押し板。搗いた餅を載せ、モチオシボウで延ばして切る。	只1_p034_モチオシボウ・モチオシパン
包丁	ホイチョウ		包丁。	
	ソバキリホイチョウ		蕎麦切包丁。	
俎板	マナイタ		振舞用のまな板。	只1_p040_マナイタ
道具箱	ドウグバコ		振舞（結婚式等）の料理人の調理道具入れ。蓋は、俎板として用いる。	只1_p040_ドウグバコ
大根切り	ダイコンツキ		大根突き。	
	ダイコンキリキ		大根切器。	
卸金	オロシガネ		下金。	
杓子、杓文字	シャクシ、シャモジ		杓子。	
柄杓	ヒシャク		柄杓。	
篋	ヘラ		篋。	
	ミソッペラ、ミソペラ、ミソカンマシペラ		味噌篋。味噌造りのとき、糶や塩を入れて掻き混ぜるのに使用する。	只1_p043_ミソッペラ
水囊	スイノウ		鍋の中から煮た物を掬い揚げる。水囊。	只1_p036_スイノウ
手付笊	メシアツタメ		飯温め。柄付きの小籠で、冷飯・ソバなどをユッカマに入れて温めるもの。	只1_p036_メシアツタメ
笊	ザル		笊。マタタビ、ウルシ皮、アケビ、藤の皮など。	
	アケビザル		アケビ笊。茶碗などを入れる。	只1_p036_アケビザル
	オオザル		大笊。マタタビや根曲竹。	
	コザル		食料を入れる。小笊。	只1_p036_コザル
	コウシザル		格子笊。マタタビ。	
	ヒラザル		平笊。竹。	
	ザルノフチ		笊の縁。	
	メケイザル、タケメケイ		メケイ笊。竹製で「タケメケイ」ともいう。	
ハリメケイ		貼りメケイ。		

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
笊	タケカゴ		竹籠。	
篩	フルイ		篩。粉ふるい。	
播鉢	スリバチ		播鉢。	
摺粉木	スリコギボウ		摺粉木棒。	
石臼	イシウス		ソバなどの粉挽きに使用する。南会津のイシウスは注ぎ口の穴が中央にあるのが多い。イススと呼ぶこともある。	只1_p033_イシウス
	イシウスヒキボウ、スルスボウ、ヒキボウ		石臼挽き棒。スルスにも用いる。先は天井より吊るし、スルスに取り付けて回転させる。	
	イシウスヒキギ		石臼挽き木。	
石臼箒	イシウスボウキ、コナボウキ		石臼箒。	
型	センベイヤキ、センバイガタ		煎餅焼。おやつなどの煎餅を焼く。	只1_p044_センベイヤキ
	キンツバヤキ		金鍔焼。	
	カルメヤキ		カルメ焼。	
	カシガタ		菓子型。振舞用の菓子を作るときの押型。	只1_p044_カシガタ
魚焼き	サカナヤキ		魚焼き。	
べんけい	マル		クシイオ（串魚）を刺し、燻製を作るベンケイ。アカハラ（ハヤ）を串に刺して焼き、マルに刺して乾燥し保存する。只見ではアカハラを御頭付として吸物に使う。	只2_12244-3_マル 只1_p082_クシイオ、マル
串	クシサシ		串魚用。	只1_p082_クシイオ、マル
	マスヨウメイタ		鱒用目板。	
水桶	ミズオケ		水桶。	
水汲み桶	ミズクミ		水汲みに使う桶。取っ手と注ぎ口がついている。	只1_p037_ミズクミ
	ケイギ			
箸	カキハシ		掻き箸。	
真名箸	マナバシ		振舞の調理に料理人が使用する。	只1_p040_マナバシ
<b>加工用具</b>				
栃剥き	トチムキ、トチノカワムキ		栃剥。栃の実の皮をむく。	只1_p032_トチムキ
豆腐づくり	トウフツクリバコ		豆腐造り箱。	
	トウフツクリノカタ		豆腐造りの型。トウフノカタイタともいう。	
	ツトドウフノカタ		ツト豆腐の型。マタタビ。	
	トウフノキモノ		豆腐の着物。	
	トウフシボリブクロ		豆腐の絞り袋。麻。	
	スノコ		糞の子。豆腐造り用具。	
醤油搾り	ショウユシボリ		醤油絞り。モロミを入れ、上から重しをかけて絞る。	只1_p039_ショウユシボリ
	ショウユシボリブクロ		醤油搾り袋。麻。	
油締め	アブラシメキ		油締め。アブラシボリともいう。ジュウネン・ゴマ・菜種などから油を絞る。	只1_p039_アブラシメ
豆つぶし	サイヅチ、セイヅチ		木の盤や石の上で大豆を叩きつぶす槌状の器具。打豆造りの才槌。	只1_p038_セイヅチ
	マメツブシキ		豆潰し器。	
麦つぶし	ムギツブシ		麦潰し。麦飯用の押麦をつくる。	只1_p044_ムギツブシ
<b>保存用具</b>				
桶	オケ		味噌桶として使用する。	只1_p037_オケ
	オケッコ		桶ッコ。	
	モチオケ		餅米を水に浸したり、冷めないように搗いた餅を入れる。	只1_p034_モチオケ
	フカシオケ		餅米をふかす道具。	只1_p034_フカシオケ
	ツケモノオケ		漬物桶。	
	カタテオケ		片手桶。味噌取りに使う。	只1_p037_カタテオケ
	テオケ		手桶。	

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
桶	ミズクミオケ		水汲み桶。	
	ツルベオケ		水汲み桶。	
	サカオケ		一斗用。	
	ゴキアレイオケ		合器洗い桶。	
樽	ニショウダル		二升樽。	
	イトダ		一斗樽。	
	ショウユダル		醤油樽。	
	ヤナギダル、ツノダル、イワイダル		婚礼に飾る酒樽。ツノダル(角樽)、イワイダル(祝樽)ともいう。(只)	只1_p041_ヤナギダル
漏斗	ジョウゴ		漏斗。酒樽用。	
焼酎瓶	ショウチュウビン		焼酎瓶。	
甕	カメ		甕。	
	カメッコ		水飴や梅漬けなどを入れる。	只1_p037_カメッコ
	ミズガメ		飲み水を入れておく。	只1_p037_ミズガメ
	ドブコクガメ		どぶろくを造り仕込む。	只1_p037_ドブコクガメ
塩入れ	シオブネ、ニガリブネ		塩舟。プナなどを刮り抜いた舟形の器で、ニガリ受けに使用。溜まったニガリ(苦汁)は、豆腐造りに用いる。	只1_p039_シオブネ
	シオオケ		塩桶。	
	シオタライ		塩たらい。半切状の桶。棒を渡した上に塩俵をのせ、ニガリをうけるもの。	只1_p039_シオタライ
切立	キッタテ		切立。	
穀物入れ	ホケイ		小豆・ジュウネン(エゴマ)などの穀物を入れる。	
	ハリッカワザル		貼皮笊。マタタビ製のザルに和紙を貼り付けて作る。ゴマやジュウネン(エゴマ)など、細かな穀類を入れる。	
鮎桶	スシオケ		飯鮎(イズシ)を漬けるための桶(飯鮎桶)。飯鮎は只見地方の保存食で、ハヤやマスのなれ鮎。	只1_p038_スシオケ
<b>飲食器</b>				
盆	ボン		日常に使用する。盛物の台に使用する。	只1_p042_ボン
	マルボン		丸盆。	
	メイメイボン		銘々盆。	
膳	ホンゼン		本膳。	
	ゼン		膳。	
	チョウアシゼン		蝶足膳。振舞い(結婚式)の本膳として使用。御飯・餅・汁・お平・壺などを載せる。	只1_p041_チョウアシゼン
	ハコゼン		日常の食事用のお膳で、各自が使用する茶碗・箸などを入れ管理した。	只1_p042_ハコゼン
	トリマワシゼン		取り回し膳。	
膳箱	ゼンバコ		膳箱。	
重箱	ジュウバコ		重箱。	
椀	オヤワン		親椀。ご飯用。	
	メシワン		飯椀。	
	スイモノワン		吸物椀。	
	シルワン		汁椀。	
	ヒラワン		平椀。煮物用。蓋付き椀の一種「コトジ」(儀礼用)は皿のように平たいもの。結婚式に一通りの料理を出した後、コトジに「こづゆ」などのつゆ物や煮物を入れ、客の小皿にその料理を小さじで盛り配ってまわる。	
	コトジ		結婚式に一通りの料理を出した後、これに煮物やつゆ物を入れ、客の小皿に小さじで盛り配ってまわる。	只1_p041_コトジ
盆	コトジノボン		コトジを載せる盆。	只1_p041_コトジノボン
椀箱	ワンバコ		椀箱。	
湯飲み茶碗	ユノミ		湯飲み。木製。	
	ユノミチャワン		湯飲み茶碗。陶器。	



名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
皿	テショウザラ		手塩皿。	
	オオサハチ		大皿鉢。	
椀籠	ゴキザル		合器籠。ワンカゴ、ゴッカゴともいう。	
めんば	メツバ・メンバ	エゴ(南相馬市)	曲げ物の弁当箱の総称。会津ではメツバが一般的で、「ワツバ」という民俗呼称はない。	只1_p042_メツバ
	セイメツバ、セイイレメツバ、メツツギ		おかず入れとして使う弁当箱。	只1_p042_セイイレメツバ
	マルメツバ		円形。おかず入れとして使う弁当箱。	只1_p042_マルメツバ
弁当箱	オリタタミベントウ		折りたたみ弁当。	
	セトヒキベントウ		瀬戸ひき弁当。	
	タケベントウ		竹弁当。	
	ハコベントウ		箱弁当。	
卓袱台	ハンダイ		飯台。	
箸立て	ハシタテ		箸立て。	
杓文字差し	ヘラサシ		杓文字差し。	
<b>嗜好品用具</b>				
湯桶	ドロクツギ		濁酒注ぎ。婚礼や42歳の厄日待など儀礼時の酒宴に酒をつぐもの。形状は湯桶に似ており、ユトウと呼ぶ地方も多い。	只1_p041_ドロクツギ
猪口	チョコ		猪口。	
徳利	カンドックリ		燗徳利。	
	イッシュウドックリ		一升徳利。	
燗鍋	カンナベ		燗鍋。	
焼酎甕	ショウチュウガメ		焼酎甕。	
焼酎瓶	ショウチュウビン		焼酎瓶。	
杯台	ハンダイ		杯載せ用。	
煙草盆	タバコボン		煙草盆。	
煙草入れ	タバコイレ		煙草入れ。	
	ドウラン		煙草入れ。胴乱。	
	ズンギリドウラン		煙草入れ。胴乱。	
煙管	キセル		煙管。	
灰叩き	ハイタタキ、ハイザラ		灰叩き。「ハイザラ」ともいう。	
煙草包丁	タバコボウチョウ		煙草包丁。	
<b>その他</b>				
胡桃落し	クルミオトシ		胡桃落し。	
里芋洗	サトイモアライ		里芋洗い。里芋を入れ、用水堀などに設置し、回転させて洗う。単にイモアライともいう。	只1_p044_サトイモアライ
<b>生活用具・住生活用具</b>				
<b>いろいろ用具</b>				
付け木	ツケギ		付け木。先端に硫黄が塗られ、火が着きやすくてきている。	只1_p046_ツケギ
付け木箱	ツケギイレ、ツケギバコ		付け木入れ。子どもの手の届かない高い所に打ち付けておいた。	只1_p046_ツケギバコ
火打ち石	ヒウチイシ		火打ち石。	
火打ち金	ヒウチ、ヒウチガネ		火打ち。	
火打ち箱	ヒウチバコ		火打ち石と火打ち金で火花を散らし、箱の中にある「ほくち」に点火する。	只1_p046_ヒウチバコ
火棚	ヒダナ		火棚。	
	ヒダナナワ、ツルシナワ		火棚縄。	
囲炉裏	イロリブチ、ユルップチ、ユルリブチ		囲炉裏縁。囲炉裏をユルイという。	
自在鉤	カギザオ・カギノハナ、ヒダナカギ	カギドノ、カギサマ	自在鉤。木製の箱型と竹製がある。雪が多く竹の生育に適さない会津、只見地方では箱型が多い。	只1_p046_カギザオ

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
自在鉤	ジザイカギ		狩猟・炭焼き・籠ぶちなどの山小屋で用いる。木の又などに縄を付けて簡略的に作ったもの。	只1_p046_ジザイカギ
	カギノハナツリナワ		鉤のはな吊縄。ワラ製。	
五徳	ゴトク		五徳。鉄製。	
渡金	ワタシ		五徳の一種。	
火箸	ヒバシ		火箸。	
暖房用具				
炬燵	コタツヤグラ		炬燵槽。会津地方では、朴木ではぞを組み製作したもの。炬燵用と行火用があり、行火用は小さく作る。只見ではカヅコ（炭）を使用。	只1_p047_コタツヤグラ
	コタツユルリノフチ		炬燵囲炉裏の縁。	
	コタツコウシ		炬燵格子。	
	コタツナベ		炬燵鍋。炬燵の炉となる部分。床を掘り抜いて据える。主に二階の炬燵に使用する。	只1_p047_コタツナベ
	コタツガケ		炬燵掛け。仕事着などの古布を何枚も合わせ麻糸で刺して作る。	只1_p047_コタツガケ
行火	ヒバコ	アンカ	火箱。会津地方では行火（あんか）をヒバコと呼ぶ。会津平担部では稲荷原石のものが多いが、只見ではほとんど流通せず、木を削り抜いたものや粘土製のものもある。ヒバコ用の小さなコタツヤグラを使用する場合もあるが、多くは古布などにくるんで使用。寝床の暖房用に布団の中に入れて使用する。	只1_p047_ヒバコ
	ヒバコノシタシキ		火箱の下敷。	
	アンカノヒイレ		行火の火入れ。	
	ニカイアンカ		二階行火。焼物で流通したもの。用途としては行火だが、炬燵槽や布団をかけて炬燵としても使用。	只1_p047_ニカイアンカ
火鉢	ヒバチ		火鉢。	
	ハコヒバチ、ヒバチ		箱火鉢。	
湯たんぼ	ユタンボ		湯たんぼ。	
炭箱	スミバコ、スミイレ		炭箱。	
炭起こし	スミオコシ		炭起こし。	
十能	ジュウノウ		十能。	
火消壺	オキイレ		燻入れ。	
	ヒケシツボ	ヒケシガメ(会津平担部)	火消壺。囲炉裏や竈の燻を入れ、消炭をとる。炬燵・火鉢・火箱などに使用する。	只1_p047_ヒケシツボ
松明かし	マツイレバコ		松入れ箱。	
	マツワリチュウナ		松割り手斧。トウガイで焚く根松を割る。	只1_p048_マツワリチュウナ
	マツホシ		松干し。根松を載せ、火棚に吊るし乾燥させる。	只1_p048_マツホシ
	トウガイ、トウゲイ		根松（松脂を多く含んだ松木）を細かに割ってこの上で焚き、明りをとる。石製や金属製がある。	只1_p048_トウガイ1 只1_p048_トウガイ2
	マツアカシダイ		松明かし台。根松を燃やすための台。	只1_p048_マツアカシダイ
	マツアカシダイヨウナベ		松明かし台用鍋。	
灯芯台	トウシンダイ		灯芯台。	
蠟燭立て	ロウソクタテ		蠟燭立て。	
燭台	ショクダイ		燭台。	
油壺（油徳利）	アブラツボ		油壺。	
行灯	アンドン		室内用の照明。便所などへ行く時使用する小型のものもあり、火の用心・戸締まりなど注意事項をまわりの和紙に書く場合が多い。大型のものは結婚式などに用いる。	只1_p049_アンドン1 只1_p049_アンドン2
提灯	チョウチン		提灯。	
	オダワラチョウチン		小田原提灯。	
	ブラチョウチン		ブラ提灯。	
	ユミハリチョウチンノテ		弓張提灯の手。	
ガンドウ	ゴヨウランプ、ガンドウ		屋外歩行用の照明。	只1_p049_ゴヨウランプ
ガス灯	カンテラ、ガストウ		燃料にはカーバイトを用い、管の先端から発生したガスに点火して照明とする。主に夜店などで用いた。	只1_p049_ガストウ

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
ランプ	セキユランプ、ランプ、ツルシランプ		室内用の照明。	只1_p049_ランプ
	ダイツキランプ		台付きランプ。	
	ツルシランプ		吊しランプ。	
	マメランプ		豆ランプ。	
	テランプ		手ランプ。	
	ハコランプダイ		箱ランプ台。	
電気の傘	デンキノカサ		電気の傘。	
角燈	カクトウ		角燈。	
長持	キンビツ	カロウド	絹櫃。嫁入りのときに持参する長持様の衣装箱で、長持よりも小型。死んだとき、その人のお棺になる。松枝岐村ではカロウドとよぶ。ナガモチはキンビツよりも大型で、布団なども入れる。	只1_p053_キンビツ
箆筒	タンス		衣類のほか、貴重品なども入れる。	只1_p053_タンス
	ショダンス		書箆筒。	
	キチヨウヒンイレタンス		貴重品入箆筒。	
	コモノイレタンス		小物入箆筒。	
小物入れ	コモノイレバコ		小物入箱。	
硯箱	スズリバコ		硯を入れる箱。	只1_p053_スズリバコ
手箱	テバコ		手箱。嫁入りのときに持参する小物入れ。	只1_p053_テバコ
	フバコ		文箱。	
行李	コウリ		行李。	
	ヤナギゴウリ		柳行李。	
皮	クマノカワ		熊の皮。	
枕	ハコマクラ		箱枕。	只1_p052_ハコマクラ
	フナゾコマクラ		船底枕。女性が日本髪を結ったとき、髪型をこわさないために使用する。家紋入の花嫁用もある。	只1_p052_フナゾコマクラ
	マクラバコ		10個入れ。	只1_p052_ハコマクラ
	マクラ		枕。	
夜着、かいまき	ヨギ		縮入着物のような形状で、掛布団のように使用する。	只1_p052_ヨギ
	ナガワタイレ		長縮入。膝部までである長着の縮入で、山小屋で寝るときの布団代わりに使用。	
蒲団	フトン		蒲団。	
葛籠	ツヅラ		葛籠。	
床箱	トコバコ	ハコドコ	床箱。四方を板で囲い、中に藁を敷いて寝る。昭和20年ごろまで主に老人が使用した。お産に使用する場合もあった。旧南郷村ではハコドコといい、昭和47年まで使用していた老人もいた。	只1_p051_トコバコ
<b>除雪用具</b>				
雪掻	コウシキ		雪掘り（屋根の雪おろし）をする道具。只見地方は柄がT字形のものが多く、新潟地方のものと同形。	只1_p054_コウシキ1 只1_p054_コウシキ2 只2_23909-1_コウシキ
	コウシキノヤマドリ		ブナを柁目に割り木取りをする。屋根裏で何年も乾燥してからコウシキに加工する。	只1_p054_コウシキノヤマドリ1 只1_p054_コウシキノヤマドリ2
輪標	ツルカンジキ		大きな楕円形をしたカンジキで雪道作りの道具。前方に縄を付け、それを持ち上げるようにして新雪を踏んで歩く。主に平地の雪道踏み（雪を踏み固め、雪道を作る）に使用。他に、猟に出る際、深い雪で歩きにくいときはこれで道をつけながら進む。輪は根曲竹、ノリオは藁・麻など。使用するときには、コカンジキを付ける。新潟県側でいうスカリに近いが、やや小さい。	只1_p028_ツルカンジキ 只1_p029_ツルカンジキ 只2_13603-19_ツルカンジキ
踏俵		フミダワラ	雪を踏み固めるための俵状のもの。足を入れ、片足ずつ吊り上げ、雪を踏み込む。雪の少ない会津平坦部ではツルカンジキではなくフミダワラを使用。	
<b>建築・儀礼用具</b>				
火難除け	ヒブセ	ヒブセノカミ	火伏せの神。男根・女陰をかたどった呪物。火事にならないように、子孫が栄えるようにと建前に棟木に奉納する。松枝岐村ではセーマラという。	只1_p050_ヒブセ（女） 只1_p050_ヒブセ（男）
<b>その他</b>				
釣瓶	イドツルバ		井戸釣瓶。	

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
釣瓶	ツルベアゲ		釣瓶上げ。	
手押しポンプ	イドポンプ		井戸ポンプ。	
風呂釜	スエフロガマ		据風呂釜。	
湯掻き棒	フロカンマシボウ		風呂掻き回し棒。	
屏風	ニマイオリビョウブ		二枚折屏風。	
	ロクマイオリビョウブ		六枚折屏風。	
鍵	クラノカギ		蔵の鍵。	
	ナンバンジョウ		南蛮錠。	
	ショウガキノトメガネ		しょう垣の止め金。	
梯子	ハシゴ		梯子。	
	オックテバシゴ		押し梯子。	
踏み台	フミダイ		踏み台。	
塵取	チリトリ		塵取。	
	ゴミアツメ		ごみ集め。	
簾	スダレ、ス		簾。	
莫塵	ゴザ		莫塵。	
菰	コモ		菰。	
猫つぐら	ネコチグラ	ネコイズミ、ネコイジコ	藁などで編んだ猫の寝床。鼠の害から蚕を護る猫は大事な家族の一員であり、囲炉裏の脇などに置く。只見では他地方でいうイジコをチグラと呼び、ネコ（猫）が入るのでネコチグラという。会津では同じ民具を「イジコ（会津盆地）」「イズミ・チグラ（南会津地方）」と呼ぶ地域がある。	只1_p047_ネコチグラ
鼠捕り	ネズミトリ		鼠捕り。	
蠅取り	ハエトリ		蠅捕り。	
	カキマゼグワ		掻き混ぜ鎌。	
流し	ミズブネ		ミンジャ（水屋）と呼ばれる流しには沢水を引き入れ、ミズブネ（水槽）で洗い物をする。	只1_p043_ミズブネ
<b>生産用具・農耕用具</b>				
<b>耕作用具</b>				
鎌	クワ		主に畑うない（田起し）、湿田の田うない、畦塗りなどに使用する。只見地方の鎌は、柄の先が曲がっているのが特徴。単に鎌というと、平鎌を指す場合が多い。	只1_p061_クワ
	タゴシラエクワ		ヒドロタ（卑泥田）と呼ばれる強湿田の耕作に用いる。前年の稲株を掘り起こし耕す。テズラと呼ぶ泥除具を柄に付ける。	只1_p060_タゴシラエクワ
泥除け	テズラ、タゴシラエノミズヨケ	ミズヨケ、テドリ、テンズラ	ヒドロタ（卑泥田）の泥はねを防ぐため、田ごしらえ鎌の柄につける。	只1_p060_テズラ1 只1_p060_テズラ2 只1_p060_テズラ3
腰蓑	タゴシラエマイカケ、マエカケミノ、マイカケミノ、コシミノ		田拵え前掛け、前掛け蓑。膝上から腹を覆う。ヒドロタの田拵え時に、泥除けとして着用する。山ブドウの皮またはヒロロで編む。	只1_p060_マエカケミノ 只2_20107-7_マイカケミノ 只2_20107-8_コシミノ
唐鎌	トウグワ	マンノウ(万能)	新田起こしや畑の開墾に用いる。	
三本鎌	サンボンクワ		三本鎌。オカダ（乾田）の耕起用具。鎌と柄の角度が深く、柄も短い。かがむように使用する。田うないのほか、肥出しやソラックチ（堆肥の背負い籠）への堆肥入れにも使用。	只1_p061_サンボンクワ
	カツアボウ、カクサボウ	カクサユトウリ、カクサ	カノ（焼畑）で刈り払った草を掻きあげたり、播種後の土掛けにも使う。三つ又になった自然木を利用。	只1_p070_カツアボウ1
	カツアキ		麻畑専用の栽培用具。株間の除草・中耕・培土などの麻くるめのほか、種蒔きや畔作りにも使用。刃先は鍛冶屋で製作。柄は自分で削って付けた。	只1_p070_カツアボウ2
草掻き	クサカキ		草掻き。畑の除草などに使用。	
犁	バコウグワ、バコウ		馬耕鎌。馬による田うない道具。杉の根元が雪で曲がった部分を使い、その先に鉄製の刃をはめる。只見地方では最も早い時期（大正時代）に使用された犁。	只1_p062_バコウグワ 只2_20115-20_バコウグワ 只2_20115-27_バコウ
	ニダンバコウグワ、ニダンコウ		二段馬耕鎌。馬耕鎌を改良したものの。	只2_20116-3_ニダンコウ
回転刃砕土器	ツチクウシ		土崩し。馬耕で田起こしを行った後、牛馬に引かせ細かく砕土する。	只1_p063_ツチクウシ
馬鎌	マグワ、マンガ、シロカキマンガ		代掻きを使う道具。馬に引かせながら、鉄製の刃を打ちこんだ軸木を回転させることにより、土塊を砕いて軟くし、泥状に耕す。田植え前の重要な作業で、田植終了後「馬鎌洗い」といって祝う。	只1_p062_マンガ 只2_20118-13_シロカキマンガ

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
竹ばよ	タカバヨ、タカバイ、タカバエ		竹把結。馬鍬を引くための付属用具。2本の根曲竹を束ねて作る。馬鍬の一方には縄を付け馬の尻がすらないように片方にタカバヨを付ける。	只1_p062_タカバヨ 只2_20119-3_タカバエ
鼻棹	ハナザオ		鼻棹。馬鍬を引く馬の口に取り付け、代を掻くところを誘導する。これを鼻取りといい、主に子供や女性が行った。	只1_p062_ハナザオ
農耕鞍	シロカキシト		農耕馬の背に乗せる鞍のこと。「シト」は荷鞍のクッションで藁を詰めて作る。	
	ウシノシト		牛に農耕作業をさせるための装備。シト＝鞍。	只2_20122-5_ウシノシトとクビキ
首木	クビキ		牛に農耕作業をさせるための装備。	只2_20122-5_ウシノシトとクビキ
口籠	タテゴ		「立籠」と書く。馬の頭部（口の部分）に縄で袋状に編んだもの。ここから手綱をとる。	
はも	ハモ		馬用の農耕具。首にかけて曳かせた。	
人力代掻き機	ハッタンコロバシ		八反転し。人力による代掻き機。押して歩きながら土を細かく砕き、田面を平らにする。	
	テオシシロカキ		手押し代掻き。人力による代掻き機。押して歩きながら土を細かく砕き、田面を平らにする。	只1_p063_テオシシロカキ
柄振	エンブリ、テジロボウ		杖とも書く。通し苗代や代掻後の田面を、押ししたり引いたりして平らに均す道具。山形の板に長い棹をつけた形状。柄を振るように使用する。	只1_p063_エンブリ 只2_20130-8_エンブリ
土均し	ツチナラシ		土均し。	
均し板	ナワシロシメ、シメイタ		苗代の代掻き後、泥を突き締めゴミなどを泥中に入れ、表面を平らにする。長さ1.5mほどの板に彎曲させた雑木で取っ手を付けた形状。	只1_p059_ナワシロシメ 只2_20132-1_ナワシロシメイタ
大足	×	オオアシ	会津地方や中通りの阿武隈産地で、馬が入れない深いヒドロクダで使用。猪苗代湖周辺ではナンバと呼ぶ横長型の田下駄を使用する。	
田植杵	タウエワク		回転をさせながら筋を付ける。これ以前はジョウバン（定板）、田植え縄を使用した。	只1_p064_タウエワク 只2_20136-1_タウエワク
短冊定規	タンザクジョウギ		短冊定規。	
田植用定規	ジョウギ		田植用定規。	
培土機	バイドキ		培土器。	
<b>灌漑用具</b>				
砂利掻き	オオカワノジャリカキ		大川の砂利掻き。大堰普請のほか、魚獲りの砂利かきに使用する。長い柄の付いた三本爪のある鋸形のものだが、「三本鋸」とはいわない。	只1_p058_オオカワノジャリカキ (大川の砂利掻き)
鋤簾	ジョリン		除簾。砂利集めや用水掘の堰上げに使用する。	只1_p058_ジョリン
	オオジョリン		大除簾。	
鶴嘴	ツルツバシ		鶴嘴。	
	イシハガシ		石剥がし。	
ポンプ	ミズヒキポンプ		水不足のとき、堀から水田に水を汲み上げる。スッポンなどと呼ぶ地方もある。	只1_p058_ミズヒキポンプ
	オオカワカリヤス		大川カリヤス。松や杉、雑木などを組んでカリヤスを作り、その中に石を入れ川に設置する。	只1_p058_大川カリヤス
	コカリヤス		小カリヤス。川の深いところは、オオカワカリヤス、浅いところはコカリヤスを入れて堰止める。	只1_p058_コ(小)カリヤス
<b>施肥・除草・病害虫防除用具</b>				
肥掻き	コイダシカギ、コエダシカギ		肥出し鉤。厩から厩肥を引き出す道具。	只2_20301-3_コエダシカギ
鎌	クサカリカマ		稲刈にも草刈鎌を用いた。鋸状の稲刈鎌は昭和以後に普及。	
雁爪	ガンヅメ		雁爪。表土の堅い乾田の草取り。稲の株間の土を掻き起こして酸素を供給し、苗の生育をよくする。除草と中耕を兼ねた。	只1_p064_ガンヅメ
回転除草機	ジョソウキ、タウチグルマ	コロバシ、タグルマ	大正時代に使われ始めた。稲の株間を押して歩き、草を浮かせて草取りをしやすくする。除草と中耕を兼ねた道具。除草機の普及により、正条植えが行われるようになった。	只1_p065_ジョソウキ 1 只1_p065_ジョソウキ 2
除草機	カブマトリジョソウキ、カブカキジョソウキ		株間取り除草機。	
蚊火		ヒナワ、カコ	仕事中に蚊やブヨ、蛇などに刺されないよう、布を藁で巻いたものに火を灯し、腰に付けて虫除けとした。大沼郡昭和村では松の皮を縄にない、これを輪にして頭に巻き火を灯す。ヒナワ(桧縄)という。三島町などではソバ柄を束ねて火を付け、田畑に立てて虫除けにした。これをカコという。	
<b>収穫・脱穀用具【畑作】</b>				
穂積み具	コウガイ	コゲイ	アワやキビなどの雑穀の穂積みで使用。約10cmほどの木の台に金属の刃を打ち付けたもので、刃は鎌や鋸、ヤスリなどの再利用。紐を付け中指に通し、ちょうど弥生時代の石包丁のようにして、片手で穂積みを行う。突ったものから穂刈りを行った。主に焼畑耕作で使用。	只1_p071_コウガイ 1 只1_p071_コウガイ 2

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
まとり	マメオトシ、マトウリ、マトオリ、マドリ		豆落とし。大豆、小豆、ソバなどの雑穀類を脱穀する道具。左右対称に二又になった枝を選び、少し弓なりに反らして作る。	只1_p072_マメオトシ
横槌	ヨコヅチ		横槌。豆・小豆・ソバなど雑穀類の脱穀に使用する。	只1_p072_ヨコヅチ
脱穀具	アワオトシ、アワブチボウ、コツジ		粟落とし、粟打ち棒。ナラ、ハンノキ、ヤマグワなどの堅木を加工して作った脱穀用具。下に大きな板を置き、その上にアワやキビなどの穂をのせ、叩いて脱粒させる。	
襖	フスマ		襖。雑穀落とし用。	
	トウミギモギ		トウモロコシ脱粒用。	
笊	ウルシザル	キザル	漆笊。山漆の樹を割り、細く平たくそぎ、ザルのように編み上げたもの。三島町ではキザルと呼んでいる。丈夫なザルで、手や大根など重い野菜の収穫に適している。ウルシザルは三島・金山・只見町の只見川流域の一地域のみに製作されてきた。	只2_20407-16_ウルシザル
<b>収穫・脱穀用具【稲作】</b>				
千歯扱き	センバ、センバコキ、センバイネコキ	ビリンビリン、ザランコ	稲束をセンバの歯の間に引っ掛けて手前に引き、稲穂から籾をちぎり落とす道具。大人一人で20束くらい扱けば普通だといわれた。千歯扱きの脚には雪の圧力で曲がった杉の根元を利用。モミヨウシボウとして、籾のノギ落としにも使われる。	只1_p066_センバ 只2_20501-32_センバ
足踏み脱穀機	イネコキキカイ		稲扱き機械。大正中ごろからセンバに代わって足踏み式の脱穀機が普及する。	只1_p066_イネコキキカイ 只2_20503-17_イネコキキカイ
籾叩き	モミヨウシ、モミブチボウ、モミヨウシボウ、ボッサラオトシ		稲の穂切れや芒を落とす。根曲りの木を利用したモミヨウシボウ（ボッサラ（籾のついた穂切れ）落としともいう）のほか、棒状の木に古鋸や庖丁の刃などを再利用して付けたものもある。	只1_p067_モミヨウシ 只1_p066_モミヨウシボウ 只1_p067_ボッサラオトシ
	ヒラバモミヨウシ		センバで扱いた後、籾の芒を打ち落とす。二人向かい合って調子をとって行う。古鋸の刃を利用。	只1_p067_ヒラバモミヨウシ
芒落とし	ツキグワ		突き鎌。籾の芒落としに使用する。平鎌の刃先と除雪用のコウシキを再利用して作る。	只1_p067_ツキグワ
	モミヨウシキネ、ヨウシキネ		籾の芒落としに使用する。先が扁平になっている。	只1_p067_ヨウシキネ
	クリヨウシキネ		栗ようし杵。	
稲刈機	イネカリキ		取っ手を両手で握り、立ったまま稲刈りができるように工夫された農具。	
<b>調整・選別用具</b>				
木摺白	キズルス		籾摺白。両脇に引綱を付け、2人が相対して挽く。明治以前に使われた。	只1_p068_キズルス
土摺白	ドズルス		籾摺白。明治時代以降、キズルスの後に普及する。挽き棒を回し、回転させる。粘土でかため、ナラの本などの歯を打ちこんだもの。南会津のスルスは、上白に木鉢状のものを付ける。キズルスの上白を加工して造る場合もある。	只1_p068_ドズルス1 只1_p068_ドズルス2
挽き棒	スルスマワシノウデギ		摺白廻しの腕木。	只1_p068_ヒキボウ
汰板	センデイ、ユリイタ		センデイ（選台）、揺板。玄米と籾を選別する用具。杉板で箕型に作られ、先端の両端を紐で結んで天井から吊下げ、前後左右に揺すって使用。会津では元禄時代のころから使われ始めた。キズルスやドズルスで籾摺りをしたのち、玄米と籾とを振り分ける。只見地方では昭和20年代まで使われた。これ以前は、丸型のユリオケが使われた。	只1_p069_センデイ
唐箕	トウミ		籾摺り後、人工の風を起こし、籾がらや雑穀などを選別する。会津地方では貞享（1684～87）のころから使われていたという。	只1_p069_トウミ
万石通し	センゴク		千石。籾摺り後、傾斜した網の上に籾や玄米を落下させ、粒の大小により選別する。センデイの後に普及。一枚網のものを「センゴク」という。	只1_p069_センゴク 只2_20606-11_センゴク
	マンゴク		万石。センゴクと同形のもので、南会津地方では二枚網（二重）の大型のものを「マンゴク」という。	只2_20607-2_マンゴク
杵	コメツキキネ		米搗き杵。	
搗き輪	コメツキノワ、スイシヤノワ		米搗きの輪、水車の輪。	
箕	カワミ		雑穀類の選別をする。サワグルミの樹皮の自家製品。	只1_p072_カワミ
	タケミ		竹箕。フジの皮と竹で編んだもの。新潟から伝来し、地元でも製作されるようになった。	
籾通し	トウシ、メケイ		通し。	只2_20613-8_モミドウシ
米通し	コメゴトオン		米粉通し。くず米、玄米などを振り分ける。縁は竹に細縄を巻き、底は麻糸の網でできている。	只1_p069_コメゴトオン
篩	フルイ		篩。	
<b>貯蔵用具</b>				
種子入れ	フクベイ、ユウゴウノタネイレ		アワや小豆・モロコシなどの雑穀の種子を秋から翌春まで保管する。フクベイ（フクベ）はヒョウタンの果実で、ユウゴウ、ユウゴ、ノタネイレはユウガオの果実で作ったもの。口部を切って池に入れ腐らせ、中の種子やわたをとって作る。	只1_p072_フクベイ 只1_p072_ユウゴウノタネイレ

名 称	只見での呼称	福島県での呼称	説 明	画像ファイル名
吠	カマス		吠。ソバガノと呼ばれる焼畑は自宅より一里半以上も離れており、収穫物はカマスに入れて、ネコミノとニナワで運搬した。	
棒	モミツメボウ		糶詰め棒。	
種子入れ	タネモミイレ		品種ごとに種子糶を入れ、屋根裏へ保管しておく。種子糶浸しや発芽にも使用する。	只1_p059_タネモミイレ
袋	ハヌイブクロ		端縫い袋。	
<b>その他</b>				
堰	オオゼキ		大堰。田植え前に伊南川を中ほどで堰止め、灌漑用水を水田に引く。村あげでの共同作業であった。	只1_p058_オオゼキ
<b>生産用具・山樵用具</b>				
<b>木挽用具</b>				
鉈	ナタ、コシナタ		山仕事や野良仕事の必需品。腰に下げ、山や川に持ち歩いた。ハシナタに対してハシナシナタとも呼ばれる。	只1_p074_ナタ
	ハシナタ、ハシツキナタ		嘴付鉈。刃先に突起（嘴）があるので、石や岩に当たっても刃がこぼれない。柴切りや刈り払い専用。	只1_p074_ハシツキナタ
砥石袋	トブクロ		砥袋。	
横挽鋸	ノコギリ、テンノウジ		鋸。天王寺式鋸。立木の伐採に用いる。	只1_p074_ノコギリ
	サンジャクノコ		三尺鋸。直径2尺以上の大木を伐採したり、玉切りや大枝落としなどに使用。モトヤマ（元山）と呼ばれ伐採を専門にする職人の用具。	
	マドノコ、カイリヨウノコ		窓鋸、改良鋸。2尺8寸以上の大木を伐採するのに使用する鋸。歯と歯の間に鋸くずをためて挽き出すための隙間（マド）がある。サンジャクノコの後、昭和10年ごろから使われた。	
	シンキリノコ		芯切り鋸。コミと呼ばれる長い部分を付けた鋸で、大木の伐採に使用。直径6尺以上の大木の芯を挽き切る。モトヤマ（伐採専門家）の道具。	只1_p075_シンキリノコ
	クマサカ、テコバ		熊坂。テンノウジとも呼ぶ小さい鋸。細い木を切るのに使用する。ハルキヤマ（春木山）といい、里人が燃料木を伐採するための個人的な小規模用具のひとつ。	只1_p074_テコバ
前挽鋸	マエツビキ、コビキノコ		縦挽き鋸。木挽き鋸。丸材を板に挽く縦挽き用の鋸で、モトヤマ（元山・伐採専門家）の道具。幅広く背の部分が湾曲したものが多い。	只1_p075_マエツビキ
鋸の鞘	ノコギリノサヤ		鋸の鞘。	
鑊	オオヤスリ		大鑊。	
	ハフリ		歯振り。	
鋸鉄	ノコギリバサミ		鋸の目立て。歯（刃）を研ぐときに使用。	
斧	ヨキ		ヨキは斧の別称で、会津地方では広く聞かれるが、浜通りではあまり聞かれない。立木を伐採する際、まずヨキ（斧）でウケ（受）と呼ぶ切り口を倒す側の幹に付ける。山出しの木材を削る（半割り）のにも使用する。	只1_p074_ヨキ
	キワリヨキ		木割り斧。切れ味はなく、刃の断面は楔型が多い。	
	ケズリヨキ		削り斧。	
	ココキ		小斧。	
	ヒロバヨキ		平刃斧。屋根などを角削りにするなど、削り仕上げに使用。刃渡り6寸以上で、オオハともいう。削り跡が波状になり、上手に付けられる人は削り上手といわれた。また、刃の向きを反対に使うと、屋根ふきの際の葺を切り落とすのにも使われた。	只1_p074_ヒロバヨキ
斧の鞘	ヨキノサヤ		斧の鞘。	
手斧	チュウナ、チヨウナ		手斧。屋根の削りに使用する。大工道具。	只1_p076_チュウナ
楔	ヤ		立木を伐採する際、まずヨキ（斧）でウケ（受）と呼ぶ切り口を倒す側に付ける。山出しの木材を削る（半割り）のに使用する。鋸の刃が挟まらないように打ち込む。キヤ（木矢）から後にカナヤ（金矢）になった。	
皮剥	カワムキ		材木の皮むきに使用する。	
	スギノカワムキ		杉の木の皮をむく。	只1_p076_スギノカワムキ
	カワムキカマ、カワムキッカマ		皮剥き鎌。材木の皮むき用のカマ。	只1_p076_カワムキッカマ
尻当て	シリシキ		ヒロロ等で編んだ尻敷き。鋸で伐採するときの尻当にする。大木を鋸で伐採するには多くの時間を要した。	只1_p076_シリシキ1 只1_p076_シリシキ2
<b>搬出用具</b>				
楔	キヤ		木矢。堅木製。立木を伐採する際、鋸の刃が挟まらないように打ち込む。玉切りや木割のときにも使用。	只1_p075_キヤ

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
楔	カナヤ、マキワリヤ		金矢。薪割矢。金属製。キヤ（木矢）から後にカナヤ（金矢）になった。木を切る際、鋸の刃が挟まらないように打ちこむ。	只1_p075_カナヤ
	ヒキヤ、クチャ			
	フクロヤ		袋矢。	
鳶口	トンビグチ、トンビ		鳶口。	只2_21206-18_トンビ
	トッコ		独鉈。	
梃子棒	ガンタ		材木の上下を替えたり、方向を替えたりするのに使用。柄と金具の間に材木を挟み、てこを利用して押したり引いたりする。	
	ドットコ		木材の移動に使う。地元の野鍛冶に依頼して作った。	
	ツル			
	ツカミ、カスガイ			
	オオツカミ			
	マンリキ			
	カジカン			
<b>炭焼用具</b>				
掻きだし棒	カキダシボウ、カンダシボウ		掻き出し棒。	
	カキカエシボウ		掻き返し棒。	
立又	タテマタ			
	クグリイシ			
<b>生産用具・漁撈用具</b>				
魚鈎	ヒキカギ		引き鈎。堰の下や湖にいる鱒を潜って引っ掛き取る。	只1_p078_ヒキカギ
	マスカギ、マスカカギ		鈎針を大きくしたような鈎。潜水し、深い淵にいるサクラマスの腹部をこの鈎で引っ掛けて獲る。夏季に使用。	只2_22102-3_マスカカギ
	オキカギ		置き鈎。紐を付けた鈎を川底に置き、鱒がそこを通るとき引っ掛けて獲る。	只1_p078_オキカギ
箱	ヤス		カジカなどの雑魚獲りに主に用いる。	只1_p078_ヤス
	マスツキヤス		刃の長さ23cm×幅15cm、柄の長さ2m弱ほどの大きなヤス。夏から秋にかけて、産卵のため上ってくる鱒を、草陰や岩の上から長いヤスで突く。山奥の沢へは柄の短いものを持参し、現場で細木を切って縛り付けて使った。	只1_p078_マスツキヤス 只2_22202-5_マスツキヤス
箱眼鏡	ハコメガネ		箱メガネ。	
ガンドウ	ガンドウ		龕燈。	
釜	タツベエ、タテドウ		タツベイとも。川や沼などの深い淵に設置する立型の釜。中に餌を入れ水中に立てて置く。只見の釜は、①アギ（返し）の有無 ②編み方（ザル編みで小さい：ウツボ、箕編みでねじる：ムジリなど） ③使用法（立てて：タツベ、横にして：ド：マスドウ・イシグラドウ）、で分類できる。	只1_p080_タツベエ1 只1_p080_タツベエ2 只2_22301-3_タツベエ
	ムジリ		秋の下り魚を捕獲する釜。ムジリは「曲げる」の方言で、柳や柴、篠竹で箕編みにしたものを捻った形で作る。アギは無く、横にして使用。川や堀に滝口を作り、上流に向けて口を据え、流れ下る魚を捕獲する。	只1_p081_ムジリ
	ドウ		横にして使用する、箕編み、アギ有の釜。口を下流に向けて寝せ、上ってくる魚を獲る。	只1_p080_ドウ 只2_22303-6_ドウ
	ドジョウドウ	ドジョウウツボ	小さな釜。堀や田の水口に据えて、ドジョウを獲る。釜類をウツボと呼ぶのは会津地方に多く、浜通りでは釜類をすべてドウという。	只1_p081_ドジョウドウ
	ドジョウドウノカタ		ドジョウドウの型。木型。	只1_p081_ドジョウドウノカタ
	オオカワドウ		大川ドウ。	
	イシグラドウ		冬期、川岸に穴を掘り、玉石と萱や藁、柳の枝などで魚の冬ごもりの場所を作っておき、初雪が降ったころ入口にドウを仕掛けて魚を獲る。	只1_p080_イシグラドウ 只2_22308-1_イシグラドウ
	マスドウ		鱒（サクラマス）を捕獲するための横型の釜。大堰の間に下流に向けて仕掛け、遡上する鱒を捕る。	只2_22309-1_マスドウ
	カナダライ		金盥。米糠やさなぎを入れて、水中に沈めて魚を獲る。	只1_p081_カナダライ 只2_22410-6_カナダライ
叉手網	サデアミ		サデア網。雑魚掬いに使う。	只1_p079_サデアミ 只2_22401-1_サデアミ
四手網	ヨツデアミ		四ツ手網。キネオトシを足に付けて、川上から川下へ追い込みながら、カジカなどを獲る。	只1_p079_ヨツデアミ 只2_22402-1_カジッカアミ
	キネオトシ		四ツ手網を使用するとき、足に付けて魚を網に追い込む。	只1_p079_キネオトシ 只2_22403-1_キネオトシ
投網	トアミ、マスアミ		投網。麻製の目の粗い網で鱒獲り用。ホリ（産卵場所）を狙って投網を投げる。	只1_p079_トアミ
投網入箱	トアミイレ、アミシヨイバコ		投網を入れ、背負って運ぶ。背板に湾曲した櫛の皮を取り付け、底板をはめて背負う。	只1_p079_アミシヨイバコ



名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
網針	アバリ、アミスキバリ		網針。	
	ユウズ		網集結用。	
糸巻	イトマキ		糸巻き。	
釣竿	アユツリザオ		鮎釣竿。	
魚箱	サカナバコ、オトリバコ		魚箱。	只2_22502-4_オトリバコ
	アユイレ		鮎入れ。	
たも網	タモ			
	イヨグシケズリダイ		魚串削り台。	
	イタオトシ			只2_22902-2_イタオトシ
	タイマツアカシ			只2_22903-2_タイマツアカシ
<b>生産用具・狩猟用具</b>				
槍	シシツキヤリ		シシ突き槍。熊・カモシカなどの大型獣を突く槍。鉄砲以前に使用された。シシツキヤストともいう。	只1_p084_シシツキヤリ
罾	バンオン		板オン。小動物の捕獲用の罾で、主にイタチを獲る。オンは「押し」か。	只1_p086_バンオン
虎挟み	トラップ		ウサギ・イタチ・テン・タヌキなど小動物を獲る罾。	只1_p086_トラップ 只2_23104-3_トラップ
	トラバサミ		熊などの大形獣を捕獲する罾。	只1_p086_トラバサミ 只2_23105-5_トラバサミ
猟銃	ヒナワジュウ		火縄銃。	只1_p084_ヒナワジュウ
火打ち入れ	イウチイシイレ		火打ち石入。	
火薬入れ	カヤクイレ		火薬を入れて携帯。	只1_p084_カヤクイレ
弾入れ	タマイレ		弾を入れて携帯。	只1_p084_タマイレ
弾作り	ナマリトカシ		弾のもとになる鉛を溶かす。	
	タマツクリ、タマハサミ		玉作り。弾丸の型。	只1_p084_タマツクリ
毛皮作り	カワハリバリ、カフスイバリ		皮張り針。熊などの大型獣の皮を張る時に使う。長さ12ミリ、太さ4ミリもある大きな針で鍛冶屋が作った。	只1_p085_カワハリバリ
山刀	コガタナ、コシナタ		小刀。	只2_23901-1_コシナタ
	サバキコガタナ		さばき小刀。獲物のめたて（腑分け）などに使用する。	只1_p085_サバキコガタナ
鋸	テノコギリ			只2_23902-1_テノコギリ
斧	コヨキ			只2_23903-1_コヨキ
熊の胆型	クマノイホシ		熊の胆干し。熊の胆を乾燥するのに使う。	只1_p085_クマノイホシ
背負い袋	アミブクロ		網袋。狩りの諸道具を入れるほか、ウサギ・テンなどの獲物入れにも使用する。麻糸で網状に編んだもので、白糸のままでは山の神に失礼になり、獲物も獲れないといい、熊の血で染めて使用した。	只1_p085_アミブクロ 只2_23401-1_アミブクロ
荷縄	ニナワ			只2_23403-2_ニナワ
手袋	テッカワ		狩りのとき、急斜面の雪を掻き分けるのに使用する。カモシカの皮製。	只1_p085_テッカワ 只2_23510-3_テッカワ
奉納具	ケンバ		剣刃。鉄製の小さな剣。山の神のマツリギに刻まれた鳥居形に突き刺されていることが多い。	
幣束	ヘイソク		山の神の祭日（2月12日と12月12日）に、屋敷に山の神を祭っているヤマサキ（山先）が、幣束を作って参拝に訪れた村人に配り、一年の山中安全を祈る。	
旗	サンジンサマノハタ		山神様の旗。山の神の奉納旗。	只1_p086_サンジンサマノ旗
御幣	ヤマサキノゴハイ		山先の御幣。ヤマサキが山の神の祭に御幣を作り各戸に配る。	只1_p126_ヤマサキノゴハイ
おこぜ	オコゼ		豊猟や山中安全を祈願して、山の神に奉納する。	只1_p126_オコゼ
注連縄	ヤマイリノシメ		山入りの注連。正月の2日に山の入口に注連縄をあげ、一年間の山の安全を祈願する。	只1_p126_ヤマイリノシメ
鰐口	ワニグチ		鰐口。旧法印（修験）宅のお堂にあったもの。	只1_p124_ワニグチ
版木	イクサガケエマの版木		イクサギに奉納する馬の絵の板木。イクサギは山と里の境界にあるブナや杉の大木で、山の神として祀られた。馬の絵を狩人の人数分重ねて、山の神の木に突き刺し山の神に豊猟・安全を祈る。ここから先は山言葉の生活に入る。	只1_p086_イクサガケエマの版木
<b>生産用具・畜産用具</b>				
<b>飼育用具</b>				
押切	オシギリ		押切。飼葉藁を切ったり、刈敷の草類を切る。	只1_p090_オシギリ
	ワラキリキカイ		藁切り機械。飼葉藁を切る。	只1_p090_ワラキリキカイ

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
飼葉入れ	カイバオケ		飼葉桶。	
	ウマノフネ		馬の飼葉入れ。	只1_p090_ウマノフネ
馬栓棒	マセンボウ			
爪切り具	ツメキリ		爪切り。牛用。	
	ヨコツチ		横槌。馬のツメ切り用。	
	トリノエサツキ		鶏の餌突き。	
餌入れ	トリノエサイレ		鶏の餌入れ。	
<b>牛馬付属用具</b>				
鼻環通し	ハナカンドウシ		鼻環通し。	
轡	ウマノクツツ		馬の轡。	
口籠	ウマノクチカゴ		馬の背に稲を積んだとき、稲を食べないように、また道草を食わないように馬の口にはめる。	只1_p090_ウマノクチカゴ 只2_24203-2_ウマノクチカゴ
型	ウマノクチカゴノカタ		馬の口籠を作る時の型。	只1_p090_ウマノクチカゴノカタ
馬の沓	ウマノクツ		蹄鉄以前に馬の足にはかせたもの。	只1_p090_ウマノクツ
鞍下	クラシタ		鞍下。	
腹帯	ハラオビ		腹帯。	
荷鞍の付属具	クルリ		荷鞍の付属具。荷を積むとき、荷紐を通して締める。木の輪。	
蹄鉄	テイテツ		蹄鉄。	
<b>その他</b>				
鉋	メンヨウノケカリバサミ		綿羊の毛刈り鉋。	
	メンヨウノシッポキリ		綿羊の尻尾切り。	
型	メンヨウノシッポキリノカタ		綿羊の尻尾切りの型。	
<b>生産用具・養蚕用具</b>				
<b>桑摘み用具</b>				
桑切鎌	クワキリガマ		桑を刈る鎌。	
桑笊	クワイレザル、クワザル		蚕に桑を補給するのに使用。	只1_p088_クワザル
桑摘み籠	クワトリハケゴ		桑採りハケゴ。腰に付け桑を摘み入れる。	只1_p088_クワトリハケゴ
桑籠	クワカゴ		桑籠。摘んだ桑はこの籠に入れて運ぶ。	只1_p088_クワカゴ
<b>飼育用具</b>				
種紙	コダネイタ		蚕種子板。蚕に卵を生ませるときの型紙台。	只1_p088_コダネイタ
桑切包丁	クワキリボウチョウ、クワキリホイチョウ		桑切包丁。稚蚕用に桑を細かく切って与える。	只1_p088_クワキリホイチョウ
桑切機	クワキリキ、クワキリキカイ			
蚕座	コガイカゴ、コガイバコ		蚕を飼うための籠や箱。	
蚕網	カイコアミ、イトアミ		蚕網、糸網。	
蚕網作り台	カイコアミダイ、カイコアミツクリダイ		蚕網台、網作り台。飼育箱の下に敷くコガイアミ（蚕飼網）を作る台。	只1_p089_アミツクリダイ
給桑台	キュウソウダイ、コガイバコダイ		給桑台。	
養蚕棚	コノメ、コガイダナ			
蚕火鉢	ダンロ		暖炉。	
<b>上簇用具</b>				
蚕籠	ワラダ、カゴワラダ		薬座。薬で丸く浅く編みあげた古い形式の竹籠。蚕をワラダに広げ、その上にマブシをかけて繭を作らせる。また飼育台としても使用する。	只1_p089_ワラダ 只2_25301-1_ワラダ
	ワラダガミ		薬座紙。	
上簇籠	ジョウゾクカゴ		上簇籠。	
蚕盆	アゲボン		揚げ盆。蚕が上簇するとき、ひき蚕（糸を出す蚕）を拾い上げるお盆。	只1_p089_アゲボン
簇織り機	マブシオリキ		簇織機。マブシを織るのに使う。	只1_p089_マブシオリキ
簇	マブシ		簇。薬で山形に折りたたむ形式。蚕はこの谷間に繭を作る。	只1_p089_マブシ
毛羽取り機	ケバトリキ		毛羽取機。	
	マヌノセンベツキ		繭の選別器。	

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
	フーデエ		風袋。	
<b>生産用具・染織用具</b>				
<b>苧挽用具</b>				
苧引き槽（ふね）	オヒキブネ		苧引き槽。削り抜きの浅い槽形のもの。中にオヒキダイを入れ、オヒキガネで表皮（そ皮）を剥ぎ取る。	只1_p092_オヒキブネ
苧引き板	オヒキダイ		苧引き台。杉や松材を使って自作。オヒキブネの中に入れ、オヒキガネを使って表皮を剥ぐ。	只1_p092_オヒキダイ
苧引き金	オヒキカナガ、オヒキ、オヒキガネ		苧引き金具。麻の表皮を削り取る道具。オヒキダイと対で使用。	只1_p092_オヒキ
苧桶	オボケ		苧桶。ネズコ（黒檜）と桜で作られた曲物で、績んだ麻糸を入れる。娘は13歳頃になるとオボケを与えられ、苧績みを習い始める。	只1_p093_オボケ
糸からみ	クルワ、イトクリ、イトケエシ		イトグルマで縫いを掛けながら管に巻いた糸を、クルワに巻き直して長い一本の糸にする。	
<b>整糸用具</b>				
座繰	ザグリ、ザングリ		座繰。繭から糸をとるときに、コワク（小杵）にからむ。	只1_p095_ザグリ
糸繰り車	イトツムギ、イトグルマ、ツムギワク		糸紡ぎ。糸に縫いを掛ける時、ヒの中に入る緯糸（管）を巻くの使用する。	只1_p095_イトツムギ
糸杵	イトワク、イトトリワク		糸杵。絹・麻などの糸を巻く。	只1_p095_イトトリワク
	イトコワク		糸小杵。	
	イトワクバコ		糸杵箱。イトワクを入れる箱。	只1_p095_イトワクバコ
総杵	カセワク、イトクリカエシ		カセ杵。繭からコワクに引き上げた糸を繰り返す（カセ）ときに使用する。	只1_p095_カセワク
糸ほぐし	トンボ、イトホグシ			
	ツヅミダイ			
足踏式糸取機	イトトリキ、イトトリキカイ		糸取機。繭から絹糸を引き出し、コワクに巻く。	只1_p094_イトトリキカイ
糸繰り返し機	イトケイシ、イトクリカエシキ		糸繰り返し機。繭からワクに取った糸は粘っているので、濡らした別のイトワクに繰り返す。	只1_p094_イトクリカエシキカイ
揚げ返し杵	アゲカエシワク		揚げ返し杵。	
糸計り	デニールキ		デニール機。生糸の太さを計る。	只1_p094_デニールキカイ
	ボウモウキ		紡毛機。	
綿繰り	ワタノタネトリキ		綿の種子取機。サネドリと呼ぶ地域もある。	
<b>地機用具</b>				
地機	ジバタオリキ、ジバタ		地機織機。座った形で織る機。麻・カラムシ・木綿・絹織りに使用するが、主に麻が多い。只見地方は地機の使用が多かった。	只1_p096_ジバタオリキ
糸巻	ジバタノイトマキ		地機の糸巻。地機で機を織るとき、へた糸をハタクサで押さえながら巻く。	只1_p096_ジバタのイトマキ
腰当て	コシアテ		腰当て。地機の場合、樺の皮を用いる。	
綾棒	アヤカケ		綾掛け。	
	イトホゴシボウ		糸解し棒。	
	ハタヘベラ		機経篋。	
	クダマキ		管巻き。	
<b>高機用具</b>				
高機	タカハタ		高機。腰かけた状態で織る機。絹・木綿織りに使用する。福島県内ではほとんど高機を使用。	只1_p097_タカハタ
杼	タカハタノヒ		高機の杼。経糸の間にヒを通し、織り込んでゆく。	只1_p097_ヒ
糸綾	イトアヤ		糸綾。布目を作るため、経糸を通す。絹用。麻用は目が広がる。	只1_p097_イトアヤ
金綾	カネアヤ		金綾。昭和初期からイトアヤにかわり使用される。絹用。糸のすべりがよく織りやすい。	只1_p097_カネアヤ
綾棒	イトアヤノボウ		糸綾の棒。	
管入	クダイレ		管入れ。クダを入れる箱。クダ（管）は糸を巻く芯。萱（かや）など。ヒの中に入り、緯糸となる。	只1_p097_クダイレ・クダ
<b>機織関連用具</b>				
経台	ハタヘ		機経。	
機織始め布	ハタオリハシメヌノ		機織始め布。機を織る時に布巻棒に巻き、先の糸を機の糸とつなぎ合わせる。	只1_p097_ハタオリハシメヌノ

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
箒	オサ		箒。	只1_p096_オサ・オサオサエ
箒押え	オサオサエ		箒押え。機を織るときオサが動かないようにはめこみ布目をしめる。	只1_p096_オサ・オサオサエ
箒入箱	オサバコ		箒箱。オサは何回となく使用するため、箱に入れ大切に保管する。	只1_p096_オサ・オサバコ
機針	シンシ		伸子。	
布巻	ハタクサ		機が織り進んだとき、糸を巻いたものがほぐれ易くするためと、糸巻きをするとき、糸がゆるまないように使用する。	只1_p096_ハタクサ
<b>シナ糸作り</b>				
	ヨッツォカラミ、マトウリ		ヨッツォ（シナツカワの糸）つくりの道具。雑穀の脱穀に用いるマトウリが転用された。ヨッツォは畳表の縦糸に利用。	只1_p098_ヨッツォ・ヨッツォカラミ 只1_p098_ヨッツォカラミ・マトウリ 只2_28301-1_ヨッツォ
	ヨッツォカケ、タタミイトカラミ		ヨッツォ掛け。畳糸を絡めるのに使う。	只1_p098_ヨッツォカケ
<b>生産用具・手工用具</b>				
<b>藁加工用具</b>				
藁すぐり	ワラスグリ		藁選り。藁細工をするとき、シビ（はかま）をとる。厚板を櫛の歯状に作ったものや木の又を利用して作ったものなどがある。	只1_p100_ワラスグリ1 只1_p100_ワラスグリ2 只1_p100_ワラスグリ3 只1_p100_ワラスグリ4 只1_p100_ワラスグリ5
ヒロロすぐり	ヒロロスグリ		ヒロロのハカマを取る。すぐる。	
藁叩き	ヨコヅチ		横槌。すぐった藁をやわらかくするために打つ道具。	只1_p101_ヨコヅチ
	カケヅチ		掛け槌。2人がカケヅチとヨコヅチを持って向かい合い、交互に藁を打つ。	只1_p101_カケヅチ1 只1_p101_カケヅチ2
	ワラウチキ		藁打ち機。	
毛むしり	ケムシリ、カマコガタナ		毛むしり。藁細工の仕上げに、不要な藁の先（ひげ）を切り取る。	只1_p101_ケムシリ
型	ゲンベイガタ		ゲンベイを作るとき、はめ込んで編むための型。	只1_p102_ゲンベイノカタ・ヒゲキリダイ
	オソフキノカタ		オソフキの型。オソフキ（ワラジのつまがけ）を作るときに使う。	只1_p102_オソフキノカタ
草鞋編み台	ゾウリダイ	クサシ	草履台。本来は両足の親指に縄を掛けてゾウリを作るが、足が痛くなるのでこの台を利用した。クサシは中通り・浜通りの方言で手抜きという意味。	只1_p101_ゾウリダイ
編み機	ハバキアミダイ		脛巾編み台。ハバキを編むときの台。	只1_p103_ハバキアミダイ
	ハバキヅチ、イトカラミ		脛巾槌。ハバキを編むときのおもり。	只1_p103_イトカラミ
	コモアミダイ		菰編み台。コモツチを前後交互にして編み込んでいく。菰・炭俵などを編む。	只1_p103_コモ編み
	コモアミノアシ		菰編みの脚。	
	コモヅチ		菰槌。	
	ムシロバタ、ムシロオリ		筵機。ヒをたたく人（杵取り）、藁を入れる人（サンゴさし）の2人で織る。	只1_p103_ムシロバタ
	ムシロオリヒ、ムシロビ		ムシロを織るとき、たて縄を通すのに使う。	只1_p103_ムシロビ
	ムシロオリキ		筵織機。	
	モッコアミダイ		畚編み台。	
ゴザオリヒ		蓆織機。		
<b>つる細工用具</b>				
	マタタビサキ		マタタビの蔓を裂く用具。二ツ裂き・三ツ裂き・四ツ裂きなど目的に応じた種類がある。使いやすいう自作するので、十字型や紡錘型などがある。滑りがよくて堅いユキツバキが一般的に使われるが、ホオノキ、サクラ、ニレなども使う。	只1_p104_マタタビサキ1 只1_p104_マタタビサキ2
	マタタビヒキ		裂いたマタタビの蔓を一定の太さにするための用具。古い鎌や鋸、小刀やヤスリ等を転用した。刃に数種類の凹みをつけておき、そこに蔓を押し当てて引くと同じ幅のヒゴになる。	只1_p104_マタタビヒキ
	ハバツメ		マタタビ細工を製作する過程で、ゆるみを取るための用具。カモシカの角やマイナストライバーなどを改造して利用することが多い。	只1_p104_ハバツメ
<b>生産用具・諸職用具</b>				
<b>大工用具</b>				
墨壺	スミツボ		墨壺。	
罫引き	ケイヒキ		罫引き。	
鉋	カンナ		鉋。	

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
廻挽鋸	ヒキマワシ		挽き廻す鋸。	
玄翁	ゲンノウ		玄翁。	
<b>桶・樽職人用具</b>				
銚	セン		オケゴ(桶木)を削るのに使用する。	只1_p107_セン
槍鉋	ユリノハ		桶の内側を削る。	只1_p107_ユリノハ
	オケゴワリ		桶木割り。	
丸鉋	マルカンナ		丸鉋。桶木を削るとき使う。	只1_p107_マルカンナ
型	オケノカタ		桶の型。	
<b>屋根葺職人用具</b>				
屋根鉋	ヤネフキバサミ、ヤガリバサミ		屋根葺き鉋。南会津地方には刃と柄が蛙の脚のように曲がっているものとはば一直線のものと2種の形態が見られる。曲がったものはカエルマタ(蛙股)とも呼ばれ、明治期の古い形態。	只1_p105_ヤネフキバサミ
コテ	ガンギボウ、ガギボウ		ガギ棒。葺いたあと、突き出ている葺を叩いたり押し下して表面を平らに整える用具。杉や檜などの長方形の厚板の片面に刻みを入れ、背面に長い柄をつけた。単にガンギと呼ばれることもある。	只1_p105_ガギボウ
<b>鍛冶屋職人用具</b>				
鑪	フイゴウ、フイゴ		鑪。野鍛冶・蹄鉄ぶち・鑄掛屋・木地挽・石屋などの職人が使用する。火を扱う職人は、12月に鑪祭をして祝う。	只1_p108_フイゴウ
<b>石工職人用具</b>				
石割	イシワリ		石割り。セットウで打ち叩き、石を割る。	只1_p108_イシワリ
	イシワリゲンノウ		石割り玄翁。石工用具。	只1_p108_イシワリゲンノウ
せつとう	セットウ		石割りのとき、楔を打ったりする。	只1_p108_セットウ
目切り手斧	メキリチュウナ		目切り手斧。石白の目が浅くなったときに彫り直す。	只1_p108_メキリチュウナ
<b>その他</b>				
付木作り具	ツケギツケダイ		付け木突き台。付け木は松の木を鉋台の上で薄く削り、先に硫黄を塗って作る。	只1_p106_ツケギツケダイ 只1_p106_ツケギツケダイ
杓子作り具	マルセン		杓子ぶち職人用。杓子の仕上げ削りに使用する。	只1_p107_マルセン
臼作り具	テホリチュウナ		手彫り手斧。白彫りや太鼓胴作りなど、内部を削り抜くときに使用する。	只1_p106_テホリチュウナ 只1_p106_チュウナ
<b>交通・交易／運搬用具</b>				
<b>背負用具</b>				
背負い縄	ニナワ、ニナ		荷縄。荷物を背負う時に用いる。使用頻度が高く、山仕事に多く用いられるため、シナツカワでできた丈夫なシナニナが多い。	只1_p116_ニナ
	シナニナ		シナ荷縄。会津地方に多い。肩にあたる中央部分は太めになる。	
	ホソビキ		細引き。	
背中当て	ネコミノ	ニシヨイミノ	ネコ糞。荷背負い専用の糞で、セナカアテ(背中当て)とも呼ばれる。雨糞との兼用で、家印や縁起の良い模様を布で織りこんだものもある。	只1_p117_ネコミノ1 只1_p117_ネコミノ2 只1_p117_ネコミノ3 只1_p117_ネコミノ4 只2_31105-3_ネコミノ
	バンドリ、セナカアテ		背中当ての一種で、腰にあたる部分に丸みをつけて作ったもの。バンドリという呼称は、福島県では只見地方のみ分布している。	只1_p116_バンドリ1 只1_p116_バンドリ2 只1_p116_セナカアテ1 只1_p116_セナカアテ2 只1_p116_セナカアテ3 只2_31106-14_バンドリ
	セナカアテ、ムシロミノ、ヒトカワミノ		背中当て。重荷を背負うときに背が痛くならないようにあてる。多くは糞で作るが、シナ皮やヤマブドウ皮で作る場合もある。	
背負子	ショイバシゴ	ヤセウマ	背負い梯子。木の又を使用し、荷物の支えとする。会津地方ではヤセウマの呼称が多い。	只1_p114_ショイバシゴ
荷杖	ニツエ	ニンツイ	荷杖。重い荷を背負ったとき、先の曲がった部分に荷重をかけて休むのに使う。	只1_p114_ニツエ
背負い籠	ソラックチ	ソラッカゴ、タガラ、タンガラ	空口。主に堆肥運びの時に背負う。ほかに田植えの苗や、大根、パレイショ、白菜などといった野菜など、ニナワでは背負えないもの運ぶ。	只1_p114_ソラックチ
	タガラ		大堰普請や堤防の石垣積みするとき、玉石などを背負って運ぶのに使用する。	只1_p114_タガラ 只2_31113-15_タガラ
	ショイカゴ		背負い籠。山菜、弁当、山道具などを入れて背負う。また、採取したゼンマイがコシカゴいっぱいになると、大きなショイカゴに詰め替えた。薬やヒロロなどで袋状に編んだものを、ニナワで背負って運ぶ。	只1_p115_ショイカゴ1 只1_p115_ショイカゴ2 只1_p115_ショイカゴ3 只1_p115_ショイカゴ4
背負い袋	アミブクロ	アンプクロ	網袋。アンプクロとも。麻糸で網状に編んで作った背負い袋で、肩から斜めに背負う。ウサギやムササビなどの獲物のほか、メツバ・テツカワ・ニナワなどの山道具入れとしても使用する。	只1_p115_アミブクロ

名称	只見での呼称	福島県での呼称	説明	画像ファイル名
<b>肩掛用具</b>				
天秤棒	モッコボウ		畚棒。単なる棒で、棒の中央に荷を下げて、二人で担ぐ。ここから「人をかつぐ」の例えが生まれた。かつがれて落とされる。	
	テンピンボウ		天秤棒。下肥を入れて畑まで担ぎ、肥柄杓で肥を蒔きつける。しなりのよい木を使い、棒の両端に荷を下げて、一人で担ぐ。	只1_p113_テンピンボウ・コイオケ
	ミズハコビボウ		水運び棒。桶に飲み水を入れて担ぐ棒。水汲み天秤ともいい、テンピンボウ同様に、棒の両端に荷を下げるが、水運びにはしならない木を使い、金鎖で桶を下げる。揺れないので水がこぼれない。	只1_p113_ミズハコビボウ
天秤桶	テンピンオケ		天秤棒で担いで運ぶのに使う桶。	
肥桶 下肥桶	コイオケ、フリオケ	ダラオケ	肥桶。振桶。弦の付いた桶の中に、クミビシヤク（汲柄杓）で便所や肥溜めから糞尿を汲み取り、テンピンで前後1桶ずつ担ぐ。畑で下肥を蒔くときは、柄が短く柄杓も小さいフリビシヤク（振柄杓）を使う。	只1_p113_テンピンボウ・コイオケ 只2_31206-3_フリオケ
肥樽	コエダル		樽に下肥を入れ背負って運ぶ。急斜面の山道では天秤は使えない。	
肥柄杓	コイビシヤク、クミビシヤク		肥柄杓。肥溜から下肥を汲み揚げるとき使用する柄杓。	只1_p113_コイビシヤク 只2_31207-8_クミビシヤク
<b>腰下用具</b>				
腰籠	コシカゴ		腰籠。採取したゼンマイなどを入れた。薬やヒロロなどで袋状に編み、紐で腰に結びつけて使用する。大きめの籠形で、くびれはない。	
	ハケゴ	フゴ	吐籠。作業時に腰に付け、収穫物を入れたり、栗拾いなどに使用する。コシカゴ同様に腰にゆわえるが、魚入れのピック形で胴にくびれがある。種子入れ、又はきのこ入れなどにも使用。	只1_p113_ハケゴ 只2_31302-10_ハケゴ
<b>人力運搬用具</b>				
荷縄	カタナワ、カタニナ		肩縄。藁とシナツカワで編まれた引綱。桶を引くときに肩に掛ける。	只1_p118_カタニナ 只2_31401-17_カタナワ
	キンメナワ		桶用の荷縄。	
轆	ソリ		轆。重い材木を運ぶヤマゾリ（山轆）と春木伐りの薪・柴などを運ぶサトゾリ（里轆）がある。ヤマゾリは幅広く頑丈、サトゾリは幅狭く軽量で滑りやすくできている。	只1_p118_ソリ1 只1_p118_ソリ2
	コエヒキゾリ		肥引轆。水田に堆肥を運ぶのに使用。	
	カクゾリ、ヤマゾリ、ヤマダシソリ、オオゾリ		角轆。ヨツヤマゾリともいう。大木を山から搬出するときに用いる。長さ6尺ほどの大きな轆。	只1_p119_カクゾリ
	バチゾリ		バチ轆。屋根などの大木を山から搬出するのに使用する。長さ1メートル前後の丈の短い小型の轆で、材木の一方を轆にのせ、後は地につけたまま引く。	只1_p119_バチゾリ
	ウデギ		腕木。自然木を利用。	
	カジボウ		梶棒。	
	クルリ		ツケナ（荷物を縛る縄）の先に付け、一方のツケナを通し滑車がわりに荷物をしめるのに使う。	只1_p118_クルリ
	タガ		轆に材木や薪を積んで急坂を下るとき、滑り止めに利用。轆のハナにタガをかけて速力を調整した。藤製。	只1_p118_タガ
	コドモソリ		子供の遊び用の轆。木の箱を付けたりする。	只1_p119_コドモソリ
荷車	ニグルマ		荷車。各種の荷物を運搬する。	只1_p120_ニグルマ
<b>畜力運搬用具</b>				
鞍	バシヤウマノクラ		馬車馬用の鞍。	
	ニグラ		荷鞍。馬の背に装着し、稲束や物資を運ぶ。	
	ジョウバグラ		乗馬用の鞍。	
<b>その他</b>				
箕	サデミ、エボ		土砂や堆肥を運ぶ時に使用する。	只1_p113_サデミ 只2_31901-8_サデミ
鉄索	カゴハシ、テッサク		只見川には籠渡しが数か所にあり、川向いの田畑に渡った。川にワイヤーを張り、滑車を付けた籠に乗り、自らワイヤーに手を掛けて籠を移動させる。このワイヤーを鉄索繰り綱という。	只1_p112_テッサク
櫂	カイ		櫂。筏を組んだ木流しに使用する。	只1_p120_カイ
渡舟	ワタシブネ		渡し舟。只見川は川幅も広く、水害も多かったため渡し船を利用し対岸へ渡った。	
橋	イッポンバンシ		一本橋。伊南川に架けた一本橋。主に冬期間に架ける。	只1_p112_イッポンバンシ



只2\_11101-56\_シゴトシ



只1\_p016\_ハダッコ



只2\_11102-5\_ジバン



只1\_p016\_サシハダッコ



只2\_11103-2\_サシハダッコ



只1\_p017\_サシコハンテン



只2\_11104-1\_サシコジュバン



只2\_11104-2\_サシコジバン



只1\_p018\_オミンノコ



只1\_p018\_ミジカワタイレ



只2\_11105-1\_シノコ



只2\_11105-5\_オミンノコ



只1\_p018\_ソデナシ



只1\_p020\_カミシモ



只1\_p020\_アワセモンツギ



只1\_p020\_フタイレモンツギ



只1\_p019\_カリアガリユッコギ



只2\_11207-16\_ユッコギ



只2\_11201-5\_ホソツバカマ



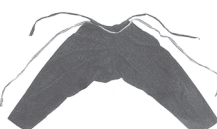
只2\_11201-48\_カリアゲユッコギ



只1\_p019\_ユッコギ(ブタユッコギ)



只2\_11203-14\_ダフユッコギ



只1\_p019\_モンベ



只2\_11401-5\_ミノ



只1\_p022\_ケミノ1



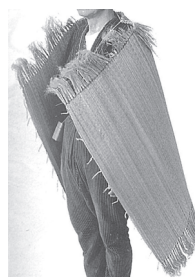
只1\_p022\_ケミノ2



只1\_p064\_ヒゴモ



只1\_p023\_キゴザ1



只1\_p023\_キゴザ2



只1\_p023\_カサガッパ1



只1\_p023\_カサガッパ2



只1\_p021\_カンゼンブシ1



只1\_p021\_カンゼンブシ2



只1\_p026\_ヤマゲンベイ



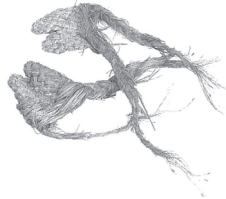
只1\_p026\_ワラグツ



只1\_p025\_オソフキワラジ



只2\_11603-2\_オソフキワラジ



只1\_p025\_オソフキ



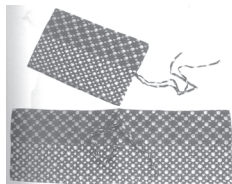
只1\_p028\_フカグツ



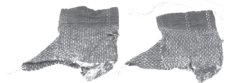
只1\_p027\_シブッカラム1



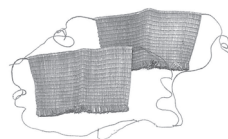
只1\_p027\_シブッカラム2



只1\_p027\_シブッカラム3



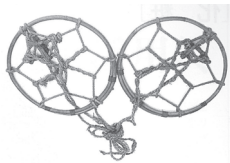
只2\_11606-4\_シブッカラム



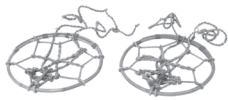
只1\_p026\_ノバキ



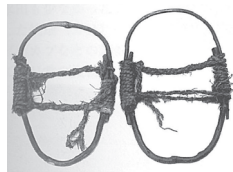
只1\_p025\_サシコタビ



只1\_p029\_マルカンジキ



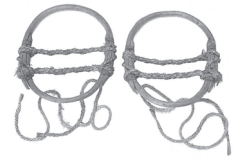
只2\_11613-1\_マルカンジキ



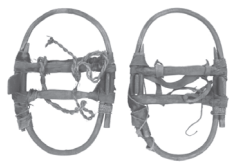
只1\_p029\_コカンジキ



只2\_23513-1\_ツルカンジキ



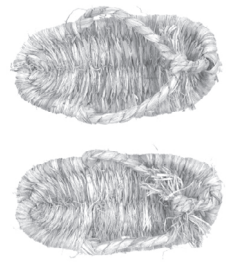
只1\_p029\_ツメカンジキ



只2\_23508-2\_ツメカンジキ



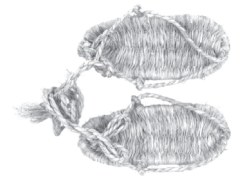
只1\_p024\_アシナカ



只2\_11701-4\_アシナカ



只1\_p024\_ワラジ



只2\_11702-20\_ワラジ



只1\_p024\_ヨツジワラジ



只1\_p024\_ゾウリ



只1\_p025\_ツマガケ1



只1\_p025\_ツマガケ2

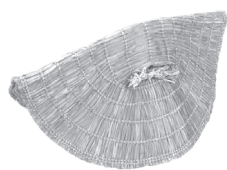


只1\_p029\_カナカンジキ





只1\_p021\_アミガサ



只2\_11801-8\_アミガサ



只1\_p030\_テカガミ

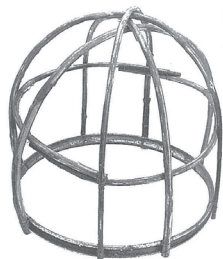


只1\_p030\_オハグロツボ

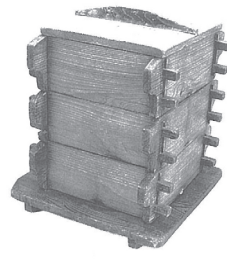


只1\_p030\_チョウズバチ

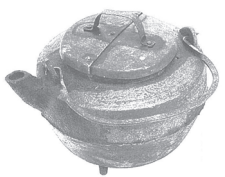
生活用具・食生活用具



只1\_p046\_オシメホシ



只1\_p034\_セイロウ



只1\_p035\_ユッカマ



只1\_p035\_シッコノノ(七升ノノ)



只1\_p035\_イリナベ



只1\_p035\_ホケイ1



只1\_p035\_ホケイ2



只1\_p035\_オヒツ



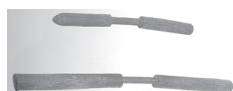
只1\_p040\_ハンギリ



只1\_p043\_トギナ



只1\_p034\_ウス・キネ



只1\_p033\_テギネ



只1\_p033\_クボウス



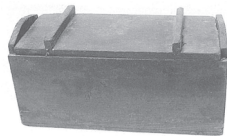
只1\_p033\_ヒキバチ



只1\_p034\_モチオシボウ・モチオシバン



只1\_p040\_マナイタ



只1\_p040\_ドウガバコ



只1\_p043\_ミソベラ



只1\_p036\_スイノウ



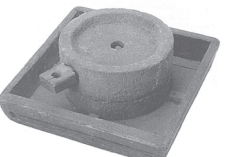
只1\_p036\_メシアツタメ



只1\_p036\_アケビザル



只1\_p036\_コザル



只1\_p033\_イシウス



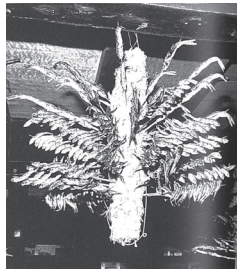
只1\_p044\_センベイヤキ



只1\_p044\_カシガタ



只2\_12244-3\_マル



只1\_p082\_クシイオ、マル



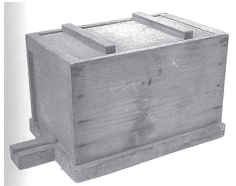
只1\_p037\_ミズクミ



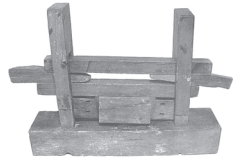
只1\_p040\_マナバシ



只1\_p032\_トチムキ



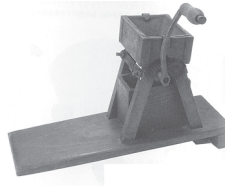
只1\_p039\_ショウユシボリ



只1\_p039\_アブラシメ



只1\_p038\_セイヅチ



只1\_p044\_ムギツツシ



只1\_p037\_オケ



只1\_p034\_モチオケ



只1\_p034\_フカシオケ



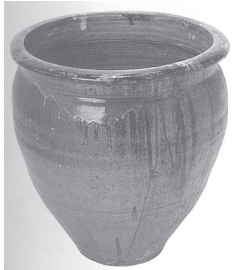
只1\_p037\_カタテオケ



只1\_p041\_ヤナギダル



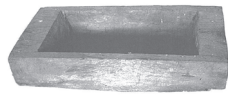
只1\_p037\_カメッコ



只1\_p037\_ミズガメ



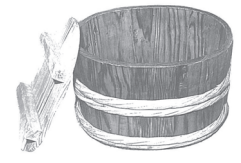
只1\_p037\_ドブコガメ



只1\_p039\_シオブネ



只1\_p039\_シオタライ



只1\_p038\_スシオケ



只1\_p042\_ボン



只1\_p041\_チョウアシゼン



只1\_p042\_ハコゼン



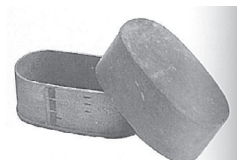
只1\_p041\_コトジ



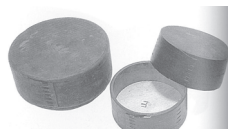
只1\_p041\_コトジノボン



只1\_p042\_メツバ



只1\_p042\_セイイレメツバ



只1\_p042\_マルメツバ



只1\_p041\_ドブコツギ

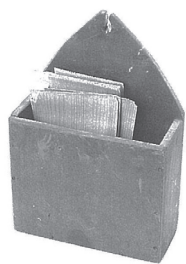


只1\_p044\_サトイモアライ

生活用具・住生活用具



只1\_p046\_ツケギ



只1\_p046\_ツケギバコ



只1\_p046\_ヒウチバコ



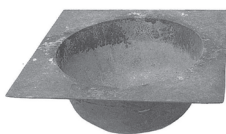
只1\_p046\_カギザオ



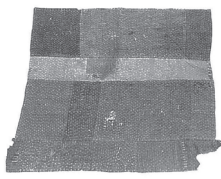
只1\_p046\_ジザイカギ



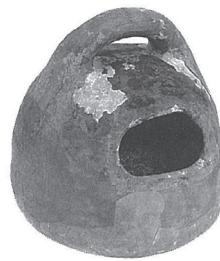
只1\_p047\_コタツヤグラ



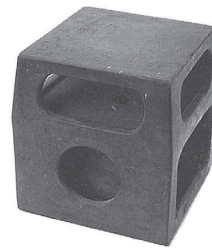
只1\_p047\_コタツナベ



只1\_p047\_コタツガケ



只1\_p047\_ヒバコ



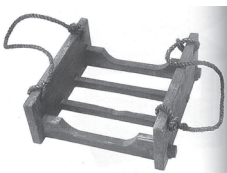
只1\_p047\_ニカイアンカ



只1\_p047\_ヒケシツボ



只1\_p048\_マツワリチュウナ



只1\_p048\_マツホシ



只1\_p048\_トウガイ1



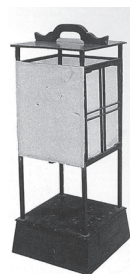
只1\_p048\_トウガイ2



只1\_p048\_マツアカンダイ



只1\_p049\_アンドン1



只1\_p049\_アンドン2



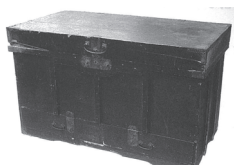
只1\_p049\_ゴヨウランプ



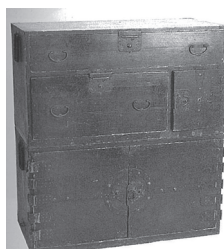
只1\_p049\_ガストウ



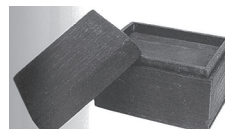
只1\_p049\_ランプ



只1\_p053\_キンビツ



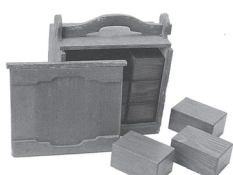
只1\_p053\_タンス



只1\_p053\_スズリバコ



只1\_p053\_テバコ



只1\_p052\_ハコマクラ



只1\_p052\_フナソコマクラ



只1\_p052\_ヨギ



只1\_p051\_トコバコ



只1\_p054\_コウシキ1



只1\_p054\_コウシキ2



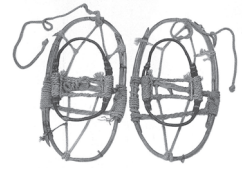
只2\_23909-1\_コウシキ



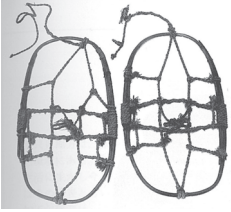
只1\_p054\_コウシキノヤマトリ1



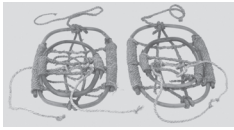
只1\_p054\_コウシキノヤマトリ2



只1\_p028\_ツルカンジキ



只1\_p029\_ツルカンジキ



只2\_13603-19\_ツルカンジキ



只1\_p050\_ヒブセ(女)



只1\_p050\_ヒブセ(男)



只1\_p047\_ネコチグラ

生産用具・農耕用具



只1\_p043\_ミズフネ



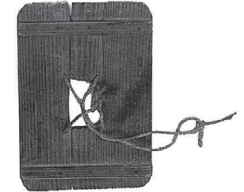
只1\_p061\_クワ



只1\_p060\_タゴシラエグワ



只1\_p060\_テツラ1



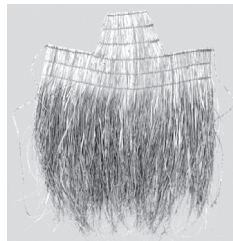
只1\_p060\_テツラ2



只1\_p060\_テツラ3



只1\_p060\_マエカケミノ



只2\_20107-7\_マイカケミノ



只2\_20107-8\_コシミノ



只1\_p061\_サンボンクワ



只1\_p070\_カッタポウ1



只1\_p070\_カッタポウ2



只1\_p062\_バコウグワ



只2\_20115-20\_バコウグワ



只2\_20115-27\_バコウ



只2\_20116-3\_ニダンコウ



只1\_p063\_ツチクウシ



只1\_p062\_マンガ



只2\_20118-13\_シロカキマンガ



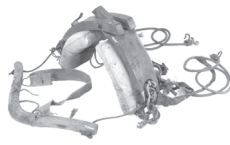
只1\_p062\_タカバヨ



只2\_20119-3\_タカバエ



只1\_p062\_ハナザオ



只2\_20122-5\_ウシノシトクビキ



只1\_p063\_テオシシロカキ



只1\_p063\_エンブリ



只2\_20130-8\_エンブリ



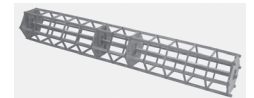
只1\_p059\_ナワシロシメ



只2\_20132-1\_ナワシロシメイタ



只1\_p064\_タウエワク



只2\_20136-1\_タウエワク



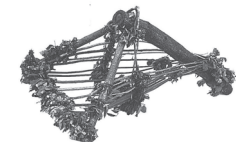
只1\_p058\_オオカワノジャリカキ(大川の砂利掻き)



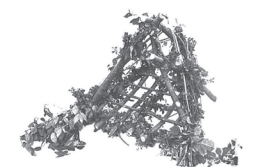
只1\_p058\_ジョリン



只1\_p058\_ミズヒキポンプ



只1\_p058\_大川カリヤス



只1\_p058\_コ(小)カリヤス



只2\_20301-3\_コエダシカギ



只1\_p064\_ガンツメ



只1\_p065\_ジョソウキ1



只1\_p065\_ジョソウキ2



只1\_p071\_コウガイ1



只1\_p071\_コウガイ2



只1\_p072\_マメオトシ



只1\_p072\_ヨコツチ



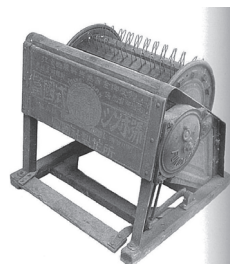
只2\_20407-16\_ウルシザル



只1\_p066\_センバ



只2\_20501-32\_センバ



只1\_p066\_イネコキカイ



只2\_20503-17\_イネコキカイ



只1\_p067\_モミヨウシ



只1\_p066\_モミヨウシボウ



只1\_p067\_ボッサラオトシ



只1\_p067\_ヒラバモミヨウシ



只1\_p067\_ツキグワ



只1\_p067\_ヨウシッキネ



只1\_p068\_キズルス



只1\_p068\_ドズルス1



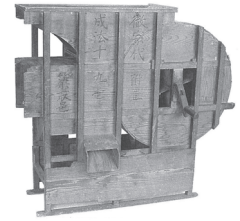
只1\_p068\_ドズルス2



只1\_p068\_ヒキボウ



只1\_p069\_センダイ



只1\_p069\_トウミ



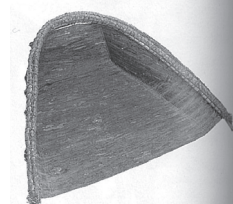
只1\_p069\_センゴク



只2\_20606-11\_センゴク



只2\_20607-2\_マンゴク



只1\_p072\_カワミ



只2\_20613-8\_モミドウシ



只1\_p069\_コメゴトシ



只1\_p072\_フクバイ



只1\_p072\_ユウゴウノタネイレ



只1\_p059\_タネモミレ



只1\_p058\_オオゼキ

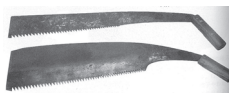
生産用具・山樵用具



只1\_p074\_ナタ



只1\_p074\_ハシツキナタ



只1\_p074\_ノコギリ



只1\_p075\_シンキリノコ



只1\_p074\_テコバ



只1\_p075\_マエツピキ



只1\_p074\_ヨキ



只1\_p074\_ヒロバヨキ



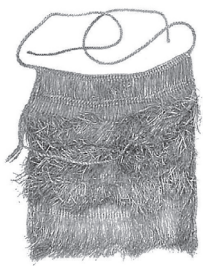
只1\_p076\_チュウナ



只1\_p076\_スギノカワムキ



只1\_p076\_カワムキッカマ



只1\_p076\_シリシキ1



只1\_p076\_シリシキ2



只1\_p075\_キヤ



只1\_p075\_カナヤ

生産用具・漁撈用具



只2\_21206-18\_トンビ



只1\_p078\_ヒキカギ



只2\_22102-3\_マスカギ



只1\_p078\_オキカギ



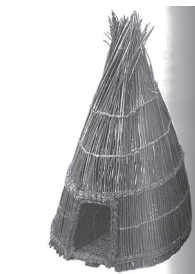
只1\_p078\_ヤス



只1\_p078\_マツツキヤス



只2\_22202-5\_マツツキヤス



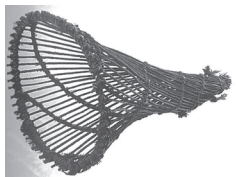
只1\_p080\_タツベエ1



只1\_p080\_タツベエ2



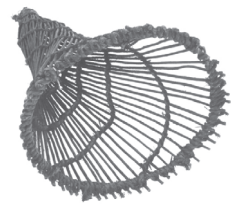
只2\_22301-3\_タツベエ



只1\_p081\_ムジリ



只1\_p080\_ドウ



只2\_22303-6\_ドウ



只1\_p081\_ドジョウドウ



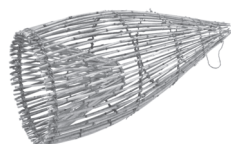
只1\_p081\_ドジョウドウのカタ



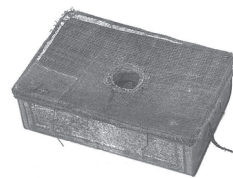
只1\_p080\_イシグラドウ



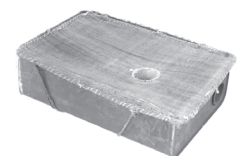
只2\_22308-1\_イシグラドウ



只2\_22309-1\_マストウ



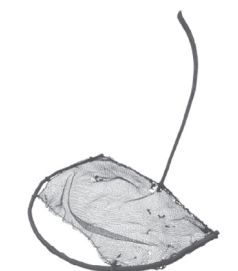
只1\_p081\_カナダライ



只2\_22410-6\_カナダライ



只1\_p079\_サデアミ



只2\_22401-1\_サデアミ



只1\_p079\_ヨツデアミ



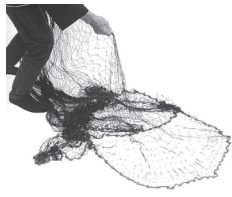
只2\_22402-1\_カジッカアミ



只1\_p079\_キネオトシ



只2\_22403-1\_キネオトシ



只1\_p079\_トアミ



只1\_p079\_アミシヨイバコ



只2\_22502-4\_オトリバコ



只2\_22902-2\_イタオトシ

生産用具・狩猟用具



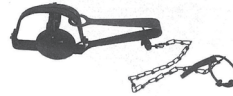
只2\_22903-2\_タイマツアカシ



只1\_p084\_シツキヤリ



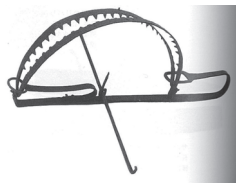
只1\_p086\_バンオン



只1\_p086\_トラップ



只2\_23104-3\_トラップ



只1\_p086\_トラバサミ



只2\_23105-5\_トラバサミ



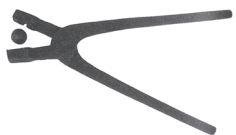
只1\_p084\_ヒナワジュウ



只1\_p084\_カヤクイレ



只1\_p084\_タマイレ



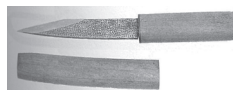
只1\_p084\_タマツクリ



只1\_p085\_カワハリバリ



只2\_23901-1\_コシナタ



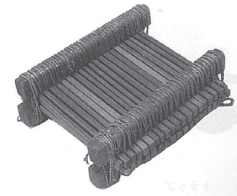
只1\_p085\_サバキコガタナ



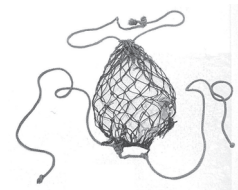
只2\_23902-1\_テノコギリ



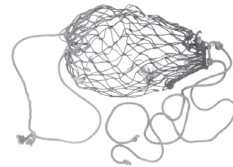
只2\_23903-1\_コヨキ



只1\_p085\_クマノイホシ



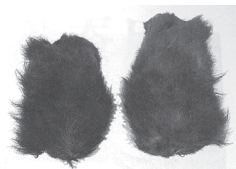
只1\_p085\_アミブクロ



只2\_23401-1\_アミブクロ



只2\_23403-2\_ニナワ



只1\_p085\_テッカワ



只2\_23510-3\_テッカワ



只1\_p086\_サンジンサマの旗



只1\_p126\_ヤマサキノゴヘイ



只1\_p126\_オコゼ





只1\_p126\_ヤマイリノシメ



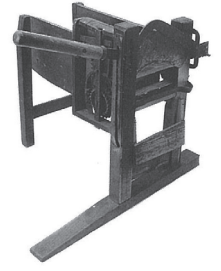
只1\_p124\_ワニグチ



只1\_p086\_イクサガケエマの版木



只1\_p090\_オシギリ



只1\_p090\_ワラキリキカイ

生産用具・畜産用具



只1\_p090\_ウマノフネ

生産用具・養蚕用具



只1\_p090\_ウマノクチカゴ



只2\_24203-2\_ウマノクチカゴ



只1\_p090\_ウマノクチカゴノカタ



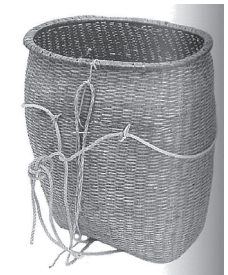
只1\_p090\_ウマノクツ



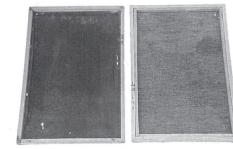
只1\_p088\_クワザル



只1\_p088\_クワトリハケゴ



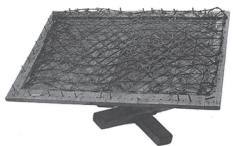
只1\_p088\_クワカゴ



只1\_p088\_コダネイタ



只1\_p088\_クワキリホイチョウ

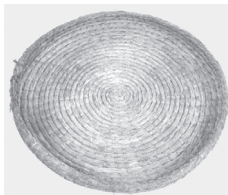


只1\_p089\_アミツクリダイ

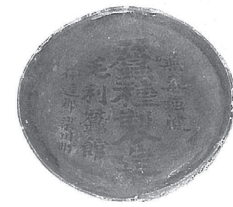


只1\_p089\_ワラダ

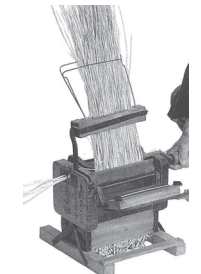
生産用具・染織用具



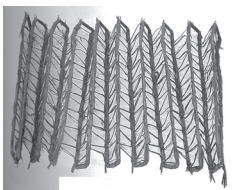
只2\_25301-1\_ワラダ



只1\_p089\_アゲボン



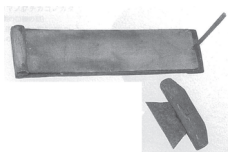
只1\_p089\_マブシオリキ



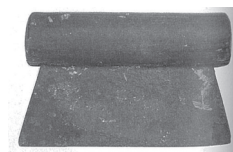
只1\_p089\_マブシ



只1\_p092\_オヒキブネ



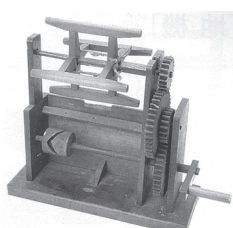
只1\_p092\_オヒキダイ



只1\_p092\_オヒキ



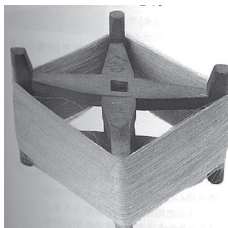
只1\_p093\_オボケ



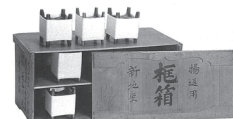
只1\_p095\_ザグリ



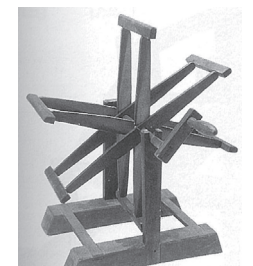
只1\_p095\_イトツムギ



只1\_p095\_イトトリワク



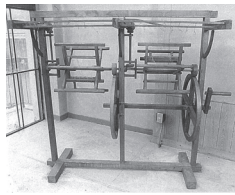
只1\_p095\_イトワクバコ



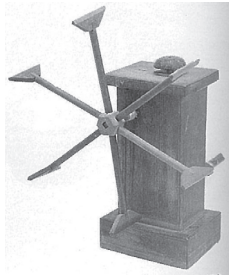
只1\_p095\_カセワク



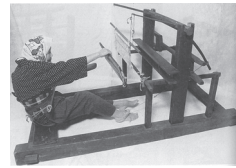
只1\_p094\_イトトリキカイ



只1\_p094\_イトクリカエシキカイ



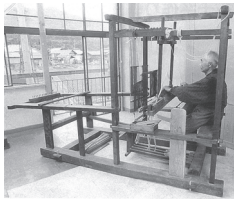
只1\_p094\_デニールキカイ



只1\_p096\_ジバタオリキ



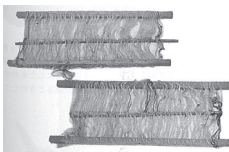
只1\_p096\_ジバタのイトマキ



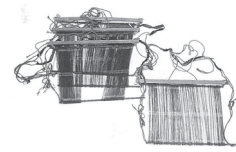
只1\_p097\_タカハタ



只1\_p097\_ヒ



只1\_p097\_イトアヤ



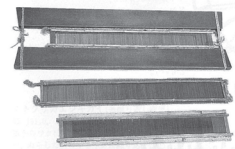
只1\_p097\_カネアヤ



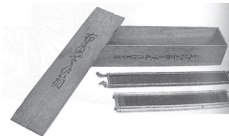
只1\_p097\_クダイレクダ



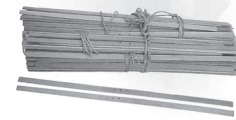
只1\_p097\_ハタオリハシメスノ



只1\_p096\_オサ・オサオサエ



只1\_p096\_オサ・オサバコ



只1\_p096\_ハタクサ



只1\_p098\_ヨツォ・ヨツォカラミ

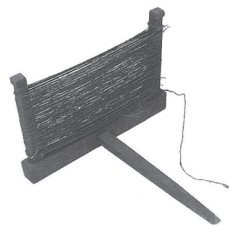
生産用具・手工用具



只1\_p098\_ヨツォカラミ・マトウリ



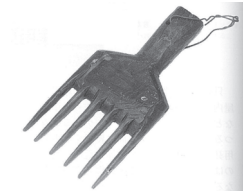
只2\_28301-1\_ヨツォ



只1\_p098\_ヨツォカケ



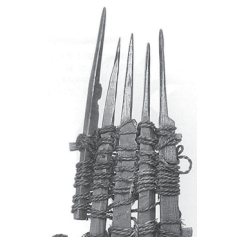
只1\_p100\_ワラスグリ1



只1\_p100\_ワラスグリ2



只1\_p100\_ワラスグリ3



只1\_p100\_ワラスグリ4



只1\_p100\_ワラスグリ5



只1\_p101\_ヨコヅチ1



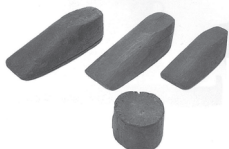
只1\_p101\_ヨコヅチ2



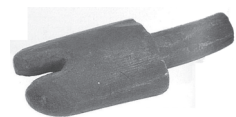
只1\_p101\_カケヅチ



只1\_p101\_ケムシリ



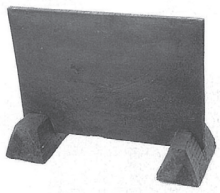
只1\_p102\_ゲンベノカタ・ヒゲキリダイ



只1\_p102\_オソフキノカタ



只1\_p101\_ソウリダイ



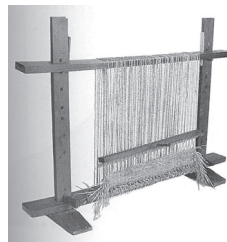
只1\_p103\_ノバキアミダイ



只1\_p103\_イトカラミ



只1\_p103\_コモ編み



只1\_p103\_ムシロバタ

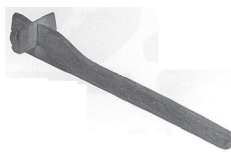


只1\_p103\_ムシロビ

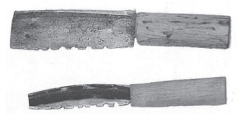
生産用具・諸職用具



只1\_p104\_マタビサキ1



只1\_p104\_マタビサキ2



只1\_p104\_マタビサキ



只1\_p104\_ハバツメ



只1\_p107\_セン



只1\_p107\_ユリノハ



只1\_p107\_マルカンナ



只1\_p105\_ヤネフキバサミ



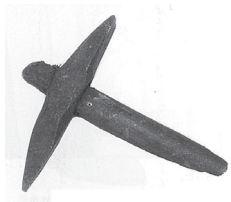
只1\_p105\_ガギボウ



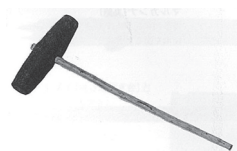
只1\_p108\_フィゴウ



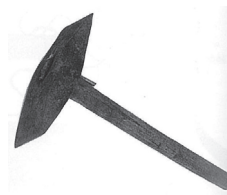
只1\_p108\_イシワリ



只1\_p108\_イシワリゲンノウ



只1\_p108\_セットウ



只1\_p108\_メキリチュウナ

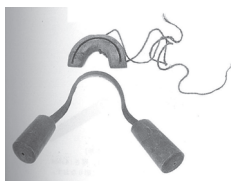


只1\_p106\_ツケギツキ

交通・交易／運搬用具



只1\_p106\_ツケギツキダイ



只1\_p107\_マルセン



只1\_p106\_テボリチュウナ



只1\_p106\_チュウナ



只1\_p116\_ニナ



只1\_p117\_ネコミノ



只1\_p117\_ネコミノ2



只1\_p117\_ネコミノ3



只1\_p117\_ネコミノ4



只2\_31105-3\_ネコミノ



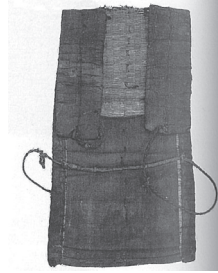
只1\_p116\_バンドリ1



只1\_p116\_バンドリ2



只1\_p116\_セナカアテ



只1\_p116\_セナカアテ2



只1\_p116\_セナカアテ3



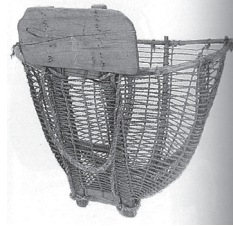
只2\_31106-14\_バンドリ



只1\_p114\_ショイバシゴ



只1\_p114\_ニツエ



只1\_p114\_ソラックチ



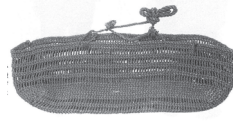
只1\_p114\_タガラ



只2\_31113-15\_タガラ



只1\_p115\_ショイカゴ



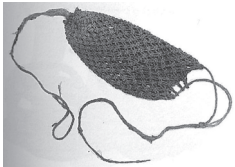
只1\_p115\_ショイカゴ2



只1\_p115\_ショイカゴ3



只1\_p115\_ショイカゴ4



只1\_p115\_アミブクロ



只1\_p113\_テンビンボウ・コイオケ



只1\_p113\_ミズハコビボウ



只2\_31206-3\_フリオケ



只1\_p113\_コイビシャク



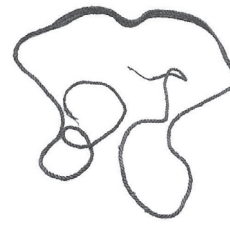
只2\_31207-8\_クミビシャク



只1\_p113\_ハケゴ



只2\_31302-10\_ハケゴ



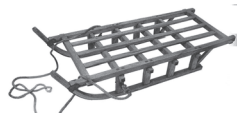
只1\_p118\_カタニナ



只2\_31401-17\_カタナワ



只1\_p118\_ソリ



只1\_p118\_ソリ2



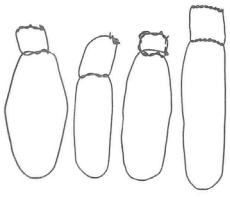
只1\_p119\_カクソリ



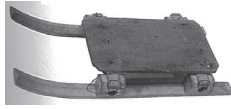
只1\_p119\_パチソリ



只1\_p118\_クルリ



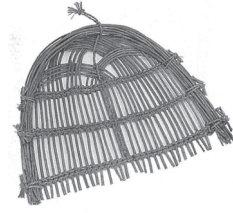
只1\_p118\_タガ



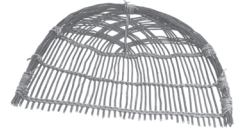
只1\_p119\_コドモソリ



只1\_p120\_ニグルマ



只1\_p113\_サデミ



只2\_31901-8\_サデミ



只1\_p112\_テッサク



只1\_p120\_カイ



只1\_p112\_イッポンバシ

# 福島県における民具名称の諸相

## ——会津只見の民具を中心に——

佐々木長生

### 1. はじめに

平成 23 年 3 月 11 日の大震災による大津波、それに伴う福島第一原子力発電所の事故と、福島県はまだ大震災の真只中にあるといえる。ふるさとを離れ多くの人たちが避難生活を送り、福島県の太平洋沿岸すなわち浜通りの双葉郡と相馬郡飯館村・南相馬市、田村市の人たちが未だ仮設住宅で、いつふるさとに帰れるか不明のまま、不安な生活を日々送っている。この多くの人たちが、この地で先祖伝来の生活に使用してきた民具は、3 月 11 日以来、主をなくした状態で放置されている。一部、町村が管理する歴史民俗資料館や公民館等で保管してきた民具をはじめとする文化財は、県教育委員会や県立博物館等により、仮設の収蔵施設に移管されている状態である。個人宅の土蔵や納屋等に残されている文化財は、ほとんど手つかずの状態である。

筆者は南相馬市鹿島区（旧相馬郡鹿島町）出身であり、私が生まれた村も大津波により流失し、20 名余りの犠牲者が出ている。22 歳まで生活した村の変わりとはた姿には、言葉がでない思いである。筆者は相馬地方出身の立場から、原子力発電所が立地する大熊町や双葉町、その北隣の浪江町、旧小高町・原町市・鹿島町（現南相馬市）、相馬市、相馬郡新地町の市町村史の民俗編の編さんに関わり、衣・食・住はじめ生産・生業等の民俗調査を行い、執筆する機会を得ることができた。特に、双葉町と大熊町では民具の章を担当しており、ふるさとの民具に対する思いは、この大震災によりより一層強く感じている今日である。

筆者は 42 年前に相馬を離れ、現在は会津若松市に在住し、会津地方の民俗・民具の研究に携わっている。特に、南会津郡只見町においては『只見町史』民俗編の調査・研究を機に、筆者が 20 年余り只見町民とともに、民具の整理作業に関わってきた。平成 2 年には、只見町明和地区の「明和の民俗を語る会」の古老たちが中心となり、町民みずからの民具整理が始まった。その後、旧朝日村と旧只見町の方々も参加し、町民あげでの民具整理が運動として展開し、その成果は『図説 会津只見の民具』として、写真および民具一覧表、簡単な解説と共に、只見町教育委員会より平成 4 年に刊行された。翌年には『只見町史』民俗編が刊行され、只見町の民具が町民の手により整理されたうえ、第一級の文化財となった。平成 15 年には更なる調査と整理が行われ、その

一部が「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」（2,333 点）として国の重要有形民俗文化財に指定され保管されている。この町民みずからの整理方法は、「只見方式」とも呼ばれ、全国的にも知られるようになった。古老たちが作成した民具調査カードには、民具の使用方法和製作方法等のスケッチをはじめ、さまざまな伝承記録が古老たちの自筆で残されている。このカードを作成した古老たちのほとんどは他界されたが、古老たちの思いは整理作業を楽しく行っていた笑い声とともに、調査カードの中にしっかりと生き続けている。

本稿は、只見町民が整理した民具を中心に、筆者の出身地の浜通りの民具と比較しつつ、福島県における民具名称について私見を述べてみたい。また、会津地方と浜通り地方の間に位置する中通り地方の民具については、市町村史民俗編等の資料から比較したい。執筆にあたっては、「民具の名称に関する基礎的研究」班で進めてきた民具画像一覧に沿いながら、只見の民具を解説することを主軸に、中通り・浜通り地方の民具名称について、相違または共通する点などを列挙する形で紹介していきたい。

只見町民の手による『図説 会津只見の民具』を中心に、会津地方はじめ、福島県内の市町村史民俗編や、近世の風土記・風俗帳、農書類を調査資料として用い、これらに記載された民具名称について、その変遷の歴史を示した。また、絵馬をはじめ風俗帳や農書類に記載された絵画資料も利用した。民具の使用年代や伝播・流通に伴う名称の変化など、隣接する諸県との比較照合も一部行った。これらの諸見は、「民具の名称に関する基礎的研究」班の研究会において、共同研究諸員との発表・討論の成果から生れていることを報告し、共同研究員諸氏の御教導に感謝したい。

### 2. 福島県の地域差にみる民具の特色

福島県は北海道・岩手県に次ぐ第 3 位の面積 1 万 3,782 km<sup>2</sup> を有する広大な地域である。白河関や勿来<sup>なごき</sup>の関など古代の関で関東に接し、白河以北、「河北」すなわち陸奥の国の南端に位置している。茨城・栃木・群馬・新潟・山形・宮城と多くの県と接し、それぞれの地域と古くから交流があり、福島県の文化は多様といえる。会津という地名は、『古事記』中巻に、建沼河別命が東（常陸国）から、大彦命が西（越後国）から、父子の神が津で出会ったことから「相津」になったという神話の記載がある。神々が会おう、すな

わち文化の交叉を意味するものといえよう。まさに、会津の地名伝説にたとえられるように、福島県は東西南北の文化が交叉する地域ともいえる。

前述したように、福島県は会津・中通り・浜通りの三地方に分かれ、天気予報もこの三地方に分けて報じられる。冬期間は、会津は雪、中通りは曇り、浜通りは晴れという日がよくあり、気候的にも著しい差がある。会津は山林が大半を占め、冬期間は多くの積雪、中通りは奥羽山脈越えて会津より少なめの雪、浜通りは阿武隈山地に遮られて空っ風の晴れで、乾燥注意報が出る。

会津は山々の間を只見川や阿賀川が流れ、また中通りに接して猪苗代湖がある。中通りは奥羽山脈と阿武隈山脈の間に福島をはじめ白河・二本松などの城下町があり、それらの町を阿武隈川が南から北へと流れている。阿武隈川の冷涼な気候は、全国有数の養蚕地帯となり、伊達地方の蚕種生産はその代表産業となった。阿武隈山地は、近世には煙草の生産地ともなった。浜通りは沿岸の小規模な漁業、相馬地方には松川浦などの浦が多くあり、製塩や海苔養殖などが行われてきたが、明治末から大正初期にかけて干拓化が進み、現在は松川浦を残すのみとなり、ほかは水田となって相馬地方の穀倉地帯となっている。

会津地方は、福島県の半分に相当する面積があり、猪苗代湖は福島県の臍ともいわれ、その中央にある。猪苗代湖以西に立地している会津地方の中心は、会津若松市や喜多方市などが位置する会津盆地である。近世においては会津藩 23 万石で、若松城下は仙台に次ぐ城下町であった。大沼郡の山間部から南会津郡にかけては「南山御蔵入領」と呼ばれる 5 万石の幕府直轄領で、会津藩領地として治められてきた。会津藩祖の保科正之は神道を重んじ、淫祠いんしの撤廃など民俗行事などを統制したため、旧会津藩領と旧御蔵入領では民俗行事等にも差が見られる。こうした事例は、民具の存在にも関わってくる。後述する「火伏せ」の男根や女陰の呪具を建前に棟木に奉納する習俗や、小正月の歳神さいじんに藁人形を焼く行事の禁止等にあらわれている。

只見町は旧御蔵入領に位置し、747 km<sup>2</sup> という広大な面積を有し、東京都 23 区 (621 km<sup>2</sup>) がすっぽりと入るほどである。その大半が、ブナ林をはじめとする落葉広葉樹林におおわれている。冬期間は、「丈余りの雪」とも呼ばれる 3 m におよぶ豪雪地である。山に降った豪雪は、無数の沢から只見川やその支流の伊南川など大小の河川に注ぐ。まさに山と雪と水の里である。こうした自然環境に植生する樹木や草などを、この地方の人々は民具の素材として利用してきた。その民具で田畑を耕し、山菜を採り、魚類や鳥獣類を獲って生活してきた。まさに、只見の民具はこうした只見の自然と人々が織りなす生活の軌跡といえる。

只見の民具は、町民の手によって整理され、その成果を将来へ継承するための方法として、展示施設の計画が町によって検討されている。また神奈川大学との共同研究により、只見の民具がインターネットによって世界に発信されており、

中国の民具整理事業の範となり、注目されているという。こうした点からも、只見の民具名称を一つの基準として、名称のなりたちや周辺地域との関わりなどを検討することは、民具名称の研究に効果的な一例といえる。そこで筆者は、その一部を福島県内の民具と照合し、検討することを試みとして提起したい。

### 3. 生活用具、衣食住

#### 1) 衣生活用具

##### (1) さまざまな仕事着

福島県内では「仕事着」をシゴトギ・カセギモノ・ヤマキモノ等と呼ぶ地域が多い。只見町ではシゴトシと呼ぶことが多い。またノーシと呼ぶ地方もある。貞享 2 年 (1685) の『伊南古町組風俗帳』(南会津町山口・古町付近の風俗書上帳) には「農仕帷子」という記載があり、「のうし」という呼称が伊南川流域に存在していたことがうかがえる。カタビラという呼称は、麻ひとえの単衣ものを指していることが多い。「帷子」というと侍の着衣を指すのと区別して、「農仕」と呼んでいるとみられる。

会津地方では「戸表」をヤマという呼び方があり、戸表すなわち野良・山仕事に着用する上衣を、ヤマジバン(山襦袢)と呼ぶ地域もある。多くがジバン(襦袢)と呼び、カセギジバン(稼ぎ襦袢)等と呼ぶ場合もある。

会津地方では、仕事着の一般的な服装に、「ジバンにサルツパカマ」という呼び方がある。このような服装がいつごろから見られるようになったかを示す資料に、文化 4 年 (1807) の風俗帳の記載がある。現在の喜多方市慶徳付近の『慶徳組風俗帳』には、「作人田畑山野へ出候節、襦袢、半切の類短き物を男女着、猿袴股引などにて稼き申候」とあり、会津地方の一般的な仕事着服装が文化 4 年当時に見られたことがわかる。さらに喜多方市熊倉付近の『熊倉組風俗帳』には、文化 4 年の 30 年前ごろすなわち天明年間初期には、「三拾年以前はさつき支度と申、姫子は親里へ参り、木綿を貫ひ白地の新単物に黒紫帯上紺の前たれに、手さし、きゃはんを拵へ、五月女と申田植致候所、近年の出立はじばんに猿はかまをはき髪もたはねす男子同様の姿にて男女の見分けも無御座候」とあり、文化 4 年に近い時代に「じばんに猿はかま」姿になったことがうかがえる。

会津平坦部のサルツパカマ(猿袴)またはサラツパカマ・サツパカマと同形のもを、只見町ではカリアガリユッコギとかカリアゲユッコギ・ホソツパカマ(細袴)・ホソユッコギなどと呼んでいる。股の部分太く、脛部を細く作ったもので、ホソツパカマの呼称もある。ホソツパカマの呼称は松枝岐村にもあり、伊南川流域に分布する。ユッコギは深雪地帯で聞かれる呼称で、「雪こぎ」に起因するものか定かでない。また、カリアガリ・カリアゲの呼称の由来も不明である。単にユッコギといった場合には、屋内ではなく下衣を指す場合もある(大沼郡金山町)。

只見町から南会津町（旧南郷村など）にかけては、**ブタクコギ・ダフユッコギ**などと呼び、股部を太く大きく作る。これは上衣に綿入れの長着を着用し、その裾部をおおうために太くする。大沼郡昭和村では、フンゴミとかフグミなどと呼んでいる。春から秋にかけて屋内での下衣は、只見では**モンペ**と呼んでいる。只見町をはじめ南会津郡では、仕事着やふだん着には新潟県加茂市産の加茂縞を多く用いた。

只見町から南会津町旧南郷村の伊南川流域には、**ハダッコ**（肌子）と呼ばれるサシコ（刺子）がある。紺木綿に白糸で麻の葉（茄子花）や七宝・析形などの幾何学模様を刺したものである。ムジリ袖の短着のものが多く、膝までの長着のものもある。ハダッコという呼称のいわれについては不明である。只見町にはボロ小布をあて刺したボロサシコがあり、会津民俗館に多数収蔵されている。ハダッコという呼称から、肌に直接当てる下着的な機能から発生した呼称とも推測される。

## （2）さしこ

ハダッコの呼称と関連して、只見地方のサシコに関する資料として、貞享2年の『伊南古町組風俗帳』の「百姓常ノ衣類之事」に以下の記載がある。「秋ノ末より春迄之間ハ家なみ山なみと申候而、山なみハひざ切ニ家なみハ常ノ長ケニ横指を拵ツ宛着申候、此中入ニハ麻之そかわを水ニひたし打洗なみけと申ニ拵表ニハ古かたびらを当テ横指ニ仕候、是を苧のわたともなみとも申候、」とある。すなわち麻の挽きかす（苧かす）を中に入れ、横刺したもので「おのわた」・「なみ」と呼ぶとある。南会津郡下郷町から南会津町田島付近の貞享2年の『長江庄風俗帳』には、同様にして作ったもの（麻ノ疎皮）を、「カクテ刺子ノ中入ニ用ル」と記し、「刺子」の技法があったことを記載している。

ハダッコと同形と見られるサシコに、**サシコハンテン**（刺子袴纏）や**サシコジバン**（刺子襦袢）がある。サシコハンテンは平袖形のものが多い。南会津町と泉田（旧南郷村）では、サシコハンテンは若者が最初はムジリ袖を着て、役付になるとムジリ袖の縫い目をほどき平袖にして着たという。サシコハンテンは村の共同作業などハレの場で着用し、平袖のサシコハンテンを着ることを誇りにしたという。

会津地方では会津若松市東山町湯ノ入地区で、サシコワンバリと呼ぶ刺子を着用してきた。紺木綿に裏地をつけ、白木綿糸で互の目に刺したものである。肩の部分には山道や柿の花の模様をきれいに刺したのものもある。ワンバリという呼称については不明である。

また西会津町と県境にある新潟県東蒲原郡阿賀町（旧津川町・上川村）には、サシコモッコと呼び前身頃と後身頃に、紺木綿に白糸で横刺や柙刺に刺したサシコがある。モッコという呼称については不明である。

相馬地方にはボロ着物をモッコと呼ぶ習慣があり、筆者は明治41年（1908）生れの母から、「そんなモッコ着て」などと注意されたこともある。モッコが運搬具のモッコ（持籠）に由来するものかは推測にとどめたい。

田村市大越町や滝根町などでも、ハンコをサシコにして着用した。田村地方では仕事着の下衣を、広くカッサンと呼ぶ。南相馬市鹿島区の船方（漁師）は、沖着として長着のドンザ、短着のサシコを着用した。

只見町の冬は、背丈を越える豪雪のなかで、屋内の作業や春先の堅雪の上での山仕事などには、綿入れは欠かせない衣類である。只見町では、綿入を**オミンノコ**とか**ンノコ**、**ミジカワタイレ**（短綿入）などと呼んでいる。明治以前の会津地方では、綿入を「ぬのこ」や「布子」と呼んでいたことが、文化4年の風俗帳に記載されている。喜多方市塩川町付近の『塩川組風俗帳』には、「綿入の着物をぬのこと云」とある。ヌノという呼称は、麻を指しており麻の綿入の呼称が木綿綿になっても継承されたものとみられる。大沼郡昭和村では、ヌノドンブクと呼び、麻の布地に中にも麻の挽きかす（苧ぐそ）を入れた綿入を着用した。「苧ぐそ」を打った綿「おわた」と同種のものである。オミンノコまたはヤマンノコという呼称は、ヌノコをていねいな呼び方で呼んだものと推測される。

## 2) 食生活用具

### （1）食と道具

会津地方では、鉄瓶をテドリと呼ぶ地方が多い。只見町では**ユッカマ**（湯釜）と呼び、鋳物製で蓋がブリキや銅製のものもある。テドリは会津坂下町塔寺製のものがある。沸かした湯もおいしいといわれるが、塔寺のテドリはほとんど見ることができなくなった。塔寺は鋳物や鍛冶の村として知られる。

結婚式や葬儀の際、赤飯やおこわなどを入れる器に、**ホケイ**（行器）がある。会津地方で多く用いられるもので、楕円形の漆塗で、半切形の桶製のものが多い。また、**ハンギリ**（半切）と呼ばれる**盥洗型**の丸い桶に赤飯やおふかしを入れる習俗は、福島県内で広く見られる。ふき漆と呼ばれる透明の漆を塗るものが多い。

会津地方の山間部では**ハンゾ**（盤槽）と呼び、杉やブナを削り抜いた容器がある。食器洗いや水溜めに用いるほか、赤子の産湯にも用いたという。文化6年（1809）の『新編会津風土記』大沼郡胃組には、「盤槽」を製作していることが記載されている。その説明には、「盤槽 盥洗ノ器ナリ、木ヲ削メテ水を受ル所トス、径二尺余り、深サ四五寸許、多く『ブナ』ノ木ヲ用ウ」とある。会津地方の古老は、現在も盥洗をハンゾと呼ぶ場合が多い。

会津地方では**クボウス**（くぼ白）と呼び、小型の胴部がくびれた白がある。主に粉搗きや雑穀の脱穀に用いられる。相馬地方では**コナウス**（粉白）と呼ぶ。クボウスには、**テキネ**（手杵）と呼ばれる立杵を用いる。会津地方のテキネは、一方の先が丸く、もう一方は偏平になったものが多く、握りの部分は細く削った形である。丸い方を粉搗きに用い、偏平の方を脱穀等に用いる。白には餅搗き用と米搗き用の二種がある。米搗き用は、大型で縁部が内部に返しがあり、はね飛ぶ



米粒が当たり臼中に戻る構造に作られる。米搗きをする場合には臼の中にツキワ（搗き輪）と呼ぶ縄を巻き付けた輪を入れ、その中をキネで搗く。

貞享元年（1684）の『会津農書』（寛延元年写）の農具の記載では、臼と杵について次のように記載している。「臼——米麦等舂。木を以作。大ハ立臼と云。少きを窪臼と云。手杵——穀類片手にて臼づく具。木を以作る。又細腰杵子。打杵——穀類両手にてうすづく具。木を以作ル。」とある。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』によると、5月末から6月初めの麦搗き作業について、「麦出来候へは、夏ニ至毎夜女共五人、六人寄合、宵ノ内ニ臼にてゆい麦突申候、是を夜麦突と申候」と、当時の様子を記載している。

貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、伊南川流域の日常の食物について、次のように記載している。「百姓常之喰物之事 秋ハ青菜、芋ぞうすい昼カ夜カー一度品々野糧食、冬中より春迄ハ蕪ぞうすい稗のかゆ、夏ハ青物糧之ぞうすい、開作ニ打立候而も如此、扱又苜敷取田うえ或ハ春木山骨折わざ仕候時ハ昼食ニ菜、蕪、わらびノ糧入給申候」とある。「野糧食」すなわちカテメシが主で、栃やシダミと呼ぶドングリ類の木の実、大根や稗・粟などの雑穀類を多く食した。米の飯は「無糧之飯」と呼び、ハレの食物であった。

ソバやアワ・ヒエ等の雑穀類は、カノと呼ぶ焼畑で栽培し、特にソバは焼餅など粉食として多く食べられた。粉を練るのに用いるのが、ブナやトチなどを削り抜いて製作した木鉢で、只見町ではヒキバチ（挽鉢）とも呼ぶ。会津地方では練ることをデッチルともいい、デッチリバチと呼ぶところもある。

また、シイナ（枇）と呼ばれる実の入っていない杵や、杵摺りで出た碎米、ユリコ（淘粉）と呼ばれる米粉も、朝飯や小屋の食料として大切にされた。貞享2年の『高田組風俗帳』には、会津美里町高田付近の田起しのときの食物について、「田打之時、喰物朝に枇屋（や）き餅、昼は糧少入たる飯」と、粉食が日常食の主食的な位置にあったことがうかがえる。

ヒキバチとイシウス（石臼）は、重要な生活用具であった。石臼のヒキボウ（挽棒）と呼ばれる上臼を回す木は、直角に曲がった堅木を用いる。春木山と呼ばれる薪伐り作業の時などに、採取して準備しておく。挽棒が折れた際、材料を求めに山に入るが、その日のうちに適した材料を見つけないと、その人は死ぬという伝承も猪苗代地方にある。郡山市湖南町館では、火災が出て半鐘に向かうときは、石臼の挽木を持って走る。もし鐘を叩く槌がないときにこれを使用する。堅木のうえ、直角に曲がっているため槌がわりになるといふ。

ソバは、主にヤキモチ（焼餅）等の粉食として食べられる。南会津地方では、ソバ粉に栃の実やシダミ（ミズナラやコナラのドングリ）を混ぜて食べる場合も少なくなかった。貞享2年の下郷町榎原付近の『榎原組風俗帳』には、9月から3月の冬期間には「九月より三月迄ハ昼めし不被下候、食

物ハいも、蕪、大根の雑水（炊）、尤山の物とちしたミ粥に仕被下候」とあり、栃の実を多く食べた。村によっては「栃の実の口あけ」と呼ばれる解禁日を決めていた。栃の実は、栗の実のような形で、堅い皮におおわれている。いったん湯で煮てやわらかくしたのち、皮をむくのを使うのがトチムキ（栃むき）である。栃の実はアクとよばれる苦みがあり、アク抜きをしないと食べられない。食べるまで多くの手間がかかる。

『伊南古町組風俗帳』は、只見地方の栃の実の加工調整について、貞享2年当時の様子が詳細に記載された注目すべき資料であろう。「栃拾申事 秋ひがんノ比ひろい干置、春に至骨折わざ不仕時分之喰物之足りに仕候、余計ハ囲置凶年の喰物ニ仕候、此栃拵様の事、先さゆにて煮、壺ツ宛かわを取、其後まきノはいヲあくに仕煮申候てやわかニ成候時すかりへ入流水にひたし置、あく気無之時又さゆニあく気を煮出シ其後粥ニ煮給申候、是ヲ栃粥と申候、又こぬかヲつきませ栃粉と申ニ仕切り給申候、力の落申物ニ候故骨折わざの時喰物ニ不罷成候」とあり、現在もこの加工調整方法は行われており、栃餅としてこの地方の名物になっている。

## （2）ハレの日の器

会津地方のハレの食物の一つに、コヅユ（小づゆ）とかザクザク煮と呼ばれるものがある。里芋やニンジン・ゴボウ・コンニャク・キクラゲなど、奇数の食材を細かく刻んで、貝柱などでとったダシで煮込み、しょう油で味付けしたもので、これを結婚式や正月・初市の年始・祭礼などハレの行事に食べる習俗が現在まで続いている。コヅユはヒラワン（平椀）と呼ばれる平たい皿状の専用の椀で食べる。多くの人が集合した席では、オオトジと呼ぶ富士山や鶴・松、鯉などの描かれた華美な蓋付きの大椀に入れ、多くの人前でヒラワンに盛り配り、共同飲食するものである。オオトジを載せる膳はデンプ、ゼンプと呼ばれる。鯉などが描かれた大きな足付きの膳（丸型や角型）もある。

只見町ではコトジと呼び、それを載せるコトジノボン（コトジの盆）がある。只見町では結婚式に一通りの料理を出したのち、コトジに煮物やつゆ物を入れ、客の小皿（コトジワン）に料理を小さじで盛り配ってまわる。これらは会津塗の豪華な漆器で、朱塗りに金粉で縁起のよい絵柄が描かれている。

沼津市歴史民俗資料館に、鯉が描かれた蓋付きのオオトジとよく似た、天保8年（1837）銘の箱付きの椀が展示されている。会津地方のデンプや椀等に描かれた鯉の絵とよく似ていることに、筆者は関心を寄せている。

## （3）曲者

弁当箱は、ネズコ（黒桧）と呼ばれる曲物で丸型や長円形のもので、メツパとかメンパと只見町では呼んでいる。会津地方でもメツパと呼び、秋田・青森県でいうワツパという呼称は聞かれない。また、おかず入れとして使用するものは一回り小さいもので、セイレメツパ（菜入れメツパ）と呼んでいる。メツパは桧枝岐村が主産地で、現在も数人の人が観光

土産品としてメッパ等曲物類を製造している。かつて桧枝岐村ではテオケ（手桶）・ヒシャク（柄杓）・オボケ（苧桶）などの生活用具を生産してきた。特に「二八」と呼ばれる篩輪は、この地の特産品として会津若松へ送られた。文化4年の『若松風俗帳』には、若松の産物として篩と輪篩が記載されている。「篩 馬毛を以篩底に織、江戸表は勿論、出羽・奥州筋、野洲・越後辺迄交易仕候 輪篩 馬毛篩竹の類、四方の近国へ交易仕候」とある。

貞享2年の『和泉田組風俗帳』によると、南会津町虻宮村でも農作業ができない年寄が曲物製作を行っていることを記載している。特に、「米ゆり桶」という玄米と粳とを選別する農具の製作を記載している。「界村端郷虻宮ニ而曲物仕者御座候、最も野稼不罷成年寄者共、桶ひしやく或米ゆり桶など曲げ、米雑穀などと取替、少し宛之足りニは罷成申候事」とある。文化4年の『五目組風俗帳』によると、喜多方市熱塩加納町岩尾でも「まけ物ひさく類 但、岩尾村より差出申候」と、曲物を製作していることがわかる。

南相馬市鹿島区土栴笈でも、曲物製作を行っていた。鹿島区では曲物の弁当入れを、エゴと呼んでいる。その意味は現在では不明である。「飯籠」の意が推測の域である。

只見町など只見川・伊南川流域はイズシ（飯鮓）と呼ぶハヤ（鮓）やマス（鱒）のなれ鮓を作り、食べてきた。スシオケ（鮓桶）と呼ぶ楕円形の桶に、魚の腹わたを取り除いていったん塩漬にし、腹の内部にご飯を詰めて並べ敷き、笹の葉を置き、魚を重ねるように漬け込む。夏の土用すぎに漬け始め、正月のご馳走とした。この地方の保存加工食である。スシオケには菌が生き続けているので、毎年おいしい鮓ができたという。

#### (4) 山塩の生産

会津地方は、山間の地にあつて塩は貴重な食料であつた。かつての塩は荒塩と呼ばれ、ニガリ（苦汁）すなわち空気中の酸素と化合し、二酸化マンガンが出てしまう。そのため、シオブネ（塩舟）と呼ばれるブナの木などを刳り抜いた舟形の器をニガリ受けに使用した。只見町ではシオタライ（塩盥）と呼ぶ半切り状の桶をも使用した。シオブネの上に棒二本を渡し、その上に塩の入ったかます吠を載せ、ニガリを受け溜める。溜まったニガリは、豆腐製造に用いたりする。塩は貴重で高価なものであつたため、シオブネの大きさはその家の財産を示すものとされ、他人に見せるものではないとも言われてきた。

只見町塩沢の只見川岸には塩井があり、そこから汲んだ水を煮つめて塩を生産した。これは山塩と呼ばれ、明治37年まで生産されていた。塩沢の塩井は、弘法大師によって発見されたと伝えられる。その川向いには塩釜神社も祀られ、製塩の盛んな時代がうかがえる。文化6年の『新編会津風土記』には、塩井の風景を描いた絵と「ツクシ」という用具が存在したことが記載されている。耶麻郡北塩原村大塩にも塩井があり、『新編会津風土記』にも簡単な塩井の絵とともに、弘法大師の発見の由来が記載されている。近年、大塩では山

塩生産を再興し、裏磐梯観光土産品として好評を得ている。

### 3) 住生活用具

#### (1) 雪と生活

只見町は11月になると雪が降り始め、雪が消えるのは翌年の4月になってからである。只見町の民家は、豪雪に備えた構造になっている。その風土から生まれたのが、うまやちゅうもん厩中門造と呼ばれる曲屋である。中門と呼ばれるL字型の突き出た部分に、厩と通路を設ける構造である。中門部は切妻にし、先端に出入口を設け、雪の季節の出入口とする。屋根に降り積もった雪を、勾配にそって雪を下ろすため、軒下はすっかり雪に埋れてしまう。

只見町では「雪下し」といわず、雪から住宅を掘り出すことから「雪掘り」と呼んでいる。この雪掘りや除雪に欠かせないのが、コウシキと呼ぶ道具である。只見町のコウシキは、柄がT字型になっているのが特色である。これは新潟県のものと同形である。会津平坦部ははじめ南会津地方のものは、T字型の柄ではなく一本棒型である。『新編会津風土記』大沼郡青組の記載によると、「コスキ 雪を払フ器ナリ、多ク『ブナ』ノ木ヲ以製ス、形鋤ノ如シ、柄ノ長二間計ニ至ル者アリ」と、コスキという呼称は、「鋤」の形に似ていることについて示唆した説明をしている。この説明にもあるように、ブナの木を用い、材を縦割にして板状にしてから、荒取りの形で保管して置いて、必要に応じて製作する。只見町ではコウシキノヤマドリ（コウシキの山取り）と呼んでいる。

貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、当時の屋根の雪下しすなわち「雪掘り」について詳細に記載している。当時から「ほり除ケ申候」と、雪を掘るといふ言い方があつたことがうかがえる。「冬中やねノ雪おろし申事 大成隙の費ニ御座候、年二依テ雪七、八尺、老丈計降り申候、冬中より正月迄の間二十度、十二、三度ほどおろし申候、段々積り候後ハおろし雪ニ而やねヲ埋候故一おろしを二日、三日ニ而漸々ほり除ケ申事御座候、(か)筒様の時古家或は小柱ニ而籠相に作候家などハ梁桁、杵首等を押折申事数度御座候故いか様の小家成共材木を丈夫ニ望作り申候」と、当時の屋根の雪掘りについて詳細に記載している。こうした方法は、只見町ははじめこの地方で、家屋の建築当初から吟味しており、何百年も豪雪に耐えられる民家が多く、只見町叶津に移築された旧五十嵐家住宅は、享保3年(1718)の墨書があり、国指定重要文化財となっている。

「丈余りの雪」といわれるように3m近くの積雪の只見町では、通路の確保そして通学路の除雪と、重労働の連続である。あまりにも雪が多く、除雪することは不可能なため、歩行する部分を踏み堅める方法となる。只見町をはじめ隣接する南会津町および大沼郡金山町や三島町付近では、長径約1m・短径50cmほどの楕円形のツルカンジキで雪を踏み堅める。ツルカンジキにはコカンジキという小型のカンジキを結わえ付けておき、コカンジキに足を載せ、ツルカンジキの前先に吊り縄をつけ、片足を持ち上げ力強く雪を踏みこんで

いく。

ツルカンジキは雪の少ない会津平坦部にはなく、フミダワラ（踏み俵）と呼ぶ俵状のものに足を入れ、片足ずつ吊り上げて雪を踏みこむ。三島町ではツルカンジキとフミダワラが共に使われている。雪の多い只見町のものが大きく、金山町から三島町にかけて雪が少なくなると、大きさも小さくなっていく。新潟県魚沼地方では、ツルカンジキをスカリと呼んでいる。その使用風景が鈴木牧之の『北越雪譜』に描かれている。魚沼地方のものは只見のものより更に大きいものである。

三島町大谷付近の文化4年の『大谷組風俗帳』には、ツルカンジキを「鶴」と表記し、コカンジキと共に絵まで記載している。ツルカンジキの近世の唯一の絵であろう。カンジキについての説明は、金山町付近の『金山谷風俗帳』などの記載とほとんど同じである。「大雪にて通路難レ成時はがんしきをはく、又雪はかまと云を着て自由仕候、大雪には指渡式尺余りに木を丸く曲て所持し、くつに結付て先達而雪をこぐ、是を鶴と申候、其跡を常ノかんじきにて歩む事あり、鶴かんじきの図ヲ顕ス」とある。

ツルカンジキに「鶴」という漢字をあてているのは、宛字であることは想像がつく。只見町田子倉には、カンジキの由来を語る伝説がある。八幡太郎義家が、大雪のため一歩も進軍できず立ち往生していた。そこに一羽の鶴が、木の枝をくわえて飛んできた。鶴はその枝を雪上に落とし、枝の上に降り立って止った。それを見た義家は、木枝を輪に曲げたものを兵士たちに履かせて進軍し、敵に打ち勝ったという。この伝説とツルカンジキを結び付けることは暴論であるが、民具名称のなりたちを考えるうえで、伝説や昔話など口頭伝承をも一つの指標となるのではないかと考えたい。

会津地方の民家は、寒さが厳しいため厩を屋内に設ける内厩の造りである。人馬共に生活し、絶えず馬が人の目の届く所にあった。古くは直屋すこやと呼ばれる造りであるが、江戸中期ごろから厩中門造の曲屋形式が会津地方に出現する。管見の限りでは、正徳2年（1712）に「中門造」が『家世実紀』に記載されている。貞享元年の『会津農書』には、当時の農民家屋の造りについて次のように指導している。その造りは近年まで会津地方の農民家屋として、よく見られた造りであった。

「家構 農人之家ハ干物之勝手に日を受て南向に作るべし。或ハ俄雨など降り乾物急に取込に自由のため、居間を土座にして前に長戸を立べし。又稲取始末之勝手にツ春き場ニハを広く、居間と場之仕切仕切なしにてよし。夜ルの明し火を一所にてとほし、両之たよりになすべし。乍レ去家の向、町並谷塩ニ之在所ハ定がたし。明し之得ハ成レ少ツといへとも、微塵積れハ山と成と云心を考べし」と、著者佐瀬与次右衛門は農民家屋の造りについて指導している。ここに記載された内容は、会津地方の伝統的な民家を形成してきたといえる。

その一つに、「居間を土座にして」とあるように、ニワと呼ばれる広い土間があり、稲扱きや藁仕事などの作業場とな

った。土間の一部には藁や筵を敷き、その中央には囲炉裏がある。囲炉裏は家族だんらん、食事の場として生活の中心となる空間で、その座席にも厳しい慣習があった。主人の座るヨコザ（横座）、その向いに嫁が座り焚木をくべる場のキジリ（木尻）などと全国的な呼称がある。囲炉裏は只見町はじめ会津地方ではユルイと呼び、自在鉤が掛けられており、鍋や鉄瓶などが掛けられ、食物の煮たきに欠かせないものである。只見町ではカギザオ（鉤棹）とかカギノハナなどと呼ばれ、会津地方ではカギドノとかカギサマなどと呼ぶ地域が多い。会津地方は雪が多く、竹の生育に適さないため、細い枝をはり合わせた箱形のカギザオが多い。まれに竹製のものもあるが、その家の主人が屋根葺きの出稼ぎに関東方面に出たおり、竹を求め製作したと伝える例もある。只見町では狩猟や炭焼など山小屋に木の又に縄を付け、簡略的に作ったものをジザイカギ（自在鉤）と呼んでいる。

カギザオの上にはヒダナ（火棚）が吊るされ、そこにはぬれた藁の履物を掛けたり、カチグリ（勝栗）などが掛けられている。照明の材料のネマツ（根松、松脂を多く含んだ松木）を干すマツホシ（松干し）なども載せたりする。ヒダナは、太くなったヒダナナワ（火棚縄）で吊るされている。

囲炉裏の隅やキジリなどには、炉で燃やした残り木すなわちオキ（燠）をヒケシツボ（火消壺）に入れ、消炭を作り、炬燵こたつや行火の炭あんかに利用する。多くは蓋付きの陶製のものである。会津平坦部ではヒケシガメ（火消甕）と呼び、茄子形の石製のものが多い。石はトーガハライシ（稲荷原石）と呼ばれる、会津若松市河東町八田地区の稲荷原産の軟らかい石で、火にあたると堅くなるが、水に弱い性質である。家族の数により大小さまざまな形がある。

## （2）さまざまな暖房具

寒さが厳しい会津若松地方では、暖房具としてコタツ（炬燵）は欠かせない。コタツにはコタツヤグラ（炬燵槽）が掛けられる。会津地方では、朴木でほぞを組み製作したものである。コタツヤグラには炬燵用と行火用とがあり、行火用は小さく作る。コタツヤグラは指物大工など専門職人の製作する頑丈なものである。『新編会津風土記』大沼郡永井野組蛇食村（会津美里町）では、文化6年当時「曲炬燵」と称するものがあったことを記載している。「又蛇食村ニテ檜木ヲ曲テ炬燵槽ヲ製シ産業トス、俗ニ曲炬燵ト称シ、極テ下品ノモノナレトモ、堅固ニシテ寒国ノ民用ニ便ナリ、」とあり、専門職人以前の自製のコタツヤグラが存在したことがわかる。

会津地方では、座敷などに炬燵を設置する機会が多い。床下に箱形に炬燵の炉となる部分を設け、そこに石製の炉を設置する。セキロ（石炉）と呼び、会津平坦部では尺5寸四方、深さ1尺ほどの大きさのものが各戸2、3箇所あった。只見町ではコタツナベ（炬燵鍋）と呼び、大きな鍋を転用したものである。コタツヤグラにはコタツガケ（炬燵掛）を掛ける。仕事着の古いボロ、特に麻布を数枚合わせ、麻糸で刺したものを用いた。後には木綿布などに、麻の葉や七宝などの模様をきれいに刺したのも利用されるようになる。

機織のときに足元に行火を置いたり、布団の中に行火を入れて暖をとる場合が会津地方では多かった。会津地方では行火をヒバコ（火箱）と呼んでいる。会津平坦部では稲荷原石のものが多いが、只見町など南会津西部の伊南川流域には稲荷原石のヒバコはほとんど流通しなかった。木を削り抜いたものや、粘土製のものもあり、ヒバコ用の小さなコタツヤグラを使用する場合もあるが、多くは古布などにくるんで使用する。只見地方では、陶製の行火が多く用いられ、二段式のニカイアンカ（二階行火）も用いられた。

只見町では、コタツやアンカには、自家製のカジコと呼ぶ、原始的製法による木炭を使用した。カジコは、土中に穴を掘り、原木を積ね尺を付けたのち、ぬれ笹をかけ土を掛けて、一週間ほど置いて作ったもので、各家で晩秋にカジコ焼きを行った。晩秋の只見町の風物詩であり、昭和50年代前半で廃絶した。

厳しい寒さから家畜を守るため、厩中門造の民家が会津地方に建てられたことを前述した。蚕に害を与える鼠を退治する猫も大切な家族の一員である。特に猫は寒さを嫌うため、只見町では藁で猫の入る器、ネコチグラ（猫ちぐら）を作って囲炉裏のそばに置いた。隣接する南会津町旧南郷村では、ネコイズミと呼ぶ。またネコイジコと呼ぶ地域もある。藁を細く束ねた状態のものを、渦巻状に編みあげて容器を作った乳児や幼児を入れるイチコにその製作方法が共通しているため、ネコチグラやネコイズミ・ネコイチコという名称が存在するものとみられる。例えば、飯を釜ごと入れるイチコや皿を保管用するためのサライチコ、新潟・山形・福島県に位置する飯豊山に登拝したときに屋根に上げるヘイジコ（幣いちこ）などの名称がある。チグラの呼称は、只見町付近の限られた地域で聞かれる。

南会津地方の豪雪・極寒を象徴する民具として、トコバコ（床箱）がある。南会津町木伏ではハコドコ（箱床）と呼び、ある老人は昭和46年までハコドコを利用してきた。トコバコは只見町に隣接する金山町山入地区でも使用されてきた。縦2m、横1m、深さ30cmほどの箱に藁を敷き詰め、布団を入れて寝るものである。只見町梁取では、昭和初期ごろまで使用してきた。ハコドコに寝る習俗は、山形県の方にもあったことが、高山彦九郎の『北行日記』寛政2年（1790）に記載されている。「床箱とて箱の内に小兒老人を寝す。藁など敷てやわからかに、冬は暖く夏は蚤上らずよろしとぞ、」とあり、老人と子どもが寝ている。また脇田雅彦・節子両氏の調査により、岐阜県旧徳山村にも存在したことが報告されている。

只見町から松枝岐村や大沼郡昭和村などでは、嫁入りに持参した長持を棺桶として、亡くなった折に利用する習俗があった。只見町ではキンビツ（衣櫃）と呼び、松枝岐村ではカロウドと呼んでいる。松枝岐村では男性用は蓋が平らで、女性用は中央部が盛り上がった形のものである。大きさは縦3尺、幅2尺、高さ2尺5寸ほどの小型の長持型である。カロウドの呼称は不明で、こうした習俗は福島県内ではこの地域

のみであろう。

### （3）火難除け

大沼郡の山間部から南会津郡の旧御蔵入領の地域では、建前に棟木にヒブセ（火伏せ）とかヒブセノカミ（火伏せの神）といって、木製の男根や女陰を形どった呪物を奉納する習俗が昭和20年代まで一般的に行われてきた。女陰を藁で作る地域もあり、女陰は朽ちて存在しない場合が多く、男根のみが解体時に取りはずされてきた。松枝岐村では女陰のかわりに曲物の桶の底を抜き、これを男根に通し奉納する例が多く、セーマラとかオセーマラと呼んでいる。

男根と女陰を形どった呪物を火難除けに奉納する地域は、福島県内では阿武隈川流域の安達郡・伊達郡で、二本松市から福島市・伊達市に位置する。阿武隈山地の相馬郡飯館村にも分布している。この地域は伊達郡川俣町と隣接し、行政的には浜通りであるが、風土的には中通りといえる。これら男根・女陰を奉納する地域では、建前の晩に約一坪ほど板で囲い、そこに夫婦で一晩過ごす習俗があった。南会津町旧南郷村では、「板囲い」と呼んでいる。

浜通りの南相馬市鹿島区では、ゴンボといって牛蒡のように縄を細長く巻きつけたもの、鮭のような魚を板に縄を巻いて作ったもの、籠を「水」の形に縄を巻きつけて作ったもの、水樽や罎節の形に作ったものを屋根裏や棟木などに上げる習俗が見られた。やはり火難除けとして奉納されていた。

男根や女陰を形どった呪物を奉納する地域は、会津に接する栃木県日光市旧栗山村、新潟県魚沼市旧入広瀬村などにあり、日光市泥浮ではオセーマラと呼び、松枝岐村と同じ呼称がある。旧会津藩領の会津平坦部は、穴があいたように分布していない。

## 4. 生産用具 農業・山樵・漁業・狩猟

### 1) 農業

#### （1）田畑を耕す

会津地方では一家の働き頭（主人）を「鋤頭」と呼ぶ。鋤・鎌は農具の代表的な存在であるところから、家長を鋤頭と呼ぶようになった。単に鋤というと、平鋤を指す場合が多い。

宝永元年（1704）の佐瀬与次右衛門著『会津歌農書』では、「田畑を耕す農具、<sup>からすき</sup>犁や<sup>（鋤）</sup>打鋤鑄鋤三品ありける 元よりも会津の田畑割ふくハ 柄のか<sup>が</sup>むたる打鋤ぞかし」とある。<sup>からすき</sup>「犁」や「鑄鋤」は与次右衛門の知識から他国での鋤をあげ、「元よりも会津の鋤」というように、会津は「打鋤」すなわち野鍛冶で鍛造した鋤を指している。それは平鋤であり、まだ三本鋤など備中鋤は使用されていない。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、平鋤の絵が描かれている。なお、寛延元年（1748）の『会津農書』写の農具の記載では、『鋤——田畑<sup>ウナウ</sup> 搗生具。里にては毎年新鋤ヲ用ゆ。山郷にてハ古鋤を焼、仕置して用、鋤柄反<sup>ソリカカム</sup> 儂<sup>オノレ</sup>ハ己が腰膝にふし<sup>クラベル</sup>に比。』と、山郷では古鋤を焼き直して使うとある。

只見町でも、クワ（鋏）といえば、刃先をクワガラ（鋏柄）にはめる平鋏をさす。会津地方では、『新編会津風土記』によると、大沼郡胃組の山村では「鋏柄」を作り、生計の資としたことが記載されている。クワガラは使用する者が自ら製作する場合が多く、多くはブナ等の一木取りである。幹の部分に刃先をはめる台（風呂）をとり、柄は枝部にする。幹と枝の勾配が大事であり、『会津農書』にあるように、柄の反りは使用する者の腰や膝に合わせるとある。只見町ではヒラグワ（平鋏）といった場合、刃先全体が金属の鋏を指し、南会津町山口の「へつり鍛冶屋」が製作した改良鋏である。これをへつりグワ（へつり鋏）と呼んでいる。柄を鋏先に指し込むのではなく、挟むようにしてボルトで止めるものである。

只見町の鋏で注目すべきものに、タゴシラエグワ（田ごしらえ鋏）がある。タゴシラエとは、ヒドロタ（卑泥田）と呼ばれる強湿田で、春先に昨年秋に刈った稲株を掘り起しながら、田を軟らかくする（代掻き）作業をいう。タゴシラエグワの柄には、鋏を打ちこんだときに飛びはねる泥水を防ぐ泥除け具をつける。只見町では杉板に穴をあけたもの、マタビの蔓で板状に編み穴をあけたものの2種がある。杉板製のものが多く、テズラと呼んでいる。金山町山入ではミズヨケ（水除け）と呼んでいる。

石川県地方ではテドリ、山形県庄内地方ではテンズラと呼び、竹を編んだものである。大蔵永常による文政5年（1822）の『農具便利論』では、越後の泥除け具として、「ねこ」と呼ぶと図まで記載している。また東海地方の農書『百姓伝記』（天和2年説）には「鋏かさ」として解説し、「ていでい」とも呼ぶと記載している。テドリ・テンズラ・テズラ・「ていでい」と語韻が似た用語で、日本海側に多く見られる。福島県内で泥除け具を使用してきたのは、只見町付近のみであり、新潟方面より伝播したものとみられる。

サンボングワ（三本鋏）、刃先が三本に分れた鋏、備中鋏は会津地方でいつごろから使用されたか不明である。文化12年（1815）写の『会津農書』に欄外に注記で「三本鋏」と記載しているので、文化年間ごろに使用されたものとみられる。相馬地方では天保年間（1830～1844）頃の農具の書上げに、「備中鋏」・「立萬能」・「三本子 四本子」とあるので、やはり文政年間から天保年間にかけて使用されたものであろう。宝暦13年（1763）の中野義都著『北郷鄙土産憐民政要』の農耕の図には、平鋏での田起しで備中鋏は使用されていない。サンボングワには、刃先が長い畦塗りに使用するものもある。

カノと呼ばれる焼畑では、ヤマグワ（山鋏）などと呼ぶ柄の短い鋏を使用した（三島町大石田）。焼畑は山の急斜面のため、柄を短かくする。只見町ではカツツァボウ（掻っつあ棒）と呼び、二又や三ツ又の自然木の原初的な道具を用いる。刈った草木や焼き残りの木を集めたり、ソバやアワなどの種子を蒔いたあとの土掛けに使用する。南会津町川衣ではカクサマトウリ、桧枝岐村ではカクサボウとかカクサなどと呼んでいる。川衣ではシオジの木で作る場合が多いという。

## （2）馬や牛を利用する

東北地方では田うない（田起し）は、三本鋏やマンノウグワ（万能鋏、四本鋏、猪苗代町など）などで行い、明治20年代ごろからは、バコウ（馬耕）とかバコウグワ（馬耕鋏）と呼ばれる馬や牛に引かせる犁が使用された。初期のバコウは刃先をはめる部分が杉の根曲り部などを利用したもので、後にはニダンバコウ（二段馬耕）など改良式のものが使われるようになる。喜多方市熊倉町館稲荷神社には、明治40年（1907）に奉納された稲作を描いた絵馬が拜殿に掛けられている。バコウによる田うないが描かれているので、明治後半にはかなりバコウが普及していたことがわかる。

新田起しや畑の開墾には、トウグワ（唐鋏）を用いる。『会津歌農書』には、「唐鋏（とうくハ）といふハ鉄にて作るなり 第一新田おこす時よし」とある。相馬地方では、唐鋏をマンノウ（万能）と呼んでいる。

田植え前の代掻きには、古くからマグワ（馬鋏）が使用されてきた。相馬市の大寿A遺跡からは、8世紀の馬鋏とみられる遺物が出土している。代掻きは田植え前の大事な作業で、田植え終了後には早苗に御神酒を浸し、馬鋏を洗うしぐさを行う。「馬鋏洗い」と呼び田の神を祭り、豊作を祈願する風は全国的である。訛ってマンガアライとも呼ぶ。

『会津歌農書』では、馬鋏および附属用具を列挙して詠んでいる。「鞍ほねやしともちいさく拵へて 馬におほふをしるぐしといふ 田代かく馬把むすびし其綱を いずれの里も把結とぞいふ 鉄のこを胴の横木に九本さし 田のしろかくを馬把とはいふ」とある。寛延元年写の『会津農書』では、乾田と湿田で馬鋏の構造の違いを述べている。「方把——田掻きの時の馬の具。胴ハ木、歯ハ鉄を以作ル。歯数ハ、九本。陸田にハ歯短く、ひとろ田ニは長歯を用る。方把子共云。又馬把トモ書。」とある。馬鋏の歯が9本であるところから、猪苗代地方では9歳の子供には鼻取りをさせるなどといったいる。

鼻取りとは、ハナザオ（鼻棹）といって馬鋏を引く馬の口もとに、竹や木の棹を付け、代を掻く所を導く役で、主に子供や女性が行った。鼻取りをする子供がおらず、代掻きができずに困っていると、地蔵様が子供の姿に身を変えて代掻きを行ったという。この言い伝えにまつわる「鼻取り地蔵」が、只見町をはじめ浜通りの大熊町熊、いわき市四倉町長友など各地にある。

只見町では、馬鋏を引くための鞍、シロカキシト（代掻きしと）には田の神が乗っているの、絶対に人は乗っていけないと言っている。代掻鞍から馬鋏を引く縄を、ハヨウナワ（把結縄）とかハヨウという。正月11日の「農の始め」には、「把結縄」を作る行為が県内の広い地域で行われていた。文化4年の『慶徳組風俗帳』には、喜多方市慶徳付近で正月11日の「農の仕初め」にハヨウナワ（把結縄）を儀礼として作り始めることが記載されている。「十一日 農の仕初めとて把結（ハヨウ）縄よりなひ初め、しろかき道具其外農具を拵初むるなり」とあり、いかにハヨウナワ作りが大事

であるかが理解される。把結縄を馬鋤の片側につけ、もう片側にはハイヨダケ（把結竹）とかハヨウダケと呼び、根曲り竹1本もしくは2本を束ね、鞍と馬鋤に結びつける。只見町ではタカバヨ（竹把結）と呼び、馬鋤をつなぐのにクルミの樹皮を用いた。

### (3) 馬が使えないとき

馬の入れないような湿田のヒドロタでは、**テオシロカキ**（手押し代掻き）を用いた。また、会津平坦部では、コマザライと呼ぶ木製の長い柄をつけた熊手型のものを使用する。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』にはその図が描かれ、現存するものと同形である。寛延元年の『会津農書』写には、「<sup>コマザライ</sup>杷——馬足不<sup>ヒドロ</sup>立深旱泥田植の時手しろといふ。搔廻す具。南蠻とき、なんばん杖にも用ゆ。胴は木歯を以て作る。亦<sup>チリアクタ</sup>薑芥をかきよせる<sup>サライ</sup>鞭ハ木把（根）竹把（根）共木とも。竹に而作る。」とあり、「こまさらい」という呼称は、東海地方の農書『百姓伝記』にも記載され、会津地方のものとはほぼ同形であるとみられる。農具としてのコマザライは会津平坦部地方のみに多く、中通り・浜通りではほとんど見られない。相馬地方では竹で作り、熊手部分は竹を割り、先を曲げたもので、ゴンノと呼ぶ落ちた松葉を掻き集めたり、藁くずなどを掻き集めるのに使用する。只見町では**テオシロカキ**（手押し代掻き）と呼ぶ改良型の手代棒が使われてきた。

コマザライと同じような機能をもつものに、**エンブリ**（柄振）がある。山形の板に長い棹を付けたもので、柄を振るよう使用する農具で、この名称は全国的である。代を掻いた後の田面を平らにするもので、『会津農書』には「<sup>エンブリ</sup>杓——搔田の跡を平らにする具。板を以<sup>スリ</sup>作<sup>スリ</sup>る。地摺<sup>スリ</sup>をのこぎり<sup>スリ</sup>齒<sup>スリ</sup>に刻む。亦<sup>エンブリ</sup>捌と書。」とある。エンブリでは「<sup>ス</sup>均す」といわず、「<sup>ス</sup>摺る」という。均すは「<sup>ス</sup>不成」に通じるためという地域が多い。

馬が入れない深いヒドロタでは、会津地方や中通りの阿武隈山地ではオオアシ（大足）で代掻きをする。また、猪苗代湖周辺では、ナンバと呼ぶ横長型の田下駄を使用する。これは民俗事例としては、猪苗代湖周辺のみで、昭和30年代まで使用されてきた。同形のものは、静岡県沼津市の浮島ヶ原周辺で使用されてきたが、現存しない。沼津市歴史民俗資料館に復元製作されたものが展示されている。『百姓伝記』にも、「かんじき、なんばとも云、（中略）ふか田をかへし、また田を植へるに足にはくものなり。」とナンバという呼称の存在を記述している。ナンバは貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』にも描かれ、現存するものと同形である。

『会津農書』には、「<sup>ナンバン</sup>霏板——馬足不<sup>ヒドロ</sup>及深旱泥田植の時泥ふみならず具。板を以長サ貳尺八寸横八寸に作る。人に寄て少は大小有。是ハ横板に用。」と形態まで記述している。足を大きく横に広げ上げ、相撲取りが<sup>ヒ</sup>四股を踏むように、力強く田面を踏み込み、土塊を踏み均す。身体のバランスを取るため、杖をつく。ナンバツエとも呼び、コマザライや柄の長いマンノウ（万能、三本鋤）も使用する。猪苗代地方では、田植え終了後にナンバに御神酒を浸した早苗で洗う仕草を行

う。これをナンバアライ（ナンバ洗い）と呼び、餅を供え田の神を祭り、豊作を祈念する。

『会津歌農書』では、「なんば」と併記する形で「大足」を記載している。「あしなりにはきて泥<sup>な</sup>ふむ<sup>たて</sup>縦板を元より是は大足といふ」とある。「元より」とあるのは、「なんば」が猪苗代湖周辺のみで使用されていた特殊なものという意味が込められているとみられる。『会津農書』では、「<sup>オオアシ</sup>大足——馬足<sup>ナラシ</sup>レ叶深旱泥田植の時泥をふみ<sup>ナラシ</sup>均具。板を以長サ貳尺横壹尺に作る。人に寄て少シハ大小有。是ハ立板を用ル。」と形態をも記載している。オオアシは浜通りでは、相馬郡飯館村比曾や大熊町野上など阿武隈山地に位置する地域で使用されており、太平洋沿岸ではほとんど使用されなかった。

### (4) 水を引く

伊南川流域の南会津町旧南郷村から只見町にかけて、春先の田植え前に、伊南川に細木を組み、そこに柴をあて堰止め、逆流する方法で水田に水を引く。これは村あげての共同作業で、オオゼキ（大堰）と呼ばれる。三角形に細木を組んだカリヤスを数個造り、これを川に沈め、ナガラと呼ぶ細木を横に結えつけ、カリヤスをつなぐ。ナガラに柴をあてていく。カリヤスの中には多くの石を入れて安定させる。石や柴を運ぶのにブチブネ（打舟）と呼ぶ丸木船を只見町梁取では大正初期ごろまで使用したという。カリヤスには**オオカリヤス**（大カリヤス）と**コカリヤス**（小カリヤス）の二種類がある。カリヤスの設置は、「鱒留梁」でも行われた。貞享2年の『和泉田組風俗帳』にはその構造を詳細に記載している。「五月始めに川を留切申候、長貳間ニハキ廻位之細木を三本宛かりやす二ゆい、中段二棚を仕石を上げ、川幅二より右のかりやす五拾間も立、ながらと申細木を二通りゆひつけ、長壹間二横五尺位之蘆をあみ立申候二付、鱒川上へ通不申候」とある。カリヤスに入れる石を運ぶ背負い籠を**タガラ**と呼ぶ。堆肥を運ぶ**ソラックチ**を小さく作ったものである。

小さな堀から高い場所の水田に水を引く道具として、只見町では**ミズヒキポンプ**（水引ポンプ）と呼ぶ箱の筒状で、水鉄砲のように水を吸いこみ、水を押し出す。他地方では、スッポンなどと呼ぶものである。

施肥用具は、肥料運搬に関わるため運搬用具の表に多く分類されているが、ここでは施肥用具という使用目的から述べておきたい。

### (5) 堆肥の運搬

肥料はほとんどが自給肥料である。下肥・小便・厩肥・堆肥・刈敷・灰などである。厩肥すなわち牛馬の小屋に敷いた藁は、糞尿がしみ込み、また食べ残しの草類などが腐り発酵し、貴重な肥料となる。厩から厩肥を引き出す道具として、**コエダシカギ**（肥出し鉤）がある。古いものは自然木の幹と枝を鉤形に利用したものである。その鉤部の勾配がむずかしい。あまり角度があっても肥が引つ掛かりにくく、はずれてしまう。角度が鋭角であると腰が痛く引きにくい。そのため春木山の薪採りの時などに、コエダシカギに適した材があったら採取しておく。絶えず注意を払っておく。寛延元年写の

『会津農書』には、「木鉤——馬の糞出スカギ。」とある。後には鉤の部分、鉄製になる。

厩肥や堆肥を運ぶには、只見町ではソラックチ（空口）と呼ぶ背負い籠が多く用いられる。金山町ではソラッカゴ（空籠）と呼ぶ。木の幹と枝の鉤部を背中にあたる部分に二本組み、左右に曲り木を組み、これに縄や山ブドウ皮をからめ籠形に作ったものである。会津平坦部ではタガラとよび、中通り・浜通りではタンガラと呼んでいる。南相馬市鹿島区では枝分れが多く弾力のある樅<sup>もみ</sup>の木を用いる場合が多い。

『会津農書』には、「箕——漢字にはあじかと云。土を入背負器か。<sup>(不測)</sup>□か縄を以て作ル。<sup>モロコシ</sup>□と竹にて作ル。」とあり、「箕」という漢字をあてている。『会津歌農書』の農具一覧には、「手箕」と記載しており、「たがら」と読ませたものとみられる。『百姓伝記』には、「あぢか」と表記し、構造や使用方法も同様である。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「たから 是ハ田畑養はこび申入物」とあり、「養」すなわち肥料運びの道具と説明し、図まで記載している。

大量の堆肥や厩肥を遠くの田畑に運ぶには、タレバカマ（垂袴）が用いられる。会津平坦部から中通り・浜通りの広い地域でタレバカマと呼んでいる。タレバカマは馬の背に長方形の木枠を荷鞍に設置して、馬の背の左右両側に縄で網状に結んだ袋を付ける。その両側に堆肥を入れ運ぶ。下すときは、左右の袋を同時にほどき、堆肥を下す。『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「たれはかま 是ハ右（たがら）同断馬ニ附候具」と図を添えて説明している。喜多方市熊倉町館の稲荷神社に明治40年に奉納された農耕絵馬には、タレバカマの使用風景が描かれている。

大沼郡の山間部から南会津郡では、タレバカマはピクと呼ぶ。『会津歌農書』では、「垂<sup>たれはかま</sup>袴こやしをはこぶ馬の具ぞ是を他方でびくといふなり」と「びく」という呼称の存在を示している。

タガラやタレバカマに堆肥を入れるときに使用するのが、箕の形をしたエボである。『会津歌農書』には「柳箕」とある。「柳箕ハ田畑の腹しすくひ入 馬に負する時そもちゆる」とある。『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「あは 是ハ右（たがら）同断、たがらたれはかまへ入候具」とある。エボは柳のごようを左右両端に束ねるようにして、束ねた部分を取手にして箕形に作ったものである。クマエビの蔓を利用する場合もある。秋田県や青森県では同様のものを、エブイザルやエビと呼んでいる。大沼郡の山間部から南会津郡にかけては、サデミ（さで箕）と呼び、会津平坦部のエボと製作方法や形態も同じである。

糞尿すなわち下肥を運ぶには、テンビン（天秤）でコイオケ（肥桶）を前後に担ぎ運ぶ。会津地方ではフリオケ（振桶）と呼ぶ地域が多い。浜通りではダラオケ（だら桶）と呼ぶ。糞尿をダラと呼んでいる。『会津歌農書』でも、「天秤にかけてぞはこぶ腹うつわ 凡この名をふり桶といふ」とある。大沼郡山間部から南会津郡にかけては、コエダル（肥樽）と呼び、樽に下肥を入れ背負って運ぶ。急傾斜の山道では、テン

ビンを使うことができない。コイオケやフリオケには、下肥を汲んだり、入れたりするコエビシヤク（肥柄杓）がある。板で箱形に作ったものや桶のものが多く、長い柄を付ける。

会津地方は冬期間は雪で一面の銀世界におおわれ、大寒の冷え込みは雪をコンクリートのように凍らす。雪により山の低木そして田の畦堀などは凍結した雪で大雪原となる。このような状態をカタユキ（堅雪）と呼び、その上をソリ（橇）で木材を出したりする。農家では堆肥を運ぶ。「肥引き」と呼び、厩肥や堆肥を橇で運ぶ。肥引きは、雪がとけない午前中に行く。雪原に黒い堆肥の山が点在する光景は、雪国に春を告げる風物詩のひとつである。橇はオンノレと呼ばれ、「斧も折れるほど堅い」といわれるダケカンバを材料とする場合が多い。浜通りでは船の櫓の材料に多く用いられる。喜多方市熱塩加納町日中地区の橇は有名である。文化年の『五日組風俗帳』にも「雪舟橇 十月初より三月中旬まで拵申候但、山岩尾、野辺沢、五日村端郷、大平、黒岩右村々にて重に差出申候」とある。橇は風俗帳には、「雪舟」とか「雪車」などと記載されている。

#### (6) 田植え

田植えは、明治時代中頃から会津地方でも正条植えが行われるようになり、**タウエワク**（田植棒）が只見地方で使用されるようになる。八角形の木枠を田面上に回転させ、柵形に筋を付けるもので、新潟県内で発明されたともいわれ、会津地方では只見町をはじめ南会津郡に多く見られる。浜通りでは南相馬市原町区など一部の地方でも使用された。福島県内ではガジとかガジボウと呼び、3間ほどの細長い板に1mほどの割竹を、苗を植える間隔（6～7寸）に打ち付けたもので、縦・横の筋を付け、その交叉した箇所<sup>さん</sup>に苗を植えるものである。天水田など水を抜くことのできない水田では、井桁状に棧を打ち付けたジョウバン（定板）を田面に置き、縦・横の交叉した部分に苗を植える。会津地方には、植える箇所にイボ状の突起を付けたジョウバンがあり、イボジョウバンと呼ばれている。

正条植え以前は「やたら植え」とか「めった植え」と呼び、畦際に縄を張り、上手な人が縄の目印にそって植え、それに並んで早乙女たちが植えていた。『会津農書附録』八には、田植えの方法には「真果敢」・「廻し果敢」の方法があると記載されている。真果敢とは、早乙女が同じ間隔に並んで蟹のように横に植えては、後ろへ退き下がる方法である。

苗代から植える田に苗を運ぶのには、ナエカゴ（苗籠）とかボテカゴ（棒手籠）と呼び、天秤で前後二つの籠に入れて運ぶ場合が多い。ナエカゴ一籠には120把の苗を詰める。植える田の面積により、苗の数を見積って運ぶ。苗をタガラ（またはソラックチ）で背負う場合もある。

会津若松市付近では、ヒヤッカとかヒラッカと呼ぶ楕円形の皿状の籠2箇を天秤で担ぎ、苗や野菜を運ぶ。会津地方ではゲンゴロウをヒヤッカと呼び、その形に似ているところからの名称と推測される。前述のエボ（またはサデミ）を二つ合せたような形である。

猪苗代地方にはドガンボと呼ぶ、苗を背負う運搬具がある。戸板のような背負い板に、根曲竹で半円の輪を付けて、そこに縄で袋状に網袋を付けたもので、網尻を縄で結び、苗を入れる。下すときは細尻をほどき下す。このような苗運搬具は、福島県内では唯一の形である。

#### (7) 草取り

田の草取りは、一番草・二番草・三番草とほとんど手取りであった。後に**ガンヅメ**（雁爪）が使用されるようになった。福島県内ではいつごろから使用されたかは不明である。明治以後とみられる。文政5年（1822）大蔵永常の『農具便利論』には、「畿内、西国ハ昔しより用ひざる国なし。諸国に用ひたきものなり。」と、畿内・西国のほかは当時あまり普及していない様子を記載している。

同書には九州地方の「雁爪」の図も記載し、そこに「くさとりつめ」の図も併記している。クサトリツメ（草取爪）は鉄製で指にはめるように作ったもので、猪苗代町内野や浜通りでは双葉町でも使用していた。鉄製の草取爪の代用として会津坂下町ではクリムシの巣（藪）をはめたり、南会津町田島では親藪をはめて草取りを行ったという。津軽地方の天明～寛政年間（1781～1800）の『奥羽民図彙』にはウズキとみられる木を用いたことが描かれている。仙台地方では竹の管を指にはめて使用したという。

田植えの正条植えは、除草機の普及とも大きく関係している。ガンヅメ（雁爪）を回転させる形で発明したのが、鳥取県の中井太市であり、「太市車」として全国に普及していった。会津地方ではコロバシ（転し）などと呼ぶ地域が多い。只見町では**ジョソウキ**（除草機）と呼んでいる。会津若松市周辺では明治14年（1881）に高橋佐平や山口英吾などが、「豊年草」と呼ぶ改良型の除草機を製作している。このような改良型の除草機は、各地で見られた。古いものは一条型で、二条型などと改良されていった。浜通りの相馬地方ではタグルマ（田車）と呼んでいる。双葉町歴史民俗資料館には、竹製の爪の除草機が保管されている。農薬が普及する以前の除草機は、昭和30年代まで県内で使用されてきた。

草取りは炎天下のもと、田面を這いながらの重労働である。背中に直射日光が差し熱くなる。熱さを防ぐため、背中に薦編みの蓑を着ける。只見町では**ヒデリゴモ**（日照薦）と呼んでいる。同様のものを福島県内で広く使用した。これを忘れたり、急に暑くなったりした場合は、木の枝や笹を応急対策として背中に当てたという。

草取りや草刈りなどの農作業には、蚊やブヨ・虻などの虫に悩まされる。布を藁で巻いたものに火を灯し、これを腰に付けて虫除けとする。大沼郡昭和村では桧の皮を縄にない、これを輪にして頭に巻き火を灯す。ヒナワ（桧縄）と呼んでいる。三島町や会津若松市東山町湯ノ入地区では、カコと呼び藁柄を束ね火を付け、平地でも草取りなどに、田畑に立て虫除けにした。会津地方の文化4年の風俗帳には、「蚊しふ」とか「かしふ」・「蚊ゆふし」などと記載されている。

同風俗帳には「かしふ」の構造について、「田畑へ働きに

出候には蚊しふと申を腰に結つけ申候、蚊しふと申は藁の中へ漆木のみを干したを入、たひ松の様に結び火を付候得は、火気不出煙り計多く立候に付、蚊よりつきかたく候」と、詳しく記載している。

#### (8) 収穫の道具

畑作物の収穫具で注目すべきものに、只見川流域でアワやキビの穂摘みに使用される**コウガイ**とか**コゲイ**と呼ばれるものがある。約10cmほどの木製の台にヤスリや鋸・包丁・鎌などの金属の刃を打ち付けたものである。紐を付けこれを中指に通し、ちょうど弥生時代の石包丁のようにして、片手で穂摘みを行う。大沼郡三島町から只見川上流、伊南川流域にかけて、新潟県魚沼市（旧入広瀬村）や三条市（旧下田村）など会津に接する地域でも使用されてきた。只見川流域では昭和30年代まで使用された。主に、カノと呼ぶ焼畑で栽培したアワの穂摘みに使用してきた。同形のものは、青森県・岩手県等の古代遺跡からも出土しているが、民俗事例としての報告はない。コウガイという名称の由来については不明である。

三島町から金山町・只見町にかけて、山漆の樹を割り、細く平たくそぎ、これをザルのように編み上げた**ウルシザル**（漆笊）がある。三島町では**キザル**（木ザル）と呼んでいる。丈夫なザルで、芋や大根など重い野菜の収穫に適していた。ウルシザルは三島・金山・只見町の只見川流域の一地域のみで作られてきた。

会津地方では野良仕事に出る場合は、**ハケゴ**と呼ぶ腰籠を着ける場合が多い。ハケゴという呼称は、会津地方で広くあり、県南地方の東白川郡などの一部にもある。ハケゴは他地方でいう獲った魚を入れる**ビク**と呼ぶ腰籠と同形で、相馬地方など浜通りでは**フゴ**（踏籠）と呼んでいる。ハケゴは畑作物の種子を入れたり、また豆やナス・キュウリなどの野菜を入れたりもする。大沼郡から南会津郡の山間地方ではマタタビの蔓でハケゴを編むが、喜多方市熊倉や雄国岳付近や磐梯山麓の猪苗代町などでは、根曲竹で製作する場合が多い。ハケゴという呼称の由来は、不明である。寛延元年写の『会津農書』には、「吐籠——万種子物を入、腰に付蒔器。竹を以造。元ト鶴仕腰には鶴二魚を為吐籠に用始ル故に鶴吐籠と名付り。」とあるが、現在会津地方ではこの伝承を聞くことができない。

稲刈は、クサカリカマ（草刈鎌）を用いた。新しいものより、古くなった切れ味の悪いものが適したという。イネカリカマ（稲刈鎌）と呼ばれる鋸鎌の一般的な普及は、福島県内で昭和以後である。鋸鎌の使用については、宝永4年（1707）の加賀の農書『耕稼春秋』にその図が記載されているので、石川県地方では江戸中期ごろから使用されていたものとみられる。『会津農書』には「稲刈鎌——稲并**マツサ**等刈具。里郷にてハ鎌を両手持短草を刈故に鎌腰を折て鎌柄を永くして仕。山郷ハ長き草片手ニ引引苧にするゆへ鎌腰を折らず、柄の短を用ル。」とある。貞享元年（1684）当時、会津地方では稲刈に草刈鎌を用いていたことがわかる。



福島県内の山間部や猪苗代湖周辺には、ヒドロタ（卑泥田）と呼ぶ湿田が多く、稲刈りに田下駄を用いる地域が、会津・中通り地方に見られる。浜通りでは相馬郡飯館村や南相馬市原町区の山間部など、阿武隈産地の地域に限られる。只見町布沢などでは、雪時にはくマルカンジキ（丸標）を履いて稲刈を行ったという。郡山市中田町や三春町・田村市などでは、下駄状の板に竹輪をつけたものをガンキなどと呼び、稲刈りを行った。

会津地方ではヒラキ（平木）と呼び、下駄状の板に縄の鼻緒を付けたものである。『会津農書』には、「平駕——平板ヒラカの類。馬足不立深ヒドロ田の稲刈時人の足にはく。板を以作ル。亦ハ谷地平駕トモ云。」とある。寛政元年（1789）の『農民之勤耕作之次第覚書』には絵と寸法が記載されている。それによると、「長一尺二、三寸」「幅九寸」と、現存するヒラキとはほぼ同じである。

猪苗代湖南の郡山市湖南町秋山などでは、アミシキ（編敷か）といって根曲竹を横長型に簀状に編んだものを履いて稲刈を行った。同形のものを喜多方市山都町堰沢では、ナンバンと呼び紙漉きに用いた楮カラの柄カを編んで作った。南会津郡下郷町では、オオアシを小型に製作したものをコアシ（小足）と呼び稲刈に用いた。

#### (9) 脱穀

会津地方では、稲扱きには古くは「竹扱たけこき」を用いたことが『会津農書』に記載されている。「住古より竹こきを用ひ、又鉄扱を用るものを少し有。」とあり、「鉄扱」も使われていることがわかる。寛延元年写の『会津農書』には、「竹扱——竹貳本シバリ對縛コヒて稲を扱具。長短ハ己が指ユビに比クラフ。」とあり、いわゆる扱箸を使用していたことがわかる。貞享2年の『野沢組風俗帳』にも、現在の喜多方市高郷町池原村の記載では、「笹竹を刈坂下江出商売ス、彼竹田所ニ布買取稲こきニ仕、こき竹と名付」とあり、まだ千歯扱が使用されていないことがわかる。また、麦の脱穀には『会津農書』には、「柄箸——麦コクを扱具。竹貳本シバリ對縛コヒ。又梗箸カウハンと、「竹扱」と同様のものが使用されていたことがわかる。

会津地方でセンバ（千歯）が使用されるのは、文化年間に入ってからであろう。センバまたはセンバコキ（千歯扱）と呼ばれる「稲扱」は、文化4年の『熊倉組風俗帳』に「稲こき」と記載されているところから、18世紀後半ごろから使用されたものであろうか。正月14日の「かせとり」と呼ぶ子供たちによる予祝行事がある。農具の絵を描いた紙を持ち各戸を訪問し豊作を祈るもので、会津地方では現在も行っている村がある。ただ農具の絵を持って訪問する習俗は見られない。喜多方市熊倉付近では、「銭さしと小紙へ鉄鎌まぐわ、ゑんぶり稲こきなどを画きて、其内へ入れ口きく事を禁じ、」と、当時「稲こき」すなわちセンバが使用されていたことがわかる。

中通り地方では、須賀川市中宿村で文化4年の家屋の消失目録に、「稲こき三丁」とセンバが当時使われていたことが記載されている。浜通り地方の相馬藩領では、天保年間ごろ

の農具の書上げのなかに、「稲扱」と記載されている。また、当時の民謡の田植え唄の一節に、「竹扱」から「稲扱」への変遷過程を示す世相が歌われていた。「を等か若へとき手こきてこへた（ナンチウエー）今の若衆は稲扱てこぎある（ナンチウエー）」とあり、文化・文政の頃に稲扱が使用され始められた様子がわかる。南会津町旧南郷村には、天保7年（1836）銘のセンバが奥会津博物館南郷分館に保管されている。センバで稲を扱くと、ピリンピリンとかザランザランと音がするため、ピリンピリンとかザランコという呼称が会津平坦部で聞かれる。

大正初期には只見町にも足踏み式の脱穀機が使用され、イネコキカイ（稲扱機械）と呼んでいる。須賀川市駅前には、富国社という足踏み脱穀機を製作していた会社があった。福島県内はもとより東北・関東地方へと販売されていた。戦争時には「進歩号」という商標名で、中国満州方面まで輸出されたという。

#### (10) 粃ようし

センバで脱穀した粃には、穂切れとかノゲ（芒）が多くあり、次の粃摺りの作業に支障があるので、これらを取り除かねばならない。この作業を「粃ようし」と呼ぶ。筵むしろに脱穀した粃を広げ、モミヨウシ（粃ようし）とかモミブチボウ（粃打ち棒）と呼ぶ勾配のある自然木などで打ち叩く。ソバの脱穀にも用いる。『会津農書』には、「扱たる粃を細腰杵を以よふし、」とあり、テキネを使用するとある。また「よふし」という農語については、「ヨウフヘ 禾粃、芒麦等ノ鹿ツキ。是関東ニテハ庄ヨウフヘ之春テキネトスル也。」とある。相馬地方では麦の芒おとしを、「麦ようし」と呼んでいる。

只見町をはじめ伊南川流域の諸村には、さまざまな形のモミヨウシが使用されてきた。『会津農書』でいう「細腰杵」型のもので、打ち部を扁平に板状にしたものである。ヒラバモムヨウシ（平刃粃ようし）といって、古鋸の刃の反対（上部）を打部にして、棒状の柄を付け、両手で持って粃を打ち叩く。古い民具の再利用である。またツキグワ（突鎌）と呼び、平鎌の鎌先を古くなったコウシキ（除雪具）にはめ、床の板間に粃を広げノゲ落としを行う。今でもツキグワで粃ようしを行った鎌先の傷跡が、板間に残っている農家もある。また、片手用のものもある。粃のついた穂先や芒ちりのついた塵を、只見町ではボッサラと呼んでいることから、ボッサラオトシと呼ぶ片手用のものもある。また横杵型で、杵の打部を扁平に削ったヨウシッキネ（ようし杵）もある。

福島県内で広く粃ようしに使用されるのは、アオと中通り・浜通りで呼ぶ槌型のものである。打部に溝を彫り、粃中に打面が多く当たるようにしたもので、杉の根曲り材を利用したりする。その形から「鬼歯」などと呼ぶ地方もある。南会津郡下郷町では、それを使用するときの音からか、ポッコラと呼んでいる。

中通り・浜通りでは、粃ようしに「唐棹」を使用する所もある。その呼称は地域により様々である。相馬地方ではフリウチ（振打ち、南相馬市鹿島区、相馬郡飯館村）、ベイ（相馬郡

新地町)、カラサオ(中通り)などである。粃ようしよりも、大麦のノゲを取り除く「麦ようし」に多く用いたという。

会津地方では、「唐棹」はほとんど使用されない。栃木県に隣接する南会津町滝ノ原や水引など、ごく一部で粃ようしにクルリボウ(クルリ棒)と呼んで使用してきた。『会津農書』の農具の記載には、「連枷——からさは、亦まへきねと云。梗麦打具。又連架ト云。」とある。『会津歌農書』には、藍打ちに「連枷」を用いていたことが詠まれている。元禄11年(1698)に阿波の藍功より新しい栽培方法を学んだとあり、「連枷」はその時に導入され、藍打に使用されたのか不明である。同書の「農具八十三品」には、「麦打棒と連枷」とも記載されており、麦打に使用されていたことが推測される。

粃ようしを行った後、穂切れやノゲなどを選別して取り除く。会津地方では根曲竹で籠状に製作したモミドウシ(粃ドウシ)を用いる。『会津農書』には、「モミフルイ——粃をとをす器。縁底ともに竹を以作ル。又粃囊。此とおしハ寛文之始頃より出来。」とあり、寛文年間(1661~73)ごろから会津地方でも使われ始めたという。

会津地方には2月8日と12月8日の「事八日」と呼ぶ両日に、厄除けの呪いとしてメケイ(目籠)やモミドウシを掛ける行事が近年まで行われてきた。文化4年の『熊倉組風俗帳』には、「(2月8日)此日は疫神の廻る日にて目の多き物を家の外へ出しかけ置は疫神よけるとて、家毎に粃とうしをかけ申候、不快なならはしに御座候、」と、当時の様子を記載している。

#### (11) 調整・選別

粃から粃殻を取り除き、玄米にする作業を「米拵こめこしらえ」と呼び、古くはキズルス(木摺臼)を用いた。キズルスが現存するのは会津地方の博物館や民俗資料館のみである。『会津農書』上巻の「木礮挽并拵」は、わが国における唐箕の最古の使用記録や、「木礮」すなわちキズルスの変遷過程、「汰桶」から「汰板」への変遷や作業能率の向上過程など、近世農具の発達過程を示す貴重な資料である。以下、調整・選別用具の名称を検討するうえでも基礎となる資料のため、長文であるが引用することをご了承いただきたい。

#### 木礮挽并拵

木礮両縄より片なわけ果敢行也。両縄を二人にて一日曳ハ大方米壺石、片なわを二人にて一日曳ハ米式石曳なり。片縄引ハ延宝の頃より少し始る也。木礮引ハ遅く曳ハ果敢行す、早く引ハ徒粃にて落る。遅早の中を定心にて曳べし。ぬかを去るハ昔より箕を以簸、今颯扇を仕ふハまれニ有。吹き去たるぬかともを、扱てみに懸れハ色々の屑共出る。其くツを箕にて吹返、死米、くたけ米迄取、其跡を又箕を以ゆり留て、ぬかを去て淘粉を取也。扱又木礮に往古よりぶなの木計用来る。明暦、万治の此より松木をも用る也。木礮一柄に三四人取付曳よりハ、小きを求め大勢の者ハ壺人宛して曳柄も立てよし。

ふなの木ハおもき故、米くたけ、糠立升目ふゆる也。松木はかるきゆへ、米くたけす、ぬか多らす、升目少き也。米拵往古より汰り桶を以汰来る処に、承応、明暦の此より京篋フルイ始り、荒よし寄汰桶(く)より益増なり。延宝年中ハ板篩出、京ふるひよりも又まし也。大方一日のゆり米にしてゆり桶にて式斗、京篋にて四斗、板篩にて八升出来る也。

(日本農書全集第19巻、『会津農書・会津農書附録』)

この記述の「京篋」は「米通」、「板篩」は「ゆり板」に相当することは、貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』の「ゆり板」の説明とその図からもわかる。「ゆり板 是ハ納米あら小米多り出申、近年出来申具、前廉ハゆり桶、中此米通ふるい用申候」とある。

『会津農書』によると、キズルスは古くはブナの木で作られていたが、明暦・万治の頃(1655~61)から松の木で作られたとある。現存するキズルスは、ほとんどがヒメコマツと呼ばれる松製である。上臼と下臼とに分かれ、上臼を半回転させることにより、上臼と下臼の合わさり目の歯で粃を摺り、粃殻を摺りむき玄米にする構造である。『会津農書』には「両縄」と「片縄」の二種があると記されている。「両縄」は上臼の両わきに、引綱を付けて二人が相対し、交互に引き半回転させるものであるとみられる。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「するす」として上臼の両側に引綱の付いたキズルスが描かれている。「片縄」については不明である。

「片縄引ハ延宝の頃より少し始る也。」とか、「木礮一柄に三四人取付曳よりは」の記述からすると、延宝の頃(1673~81)から使われ始めた新しい構造のものであることがわかる。「一柄に三四人取付」の記述は、「遣木やりぎ」の使用を推測させられる。遣木を使ったものとするなら、上臼は全回転となり、作業能率も倍増する。それは「両縄」で米壺石に対し、「片なわ」は米式石になるという。しかし現存するキズルスは、ほとんど臼の歯は放射状に彫られたもので、いわゆる「両縄」である。わずかに奥会津博物館には、南会津町旧田島町より収集された八分画型のキズルスが2点保管されている。八分画型のキズルスは東京都・千葉・埼玉・栃木県など関東地方の博物館等に保管されており、町田市立博物館には文政3年(1820)銘のキズルスが保管されている。ドズルス(土摺臼)の改良型として、土摺臼の構造が再び木摺臼に応用されたとする説もある。

土摺臼は、東海地方の農書『百姓伝記』によると、寛永元年(1624)に長崎に中国から入ったとある。ただ碎米や米のつやが無くなるなど、ロス米が多く出るとある。幕府は代官嶺に土摺臼の使用禁止令を延宝5年(1677)に出している。郡山市守山は当時代官嶺であったため、守山代官宛にその文書が發布されている。山形県東田川郡の代官嶺にも、同じ内容の文書がある。これはまだ東北地方で土摺臼が使用されていないにもかかわらず、各地の代官嶺に發布されたものであ

ろう。

福島県内では、郡山市小原田の土摺臼が有名である。いわき市平出身の鈴木半之丞が、良質の粘土を求めて仙台に行き、その後小原田で良質の粘土を発見し、土摺臼製作にあたったという。半之丞は橋本家に婿養子に入り、橋本家で二本松藩の保護のもとに土摺臼を製造したという。小原田の土摺臼は、以後中通りはもとより会津・浜通りへと流通していった。

只見町など伊南川流域のドズルスは、上臼にかつてのキズルス上臼を再利用し、穀物を入れる部分を製造したものが多し。下臼と上臼の下部の歯を埋めこむ部分はザル編状の籠に粘土を詰めた形式で、歯はクスギなどの堅木を埋め込んだものである。明治5年(1872)の安積郡・岩瀬郡の農具図には、木摺臼と土摺臼と一緒に記載されているので、両者が共用されていた時代であったことがわかる。

粳摺りした後は、玄米と粳穀（ゆりこ）と呼ばれる米粉、そして粳が入り混じっている。まず最も軽い粳穀(福島県内ではヌカと呼んでいる)をトウミ(唐箕)で吹き飛ばす。『会津農書』では「颯扇」という字をあてている。寛延元年写の『会津農書』では「颯扇（モミフルイ）」と表記している。「颯扇——又とうみ。穀物の稈ヲ吹く。貞享之頃より始。」とある。

会津地方の唐箕で注目すべきものに、ハントウミ(半唐箕)がある。一般の唐箕は、選別された穀物が重さにより表側や裏側の樋口を通して出る構造であるのに対し、ハントウミは穀物が出る樋が無く、真下に落下するものである。河沼郡湯川村北田で製作された「北田唐箕」に多く、米沢市には天保8年(1837)銘の「北田久内」の焼印の唐箕がある。また南会津町針生には文化5年(1808)銘の唐箕が奥会津博物館に保管されている。東日本最古の紀年銘のある唐箕である。只見町梁取の常法寺で使用されていた安政4年(1857)銘の唐箕は、只見町内では最も古い年号の唐箕であろう。

初と玄米そして淘粉を選別する作業、「米拵」には古くから「汰桶」が使われてきた。寛延元年写『会津農書』には、「汰桶——盤の上に置いて米を淘器。椀を以曲る」と、使用方法と構造を記載している。只見町から南会津郡伊南川流域の旧南郷村・旧伊南村にかけて、センダイ(選台)と呼び曲物の篩型の選別用具がある。他地方では「ゆりばち」とか「ゆる」・「ゆりわ」などと呼んでいる。大沼郡金山町では昭和10年代まで使用しており、大正6年銘のものもある。また南会津町木伏には文化10年銘のものもある。

木伏では十五夜の晩に、センダイに餅や野菜を入れ明月に供える風習が、昭和60年ごろまで行われてきた。十五夜に「汰桶」に入れ餅などを供える風習は、文化4年の風俗帳などにも記載されている。また、「汰桶」は田の神を祀る道具として貞享2年の風俗帳にも記載されている。『中荒井組風俗帳』には、「九月廿九日晦日刈上ケの餅、秋餅とも云、田の神へ上げて祝ふ、又かい餅をして餅ハ揺桶二入、かい餅は舂に入上る、此時田植手伝の者に振舞」と、「揺桶」が田の神も祀る具になっている。貞享2年の『和泉田組風俗帳』に

は、南会津町虻官で野良仕事ができなくなった年寄たちが、「桶ひしゃく或は米ゆり桶など曲げ、」と、「ゆり桶」を製造していたことが記載されている。

#### (12) 調整・選別用具の変遷

延宝(1673~1681)の頃には、「汰板」または「板篩」と呼ばれるものへと変遷していく。寛延元年写の『会津農書』には、「板篩——米淘器縁底を共板にて刺組。仙道にて仕出し。当地にてハ延宝年中より用る」とある。只見町や南会津町では「汰板」をセンダイと呼び、昭和10年代まで使用してきた。南会津古町には明治21年(1888)製作の紀年銘を有するセンダイもある。中通り地方の明治5年(1872)の農具図にも、汰板とマンゴク(万石)と一緒に描かれているので、当時は中通りでも共用していた。

江戸後期になると、汰板からマンゴクへと調整用具が変遷していく。南会津町旧伊南村には、天明7年(1787)銘のマンゴクが保管されている。福島県はもとより東北最古のものである。只見町坂田には文政3年(1820)銘の万石、金山町上井草には天保3年銘の万石が保管されている。石川郡古殿町には、白河の唐箕師が製作した天保2年銘の万石と唐箕が同一家で使用されてきたものが、ふるさと伝承館に展示されている。河沼郡湯川村北田の小野徳武氏(昭和6年生れ)は、古くから「小野平兵衛」の屋号で万石製作にあたってきている。大正元年に北田家で唐箕製作を廃業したため、小野家で唐箕製作を行うようになり、小野徳武氏は「北田唐箕・万石」の製作技術を継承する貴重な民俗技術保持者といえる(平成13年逝去)。

只見町はじめ南会津町では、マンゴクとセンゴク(千石)という呼称がある。マンゴクは大型で選別する網が二重になっており、網下に落下口が設けられている。センゴクは小型で一枚網のもので、他地域というマンゴクである。マンゴクは南会津町丹藤で製作したものが多く見られる。

「汰桶」から「汰板」への変遷過程の「京篋」に相当するのが「米通し」である。寛延元年写の『会津農書』には、「京篋——米をとおす器。縁を竹輪にて細縄にてかき、底を糸にて縫。承応・明暦の頃より仕出し。」とある。これと同じような機能をもつものに、コメゴドオシ(米粉通し)がある。縁は竹に細縄を巻き、底は麻糸網でできたものである。底の麻網を強くするため、蜂の巣を煮だした蜜蝋を塗ったりもしたという。

選別用具で最も身近で、手軽に使用されるのが箕である。会津地方の山間部では、カワミ(皮箕)と呼ぶサワグルミ(またはカワグルミ)の樹皮で製作した箕を用いる。自製品であり、6月ごろ樹木が水分を吸い上げる季節に樹皮をむき採り、折り曲げるように箕の形にして、シナ皮糸で縫いとめる。カワミは選別がよく、現在も会津地方では使用している。また、タケミ(竹箕)とも呼び、縦を藤の皮、横を竹で編んだ箕を専門職人が製作したものも購入するようになった。只見ではカワミが多かったが、タケミを新潟方面から製作技術が入ってきて、製作する人もあったという。

『会津農書』では、箕の使用について詳しく記載している。「扱たる<sup>チキネ</sup>粉を細腰杵を以よふし、粉箕にて返し、ちりを取捨て、其粉を箕にてはしり、ぬかを簸出也。かならず少しも実の有しへなを吹捨ざる様にすべし。」と、箕でよく選別して粉を粗末にしないよう指導している。米拵においても、唐箕使用以前に箕を専ら使用してきたことを記載している。

箕は、単に穀物を選別する農具のみならず、魂や霊を祀る用具という概念も見られる。猪苗代湖周辺では、同年の子供が亡くなった場合、「耳ふさぎ」と呼び、耳に箕をあて、「言いこと聞け、悪いこと聞くな」と唱える習俗が近年まであった。「耳ふさぎ餅」といって餅をあてる習俗は、文化4年の風俗帳にも記載されている。浜通りのいわき市や相馬地方では、「耳ふさぎ」といって小正月に耳に箕をあて、「いい事聞け、悪いこと聞くな」と唱えたという。

## 2) 山樵用具

福島県内では、**ナタ**（鉞）といった場合、刃先に突起のあるものが多く、これを各地ではハナ（鼻）などと呼んでいる。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』の農具の書上げには、「なた」と突起のあるナタが描かれている。只見町ではこのような形のもを、**ハツキナタ**（嘴付鉞）すなわち「<sup>くはし</sup>嘴」の付いた鉞からの名称とみられる。この呼称は県内でもあまり聞かれない。只見町ではナタと言った場合は、ハナ（只見でいうハシ）のないナタで、**コシナタ**（腰鉞）と呼ばれるものである。ハシは石や岩に刃があたらなためと、薪や柴など木の蔓で結束するとき、ハシで引っかけねじり縛るのにも用いる。

会津若松市内には多くの鋸鍛冶屋が多く、「会津鋸」の名のもと、東北地方はじめ北海道など各地に販売されてきた。会津鋸は横挽きが主で、立木の伐採に用い、**テンノウジ**とか**テンノウジノコ**（天王寺鋸）などと呼ばれる。テンノウジの呼称は、鋸が大阪の天王寺前で販売されていたからという。この呼称は会津地方に多く、中通り・浜通りではほとんど聞かれない。浜通り出身の筆者が会津に着任したばかりに、「テンノウジ持っ来い」と上司にいわれ、「テンノウジとは何ですか」と聞き直したことがあった。

縦挽きは、**マエツピキ**（前挽）とか**コビキノコ**（木挽鋸）と呼ばれるもので、幅広く背の部分が湾曲したものが多い。マエツピキは滋賀県甲賀市等で製作されたもので、「近江」などと刻まれた文字を見ることができる。マエツピキはモトヤマ（元山）と呼ばれる伐採業を専門とする人が多く所持している。丸材から板に挽くの用に用いる。

立木を伐採するには、**ヨキ**（斧）でウケ（受）と呼ぶ切口を倒す側に付け、反対側からテンノウジで横挽きをする。鋸の刃が挟まらないように、切口に、ハナノキ（イタヤカエデ）などの堅木を用いた**キヤ**（木矢）を打ち込む。キヤはマエツピキで板に挽くときも用いる。後には**カナヤ**（金矢）が用いられるようになった。会津地方には大木が多く、普通の鋸では芯の部分まで刃が届かない場合もある。そのためコミと呼

ばれる刃の部分と柄のあいだを長く付けた**シンキリノコ**（芯切り鋸）が用いられる。これは中通り・浜通りではほとんど見ることができない。大木を鋸で挽き伐採するためには、多くの時間を要する。ヒロロ等で編んだ**シリシキ**（尻敷）を敷く。

モトヤマは、ヨキで伐採した木材の表面を削り、柱や桁・梁などに加工するときに、**ヒラバヨキ**（平刃斧）を用いる。ヨキは斧の別称であり、会津地方で広く聞かれるが、相馬地方など浜通りではあまり聞かれない。いわき市遠野地区の林業、主に杉の伐採業に携る人たちは現在も、ヨキと呼ぶ片手用の小さな斧を、枝打ちなどに使用している。上遠野の鍛冶屋では、毎年注文があり製作している。モトヤマは、伐採の仕事始めの儀礼として柱などを一、二本削り、山中の安全を祈る。これをヨキダテという。

## 3) 漁撈用具

福島県は、浜通りに太平洋、中通りに阿武隈川、会津に猪苗代湖と只見川と、海・湖・川の自然に恵まれており、そこで使用する漁具が各地の博物館や民俗資料館等に保管されている。本稿では、只見川を中心とした漁具について述べ、それに関連して、中通り・浜通りの漁具にも若干触れたい。

只見川の漁具は、突き、鉤、釜、網、釣の方法に大きく分類することができる。また昭和初期に、下流に多くのダムが建設されたことにより、鱒や鮭、鮎など日本海から上る魚種の絶滅など生態系の変化もあり、漁法も大きな変化があった。幸い、只見町ではこれらの漁具を収集・保管することができ、その使用方法等についても詳細な調査カードがある。

只見川上流域の只見町内では、マス（鱒）が最大の魚で、冬期間もイズシ（飯鮭）や燻製などのほか、近世には「<sup>そ</sup>鱒楚割」と呼ばれる特産物があった。文化6年（1807）の『新編会津風土記』の黒谷村などに書きあげられている。貞享2年の『和泉田組風俗帳』には、「秋鱒をそ割と申二仕候、尾ひれ之能ヲそ割二仕、火棚にて干、毎年御台所御用二指上申候」とあり、藩に献上していたことも記載されている。田子倉や石伏などでは、「廻り川」といって、鱒を捕獲する場所を上・中・下に分け、日毎に集落の上中下組の人たちが交替で漁を行った。捕獲した鱒は、平等に分配したという。廻り川による鱒漁は、秋の産卵期に行われた。

鱒はサクラマスと呼ばれ、桜の花が咲くころ日本海から阿賀川・只見川へと上ってくる。只見町内に入るところには藤の花が咲くので、フジマスとも呼ぶ。夏の間は、深い淵にいることが多い。**ヒキガキ**（挽鉤）、**マスカギ**（鱒鉤）と呼ぶ約1mの鉄製の棒の先に、釣針のように鉤を付けたもので、水中に石を抱いて潜り、鱒の下から腹を目にかけて引掻き捕る。

貞享2年の『和泉田組風俗帳』には、当時の「かぎ」による鱒漁を詳細に記載している。「小林邑=鱒川狩仕候者、六七月炎天時分能天気之節、長三尺之かぎを手持、川幅に應じ四五人も壺度ニ水底入、互ニかぎを合罷在候、川下より瀬子之者岡より石を投げ鱒を追候へ者、鱒登り申候をかぎにて

引きかけあがり申候、能取候へ者一日ニ拾本余も取申候、水底に罷在候かき取者数人無御座候、川狩にて取候鱒は、前々より引付ヲ以半分宛留主肝煎方江相渡し、残りを川狩仕候者わけ申候」とある。ヒキカギによる鱒漁の様子は、只見町に隣接する新潟県魚沼市大白川の個人宅に保管されている絵に見ることができる。

鉤類では、秋の産卵期にホリ（堀）と呼ばれる産卵場所に集まる鱒を捕るオキカギ（置鉤）がある。木の又状の枝に、金属製の鉤を上向きに結わえ付けて置き、マスが鉤上来たところを捕獲する。鱒漁は秋の産卵期が最も盛んである。貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、産卵期の漁法について、その漁法と漁具を記載している。「又秋彼岸前より彼岸過迄鱒之堀時と申て小石之所をほり子をうミ申候、此時ハ押網置鉤やす杯と申道具ニ取申候」とある。オキカギの他、マツキヤス（鱒突やす）やマスアミ（鱒網）と呼ばれるトアミ（投網）が用いられる。マスアミは麻糸で編まれた目の粗い、鉛のおもりが付いたもので、覆い被せるようにして獲る。風俗帳に記載された「押網」と同一である。トアミを入れて運ぶものに、ケヤキの樹皮を利用したトアミイレバコ（投網入箱）がある。背板に湾曲したケヤキの皮を取り付け、底板をはめて背負う。難所な川筋を重い投網を楽に安全に移動するために、背負う方法がとられた。『和泉田組風俗帳』は秋鱒の漁法について、当時の様子を詳細に記載している。「秋鱒彼岸之内子を産ミ候節、夜どおしあミニて取申候、昼はやすニて突、置かきにて取申候」とあり、現存する鱒漁の漁具の使用風景が物語られている。

川を上る鱒を捕獲する最適な場所は滝であり、伊南川上流の南会津町大桃の滝は最も有名である。貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、当時の鱒漁について詳細に記載されている。「大桃村ニ滝之つりあミと申事 高サ式丈斗之滝御座候、此滝へ横二つなをはりぶどうノかわを以さで網之ことく拵、右之つなへくり繩ニ而からくり下ケ置候得ハ鱒此滝をはね越候とてあミ之内へ飛入申候所ヲ取申候、滝役金壺分宛御公儀様江納り申候」とある。滝の勢いに上り切れず落ちる鱒を捕獲するものである。

また、人工的に設けた梁や灌漑用水の堰に、釜を仕かけ獲る方法もある。マスドウ（鱒どう）と呼ばれ、根曲竹で大きく作ったものである。伊南川を、「かりやす」を組んで堰止めたところに、通路となる部分を設け、そこにマスドウを仕掛ける。また、貞享2年の『和泉田組風俗帳』によると、只見町小林では「鱒留」と呼ばれる梁にて、鱒を捕獲していたことが記載されている。その方法は、「川半分程之場所を見積り、居棚を拵、長四尺横三尺計之綱四ツ手ニ木ニはり付、あミ中程ニ袋有之候様に致、そのあミをす下ニ立置、鱒登り段々根ニ付参候をすくひ申候、夜中はあミニ糸繩をはり、鱒あたり申候、お手に覚すくひ申候」とある。

伊南川では冬期間に、イシグラドウ（石倉どう）と呼ばれる簀編にした大きな釜を、川岸近くに仕掛ける。冬期間、川の水が少ない時期に、川の中に石を積み上げ、水が流れ注ぐ

ようにイシグラドウを掛ける。主にハヤが寒さしのぎに入る。『和泉田組風俗帳』にも、「亦石倉と申を川岸に取置鮠を取申候」と、イシグラという呼称を記載している。

只見川の深い場所では、タツベエ（立つべえ）と呼び、横側に魚の入口を付け、水中に立てて使用する釜がある。タテドウとも呼ぶ。小さな釜、ドジョウを獲るものを、只見町ではドジョウドウ（泥鰌どう）と呼んでいる。

会津地方では、広い地域でウツボとよび、ドジョウウツボが一般的である。形態からの相違は、ドウは一般に大型で簀編み状であるのに対し、ウツボは小型でザル編み状である。ウツボは小魚類を獲るのに用いる。貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、「うつぼと申て夏之此小魚之登りを取申候、秋は鱒も入り取申候事御座候」と、南会津郡西部地区にもウツボという名称が古くから存在していたことがわかる。ウツボは、中が空などの意味から生まれたものかは不明である。釜類をウツボと呼んでいるのは会津地方に多く、浜通りでは釜類を全てドウと呼び、捕獲する魚種によりウナギドウ・エビドウ・カニドウ等と呼んでいる。

秋の下り魚を捕獲する釜をムジリと呼び、柳や柴・篠竹で簀編みにしたものを、ねじった形に作る。会津地方では曲がることを、ムジルという。貞享2年の『和泉田組風俗帳』には、「秋に置むちりと申を拵、小魚鱒などを少々宛取申候」と、「置むちり」という名称が記載されている。『伊南古町組風俗帳』には、「もぢりと申て秋の下り魚を取申候、是ハ細キ篠竹、木ノ若ハへ杯を繩ニ布あミ拵、川へハ木を以三尺ほとツノわくヲ立滝を拵かけ置小魚を取申候」と、製作方法と使用方法まで詳しく記載している。松枝岐村では、サンショウウオを捕獲するサンショウヅウ（山椒魚どう）がある。細い柳のごよう糸をブドウ皮で編んだ約1尺ほどの大きさのムジリ形で、現在も使用している。

只見川流域には古くからブチブネという言葉があり、貞享2年の風俗帳には「打舟」などと記述されている。また寛文5年（1665）の大川の会津若松市北会津町の蟹川村では「イクリ船乗り」とあり、鮭・鱒漁を行っていることが記載されている。只見町石伏や宮瀨などの只見川の渡しには、ブチブネと呼ばれる丸木舟が大正初期までであったという。ブチブネは手斧で内部を削り抜いた削り抜き船である。

貞享2年の『中荒井組風俗改帳』の蟹川村の記載には、「大川舟渡 古来より蟹川端村上川崎にて舟渡来、小出、下川崎古来不構、此舟打舟二つ結合、一艘にして往来す」とあり、蟹川村では「イクリ船」と「打舟」と二つの表記がある。只見町の事例から見ても、これらは同一の形式の舟木船とみることができる。ちなみに、只見町小川の船大工によって、板をはり合せた「ハギ船」が造船されるようになったのは、明治20年（1887）頃からといわれている。

文化6年の『新編会津風土記』によると、現在の喜多方市山崎付近の阿賀川では、「ユクリ船」と呼ばれる船で鱒漁が行われていたことが記載されている。「ユクリ舟」は「イクリ舟」と同音語の名称であろう。同書によると、「ユクリ舟」

は「幅二尺計、長三間計ノ漁舟」とあり、新潟県村上市の三面川の丸木船とほぼ同じ大きさである。現在、三面川で行われている「イグリ網」と呼ばれる鮭漁も、「イクリ舟」すなわち丸木船による漁法が、「居繰網」とその漁法となり現在に至っているとみられる。河沼郡会津坂下町村田付近の大川では、「ゆくり船」による鮭漁が昭和初期まで行われてきた。船二艘による「ハ」の字形になって網を引く漁で、三面川の居繰網漁と同じ方法とみられる。

南相馬市小高区の浦尻に位地した旧井田川浦では、干拓される大正8年(1919)まで、「ドンボブネ」と呼ばれる丸木船でウナギ漁が行われてきた。長さは4.6mほど、幅68cmほどの杉の丸木船で、双葉郡浪江町教育委員会蔵の一艘が現存する。土地の古老はドブフネとも呼んでいた。

#### 4) 狩猟用具

只見町田子倉や石伏には、シシヤマと呼ばれる共同狩猟習俗が、山の神信仰を背景に厳しく継承されてきた。山言葉を使い、日常の里言葉を使わず、山の神より獲物を恵んで頂くという厳粛な規制のもとに猟を行ってきた。田子倉や石伏には、ヤマサキ(山先)と呼ばれる山の神を祀る家があり、シシヤマの統率者として熊やカモシカ猟に関わってきた。

貞享2年の『和泉田組風俗帳』には、只見地方の近世における狩猟の様子が詳細に記述され、猟の罨や方法なども詳しく知ることができる。

「一 先規より鉄砲御免ニ而勝手次第打申候、村々壺挺式挺より外無御座候、山狩者熊、羚羊稀ニ猿など見當り取申候、熊秋中作毛取仕舞候節畠作へ掛り申二付、鉄砲にて打申候、秋春山之通筋を見つり、おそと申をあげ取申候、是は熊通可申道筋に柵を拵、其上ニ大石をあげ置通掛り其柵にてメ候様致候、亦雪降候得者木々のうろ、岩穴に臥罷候を見出し、穴口江柴を伐入出口を留、熊居候処へ穴を明け、鎗、まさかりにてつき申候、木之洞に居候をやすと申候、常は近山へ出申義稀ニ御座候、壺与にて年中ニ壺貳匹取申候

一 羚羊者當組塩岐村端郷八塩田、此西所計取申候、其外之村にては取不申候、嶮岨成高山ニ罷在候物ニ御座候、寒中雪相熊時分山登り仕、壺日ニ壺丸も取申候、右両所外羚羊住可申山無之御座候、寒中取申候者肢御家中御訖に指上げ、草も御公儀様江申候、はげミニ罷成候ニ付情仕候、冬中ニ四五匹漸取申候、伊北黒谷組にて村々取申候、委細書上ケ可申候、猿は自然と鉄砲打見當り取申候、山ニより沢山往申候へ共、山殺生不心掛候故年中壺ツ貳ツの詔御座候」

貞享2年当時、村には鉄砲を所持し猟をすることが許可された「鉄砲打」が、1、2名存在していた。この頃の鉄砲は、ヒナワジュウ(火縄銃)であり、玉も自分で造って使用した。こうした方法は、昭和30年代まで行われてきており、カヤクイレ(火薬入れ)やタマイレ(玉入れ)・タマツクリ(玉作り)などの用具からも、うかがい知ることができる。また罨としては「おそ」と呼ばれるものがあり、板上に重い石を載せ、その重みで熊を圧死させるクマオソ(熊おそ)

の作り方が詳しく記載されている点は、注目すべきである。バンオソ(板おそ)というイタチなどの小動物を獲るものもある。「おそ」は「押し」からの訛語か、不明である。穴熊獲りの方法も詳細に記載されており、「鎗」で突くとある。これはシシツキヤリ(シシ突鎗)と呼ばれるものであろう。只見町ではカモシカをアオシシとかクラシシとも呼び、シシは大型獣を指して呼ぶ場合が多い。

熊は雪が消え始める春先に冬眠から目覚め、「やす」と呼ばれる熊の巣の穴から出た所を捕獲する。一方、カモシカは冬眠せず、雪の降る中で猟を行う。大雪の中を山に入るため、ツルカンジキを履いて身体が雪に埋もれないようにする。コウシキで前方の雪を掻き分けて進む。またテッカワ(手皮)と呼ぶカモシカの皮で作った手袋を両手にはめ、雪を掻き分けて進む。そのあとに仲間たちがツメカンジキを着けて進む。

野兎も雪が降るときに猟を行う。「ベーギ掛け」といって、兎の居るところに木の枝を投げつけると、兎はその音を鷹と勘違いし、雪の中に頭を突っ込み身動きできなくなったところを捕獲する方法である。喜多方市山郡町一ノ木では、サワグルミの木を端の方の皮をむき投げると、パタパタと鷹の羽ばたく音がするといっ、サワグルミをベイに利用するという。相馬郡飯館村比曾でも、同じ方法で野兎を獲ったという。

只見町では捕獲した兎やテンなどは、アミブクロ(網袋)に入れ背負って持ち帰る。アミブクロは麻糸で網状に編んだもので、白糸のままだと山の神に失礼になり、獲物も獲れないといわれたため、熊の血で染めて使用したという。山の神を祀るイクサギ(戦木)と呼ばれるブナや杉の大木があり、ここから先は山の神の領域である。シシヤマに出るときは、参加する全員が、イクサガケエマノハンギ(イクサガケ絵馬の版木)で刷った走り駒の紙を重ね合わせたものを、頭梁のヤマサキがコガタナ(小刀)でマツリギに突き刺し、豊猟と山中安全を祈る。これをイクサガケと呼び、これより一切里言葉の使用を禁じ、山言葉を使用する。猟を終了し、里に帰るときは豊猟と無事安全を山の神に感謝し、マツリギから馬の紙を取りはずす。これをイクサを解くと呼んでいる。このあとは、山言葉を使うことを禁じられる。山の神には絶えず信仰し、サンジンサマノハタ(山神様の旗)を奉納したり、ヤマサキからヤマサキノゴヘイ(山先の御幣)を受け、神棚へお供えする。山の神にオコゼ(虎魚)をあげ山中安全や豊猟を祈る。金山町三条の山の神社にもかつて奉納されており、現在は移転先の本名集落に保管されている。

#### 5) 養蚕用具

只見町付近の養蚕用具の古い歴史を知る資料に、貞享2年の『伊南古町組風俗帳』の「養蚕の事」がある。その記載によると、「まいを作り申候蚕を入物ニハ、わらだと申物又ハ折かわと申て木の皮を箱のごとくに仕養候、まいヲ為作候にも右のわらだ、折かわへ桑葉を多く敷置、松の葉、かや等を

以てまぶしと申を拵、蚕を入置申候へハ、則此のまぶしへまいを作り申候」と、「折かわ」や「松の葉、かや等を以まぶし」を作るなど、古い形の養蚕用具を見ることができる。

風俗帳に記載された「わらだ」は、只見地方では古い形式のものは、すべて藁で丸く編みあげたもので、**ワラダ**（藁座）と呼んでいる。後にカゴワラダ（籠わらだ）とも呼ばれ、丸く浅い竹籠を作り、底部に筵を敷いた形のものとなる。この形体は福島県内ほとんど同じである。

南会津町木伏（旧南郷村）の五十嵐家の屋根裏にあったサワグルミの皮で四角型に、長さ1m幅60cmほどの大きさに作った養蚕具オリッカを10枚ほど見たことがある。サワグルミの一枚皮に折り目となる傷を付け、折り曲げシナ皮で縫い止めたもので、その製作方法から「折かわ」そしてオリッカという名称が生まれたものと推測される。

繭を作る用具の「まぶし」は、古くは「松の葉やかや」で作ったとある。只見地方藁で山形に折りたたむ**マブシ**（簇）が多く使用されてきた。山の谷間にあたる場所に蚕が巣を作り、繭を作る構造になっている。その以前には、バツタンマブシなどと呼ばれ、**マブシオリキ**（簇織機）で藁を束ねたように織りあげたものを使用した。只見町梁取ではケムシマブシ（毛虫簇）とも呼ばれ、一本の縄状のものに二寸置きぐらいの藁で放射状に出た形を作る。そこを巣に蚕が繭を作る構造で、松の葉や茅などの原初的なマブシに次ぐ古い形態のものであろう。

## 6) 染織用具

伊南川流域は、古くから「伊北麻」の産地として良質の麻を生産し、その麻を求め江戸・大坂方面から多くの商人たちが仲買に来た。南会津町古町はその取引の中心で、古くから市が開かれていた。伊南川流域は、冬期間の雪寒気による「布さらし」と呼ばれる加工に適した地域でもあった。

貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、「伊北麻」の製造について、当時の様子を紡織用具名と共に記載している。「麻付けはぎの事 成程能く干色白く成候時水にひたし四夜、五夜ほと置はぎ候而、一夜も水にひたし板へのせ、かなごと申物ニひき申候、是を麻のつけはぎと申候」とある。

また麻から麻糸にする「苧つむぎ」については、「苧ノゆいうみ」と呼び、女性が集り麻糸作りに励んでいた様子がかがえる。こういう機会を得て、苧つむぎの技術の修得と向上にも寄与してきたものであろう。「苧ノゆいうみと申事八月、九月(卯)の此年斗十二、三ツ女子共五人、七人宛(組)与合、夜ルター所へ寄合、苧紡申候而夏の農帷子ニ仕候、是をゆいうみと申候、子供ノ紡苧故糸悪敷ふと布に御座候故伊北麻にハ不罷成候」と、当時の「伊北麻」が生産されるまでの歴史を見ることができる。

「麻付けはぎ」の作業に用いる用具が**オヒキブネ**（苧引き舟）と呼ばれる、削り抜き浅い槽形のものである。この中に**オヒキダイ**（苧引き台）を入れ、その上に麻の皮を置き、**オヒキ**とか**オヒキガネ**（苧引金）と呼ばれる金具で削るよう

に表皮を剥いていく。剥いだ表皮をオグソ（苧ぐそ）、剥いだあとの幹をオガラ（苧柄）と呼ぶ。オグソは布団の中に入れてたり綿入れの綿がわりに使用した。オガラは屋根の軒先を葺くのに用いる。またステギ（捨木）と呼び、約1尺ほどの長さに切り、大便をした後の尻ふきにも利用した。

苧つむぎには、曲物で作った**オボケ**（苧桶）に紡んだ麻糸を入れていく。女の子は13才ごろになると、オボケを親などから与えられ、苧つむぎを見よう見まねで学んでいく。「苧ゆいうみ」は、この地方の女性たちにとっては、「伊北麻」というブランド品を生産するうえで欠かせない技術修得の場であった。「麻付けはぎ」と「苧つむぎ」の用具は、現在大沼郡昭和村のカラムシ織の生産において、麻と同じ方法で使用されている。

文化4年の『伊南伊北四箇組風俗帳』によると、「伊北晒」は太布と細布とに分けられ、自家用と販売用とされてきた。特に細布は、「五郎丸」と呼ばれる上質麻として流通していった。「ふと布ハ手前之着用ニ致シ細布家毎に式正位も出来、其内宜を清水ニてさらし夜あく水ニ入置又翌日さらし如斯する事日数廿日許にて出来上り申候、右ニ廉之品董當郷第一之産物にて金方上納并年中小入用之助仕候、商人買集江戸出シ候」と、伊北麻生産の盛んな時代の様子を記載している。

「伊北麻」と呼ばれる伊南川流域の麻布織には、**ジバタ**とか**ジバタオリキ**（地機織機）が用いられてきた。座った形で織るもので、現在昭和村のカラムシ織に使用されている。絹や木綿織には、**タカハタ**（高機）と呼ばれる腰かけた状態で織る。福島県内ではほとんどタカハタで、ジバタは奥会津地方の麻やカラムシ織に使用されてきた。貞享2年の『伊南古町組風俗帳』によると、「苧紡はたおりの事 十月之此より堅苧をうみ春ニ至テハ正月二日、三日此より夜なべニうみ早出来ハ二月下旬此より織四月中迄織申候、昼夜女之励ニ仕候、」と、冬期間の女性の大切な仕事として、この地方で麻の生産が行われてきた。

## 7) つる細工用具

只見地方は真竹や猛宗竹が自生しないため、古くからマタタビやアケビの蔓や、シナ皮やヤマブドウの皮などでザルや籠・背負籠などを作って生活用具として使用してきた。文化4年の『伊南伊北四箇組風俗帳』には、「ざる作り 但またたびと申木のつるを取り細にシニ作り」とあり、当時、伊南川流域でマタタビザルを製作していたことがわかる。マタタビの蔓を二ツ、三ツ、四ツなど製作する器にあわせて、**マタタビサキ**（マタタビ裂）で引き割る。先を堅木（ユキツバキなど）で十字型に作り、これをマタタビの蔓に割り入れ、引き裂く。自分の手に合ったように自製する。裂いた蔓を一定の太さにするために、刃に溝をつけた**マタタビヒキ**（マタタビ引）で押し削り、ヒゴ状に作っていく。

## 8) 手工用具

藁の履物や蓑・背中当などは、正月明けから春の農作業が

始まる前に、家族が使用する一年分の生活用具を作っておくものといわれる。藁やヒロロなど、春の土用すぎの暖かくなってから作ったものは丈夫でないという。寛延元年の『会津農書』でも、「正二月雪の上には、公用の品々并に人馬の農具自作に叶分調置へし。則、農器の品々置也。若シ為度怠り、期に至而用意するにおいては諸作毛の妨と成へし。亦其郷村に仕来る商物を励て農業の営に加へへし。」と、正月二月のうちに農具および藁・履物・馬道具等の道具を作っておくことを指導している。文化4年の『伊南伊北四箇組風俗帳』にも、「そふりゆうし馬沓 十二月より正月迄右之品々冬中雪おろしの間々に稼申候、他郷へ持出金銭に致候程ニも無御座皆以一巳々々之持用仕候、夏申入用之農具など拵置申候」と、農具やはきものを冬のうちに準備しておくことを説いている。農民にとって、藁は大切な資源でもある。藁の確保が大切で、木地挽の村など稲作を行っていない集落では、木工品や山菜等と藁とを交換する場合もあった。

藁はまずシビと呼ばれる部分を取り除く。会津地方では、すぐりかす藁をクタダと呼び、それを布団に入れたものを、クタダブトンともクズブドンとも呼ぶ。藁をすぐる用具にワラスグリ（藁すぐり）がある。厚板を櫛の歯状に作ったものや、木の又を利用したものなどがある。ヒロロ（ミヤマカンスゲ）のハカマを取り除くためのヒロロスグリがある。

次に、すぐった藁を細工するために、ヨコヅチ（横槌）で打ち叩く。ヨコヅチは、ツチンボと呼ぶ地方もある。正月14日の「長虫除け」という魔除けの行事に、ヨコヅチに縄を付け、これを子供たちが雪の上を引きながら家のまわりを廻る。「長虫来んな、ツチンボウ様のお通りだ」と唱える（三島町）。またヨコヅチは人間の頭の形をしており、南相馬市鹿島区では一年のうちに一家で2人の亡くなったときは、ヨコヅチ1固を作って棺桶に入れ葬る。何事三度、ヨコヅチも一人分と数え、三人として終りとする。そのため、ヨコヅチを作るときは必ず2固作るものとされた。また、カケヅチ（掛槌）と呼び、両手で打ち、ヨコヅチと交互に向いあって打つ場合もある。家のニワ（土間）には、ワラブチイシ（藁打石）が埋められている場合が多い。

ワラゾウリやアシダカなどを編むときは、自分の足の指に芯となる縄を掛けて、横に藁を入れ編んでいく。足のかわりに台を使うこともあり、只見ではゾウリダイ（草履台）と呼んでいる。中通りの三春町・田村市などでは、クサシという。クサシという方言は、中通り・浜通りでは、「手抜き」という意味であり、それが民具の名称となったものとみられる。

会津地方では藁の短靴型の履物をゲンベイと呼び、製作することをゲンベイカキと呼んでいる。作るときにはゲンベイガタ（ゲンベイ型）にはめ、編んでゆく。会津地方ではゲンベイといい、寛文5年（1665）の風俗帳にも「ゲンベイ」と記載されている。同形のを相馬地方では、ジンベイと呼んでいる。どちらもその名称の由来は不明である。

オソフキと呼ばれるものをワラジに付け、足のつま先を覆

ったものをオソフキワラジと呼び、秋方や春先の農作業、山仕事に着用する。オソフキノカタ（オソフキの型）もある。オソフキという呼称は、相馬地方にもある。藁細工をする場合、履物を編みあげたら、ケムシリ（毛むしろ）とかケムシリデバと呼ばれる小刀で、毛のように出ている藁を切りおとす。

只見地方ではシナ皮を裂き、撚りをかけて糸にしたものをヨツツオと呼んでいる。ヨツツオを糸玉にするとき、二又になった部分からんでいく。ヨツツオカラミと呼び、豆打ちに用いるマドリのような形である。マドリより又の部分に勾配があり、柄の部分座ったとき膝で押え、糸に撚りをかけてからめていく。南会津町田島ではヒシギ（菱木）と呼び、根曲竹を十字に組み、シナ糸をからめていく。これはアイヌ民族もシナ糸からみに同形のものを使用し、テッチョと呼ぶという。

ヨツツオは畳表を織る時に、経糸として使用される。貞享2年の『和泉田組風俗帳』には、只見町大倉と布沢で畳を製造していることが記載されているので、ヨツツオはこのような畳表に利用されたものとみられる。「大倉、布沢此二ヶ村にてちがや畳をおり、刺申候而売申候、以前と違只今ニ而はちがやふっていでて、只今は漸五七人ならでは無御座候故、さして百姓之足りニも罷成程之義ニ無御座候」と、貞享2年当時の畳製造の様子が記載されている。

## 5. 交通・交易、運搬用具

### 1) 運搬用具

会津地方では山に出かけるときは、セナカアテ（背中当）とニナワ（荷縄）を身に着けるのが一般的で、「から身で山に出かけるのは、怠け者」とまで言われたという。薪木や柴・草など、帰りは背負って帰るのが常識であった。またセナカアテを身に着けていることにより、肩や背を防御する機能もあった。

セナカアテは多くは藁で作るが、シナ皮やヤマブドウ皮で作る場合もある。女性が使用するのは、長方形型に細長く作る場合が多く、ホソミノ（細蓑）と呼ぶ地域が多い。只見地方には、腰に当たる部分を丸みを付けて作り、これをバンドリと呼んでいる。バンドリという呼称は、新潟県や山形県の日本海側のセナカアテの名称に多く聞かれ、福島県内では只見町のみであろう。新潟方面より入ってきたという。

只見町ではネコミノ（ネコ蓑）と呼び、ヒロロやシナ皮などで、蓑の形に編んだものがある。背にあたる部分には亀甲や菱形、または縁起のよい「寿」などの文字を、色付きの布やシナ皮を編み込んで装飾的に作る。これは結婚式の花嫁道具を運搬するのに用い、村の技術のある人が製作するという。会津地方ではニショイミノ（荷背負蓑）などと呼ぶ地域もある。荷背負い蓑で特異な形をしたものが会津若松市湊町地区に見られるイカミノ（烏賊蓑）で、麻糸で堅く織り込んだもので、その形がイカの形に似ているものである。寛延元



年『会津農書』には、セナカアテを「背当——万の荷を背負時人の背に当ル具。藁を以作る。」と記載している。

セナカアテといっしょに使用するニナワについては、「荷縄——荷を背負具。藁を以、糾に縋物而荷縄の類は三合縄。常の仕縄ハ纏両股他。」とある。会津地方ではシナ皮でなったシナニナ（シナ荷縄）が多い。長さは四尋（約6m）の長さで、肩のあたる中央部分は、太めになう。

セナカアテを着けて使用する背負具で、福島県内で広く使用されているのが、ヤセウマ（瘦馬）と呼ばれるものである。只見町では、ショイバシゴ（背負梯子）と呼んでいる。会津地方のものは、下部が腰までの短い形のもが多く、浜通り地方では腰あたりまでの長さで、脚部で後側に反り、勾配が付いている。会津地方は山間部で傾斜地を歩く場合が多いため短く、一方、浜通りは平坦部で使用するため長いものが多い。浜通りではゴンノと呼ばれる落松葉を背負ったり、稲束を背負ったりする。ヤセウマという呼称の由来は、不明である。

ニナワやショイバシゴで荷物を背負った場合は、ニゾエ（荷杖）とかニンズイと呼び、枝を利用して先に突起を付けた棒を持ち、休むときは突起の部分に荷物をのせ、荷物を下ろさずに休む。炭や木炭、また木地椀など長い距離を運搬するときには、必ず持参する。途中の道には休み石が設けられている。

背負い運搬具には、縄や樹皮等で袋型に作ったものが、県内に広く見られる。地域によって名称も違ってくる。会津地方ではヤマブドウやシナ皮など樹皮やがば（蒲）やヒロロ麻等の草類など材質も様々である。会津地方ではスカリと呼び、縄を網状に編んだもので、大型のものがある。藁やヤマブドウなどで網代編など、隙間なく編んだもので、小型のものをコシコ（腰籠）と呼ぶ。両者ともに背負い縄が付けられている。『会津歌農書』では、「透羅とハ縄にてつくり品々の野菜を入れて始末する也 縄腰籠ちいさく造り身に帯し 諸菜を入れて自由たす也」と説明している。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「すかり 是ハ女并子共野狼馬ノ飼草取入せおい参候入物」とあり、その図まで描かれている。「透羅」という字をあてているところから、縄で隙間があるように編んだ入物という観念がみられる。会津地方でスカリとコシコと区別して呼んでいるが、只見町では、両者ともショイカゴ（背負い籠）と呼んでいる。また只見ではショイカゴと呼ぶものに、麻糸で袋状に編んだものがある。山仕事に行くとき、弁当や道具を入れたり、山菜等の収穫物や猟の獲物も入れる。麻糸をなって作ったアミブクロ（編袋）は肩から胸にかけて紐で結び掛け、弁当や食料を入れたりする。

堆肥運搬のソラックチや石運びのタガラは、農耕具の施肥用具で前述している。また、コイオケ・コイビシヤクの肩掛運搬用具も同様である。

人力運搬で欠かせないのがソリ（橇）である。ソリには雪上運搬と、キンマ（木馬）と呼び、木製の木を敷きその上を走らせるものがある。農家ではコイヒキソリ（肥引き橇）が

主に使用される（前述。農耕具）。これはヨツヤマソリ（四ツ山橇）とも呼ばれる小型のものである。只見では堅雪を利用して木材の運搬に用いるカクゾリ（角橇）がある。大木を山から搬出するときに使用するもので、ヤマゾリ（山橇）とかオオゾリ（大橇）とも呼んでいる。また長い丸材（会津地方ではボタと呼ぶ）を搬出するとき、木材の先に使用するバチゾリ（バチ橇）があり、昭和初期ごろに秋田県方面より導入されたという。

只見地方の橇の使用について、『伊南古町組風俗帳』に詳細に記載している。「薪雪車曳の事 霜月中雪積候以後ニ春伐置候たきぎをそりニ而引申候、雪車道を作り候ても其夜ノ内ニ雪隣候へハ道捨り幾度も道を作り直シ曳申故、霜月中旬之此より極月中旬或ハ下旬迄ニ漸曳屈ケ申候而正月より之薪ニ仕候、此雪車曳之間ニ天気悪敷外出不能成時ハ、筵ヲおり或ハ茅表之畳をさし手前々々の敷料に仕候、是を茅畳巻畳とも申候」とある。

橇の附属品として、荷物を縛る縄（ツケナ、積縄）の先にクルリと呼ぶ木製の輪を付け、一方のツケナを輪の中に通し、滑車がわりに荷物を締めるのに使用する。木の枝を輪にして結わえておき、成長後に輪状に付けたものである。また、タガといって、針金や藤蔓で輪を作り、橇の先に入れ、ブレーキがわりにして減速させたり、止めたりする。

畜力による運搬具として、馬の背にニグラ（荷鞍）を装着し、稲束や物資を運ぶ。寛延元年写の『会津農書』には、「荷鞍橋——馬に荷を作ル。鞍是に二品有。一ニハ□首合、荷ニハ四つ目刺と云て鞍笠山形にする。又草鞍とも云。」と、ニグラの種類や形を記載している。附属品としては、「結木——鞍橋へ通し縛る具。木を以作。本乳——鞍のゆきの両端へ付て、胸懸尻懸通ス具。縄を以作る。」とある。「本乳」という名称は、南相馬市鹿島区でも麻などでなった太縄（ロープ）を、モトチと呼んでいる。相馬地方のモトチが、「本乳」という文字に当るかは、不明である。

稲運びのときに、馬が背の稲を食わぬように、「くつろご」と呼ぶ縄やアケビつるの籠をつける。貞享2年の『猪苗代川東組萬風俗改帳』には、「口かご」とあり、その絵まで描かれている。「口かご 是ハ稲萬作毛馬ニ付運候節馬不喰様ニあて申候」とある。

下野街道の物資運搬には、「仲附鷲者」と呼ばれ、南会津郡下郷町・南会津町田島等の下野街道沿いの人たちは馬の背で会津と栃木県日光市今市の間の運送業にあたってきた。貞享2年の『長江庄風俗改帳』には、「中付買売手馬三、四疋ニテ若松ヨリ米ヲ買、関東今市、藤原之市日ニ付出シ商、倉谷、田島ヨリ米ヲ買時モ有、時ニヨリ帰馬ニ塩ヲ買来ル」とある。仲附鷲者の運送業に関する用具類は、奥会津博物館に収蔵・展示されている。

## 2) 交通施設

只見川上流域の田子倉や石伏では、ブチブネによる渡しが大正初期まで行われていた。寛文5年の風俗帳には、「イク

り船」とか「打舟」による渡しに記載されている。只見川・伊南川には各地にワタシブネ（渡し船）があり、当番で渡しの世話にあっていた。田子倉では、「戻り船」といって、渡し場近くで農作業にあっている。向う岸でオーイと呼ぶと、その人は舟を反対岸に寄せ、渡す制度である。貞享2年の『野沢組風俗改帳』には、会津坂下町片門村に源頼朝公よりお濟付をもらったという渡しの船頭がいると記載している。「彼船頭式人ニ而相勤候、内老人先組ハ頼朝公より古へ御判被下置候由、其音判永正三寅年被召上候由ニ而替り之書付、今所持仕、」とある。

流れが急な場所では、渡し舟も不可能である。田子倉奥の赤岩平では、「カゴ橋」といって、川にワイヤーを張り、滑車を付けた籠に乗り、自らワイヤーに手を掛けて籠を移動させる。向い側の田畑に渡るときに用い、只見町内には柴倉山麓などに数ヶ所あった。テッサク（鉄索）とも呼ぶ。籠を吊るワイヤーを、テッサククリヅナ（鉄索繰綱）と呼ぶ。

冬期間、川水も少なくなると、伊南川流域にはイッポンバシ（一本橋）が架けられる。雪どけになると、イッポンバシはじめ橋は流失してしまうため、永久的な橋は少なかった。貞享2年の『榎原組風俗改帳』には、下郷町倉村付近の雪どけ水の洪水の様子が記載されている。「大川橋、此以前ハ丸木橋ニかけ申候得は、雪水ニ落、通路不自由ニ付、打舟を作り、河向より綱を張とり越にいたし、往還之荷物等運送仕候とも満水之時分ハ、綱はり候儀不被成故舟立不申候」とある。

只見川や伊南川・大川などでは冬の雪どけ水を利用して、伐採した木材をイカダ（筏）に組んで流し、新潟まで流送した。貞享2年の『榎原組風俗改帳』には、大川での「筏乗」の様子が記載されている。現在の下郷町榎原では、「筏乗拾人御座候 右ハ上郷より御城下へ出申候材木諸品、壺組二六本七本宛くみ、六つきを壺のりと申式人宛ニ而のり下ヶ申候、但乗賃ハ長野村より新（飯）寺迄金壺分代百文」とある。筏乗はカイ（漕）で筏を操作し、下って行く。筏流しでは、伊南川に設置した堰も破壊するなどのトラブルも多くあ

ったという。新潟県東蒲原郡阿賀町の鹿瀬で大筏に組み直し、新潟まで流送した。ダム式発電所が建設された昭和初期には、筏流しは行われなくなった。

## 6. 結びにかえて

以上、只見町の民具を中心に福島県内の民具を概観する形で、民具の名称について若干の考察を行ってきた。只見町という山間地方の民具という観点から、海の漁業に関する民具については照合できなかった。また、紙数の都合から信仰・年中行事、社会生活、玩具等の名称について割愛せざるを得なかった。これらについては、別稿で取り上げることを今後の課題としたい。

福島県という広大な地域において、気候や地形の相違、それに伴う植生など、民具の素材や形態も大きく違い、名称にもさまざまな様相を見ることができる。特に、雪の会津と雪の少ない浜通りでは、その地域差および地域性が民具の形態・材質そして名称にも表れていることを、見ることができた。筆者のように浜通りで生まれ育った者が、会津で生活し40年余りの歳月を迎えて、特にその違いを肌身で感じる今日このごろである。

また、会津地方だけでも平坦部と山間部とで民具の名称に相違があることを、数例の民具から紹介してきた。民具をとりまく自然環境や、旧会津藩領と旧幕府直轄領との政治的・思想の違いなどから、民俗行事とそれに伴う民具の存在などに影響もあったことが推測される。火災除けに男根・女陰の呪物の奉納や、サイの神に男女一對の藁人形を焼く行事の存在などがあげられる。一方で会津地方には、穂摘み具のコウガイや代踏み用田下駄のナンバ、半唐箕など会津地方にのみ残る民具の名称について、今後その残存の背景や要因について考えることも研究課題であろう。その指標となるのが、全国的視野に立っての名称の検討であろう。選別用具の「汰桶」などは、その代表的な存在であろう。

## 参考文献

只見町教育委員会編『図説 会津只見の民具』只見町 平成4年  
只見町史編さん室編『只見町史』民俗編 只見町 平成5年  
庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』第2巻貞享風俗帳 歴史春秋社 昭和54年  
庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』第3巻文化風俗帳 歴史春秋社 昭和55年  
丸井佳寿子監修『新編会津風土記』全5巻 歴史春秋社 平成11年

日本農書全集第19巻『会津農書・会津農書附録』農山漁村文化協会 昭和57年  
日本農書全集第20巻『会津歌農書・幕内農業記』農山漁村文化協会 昭和57年  
日本農書全集第16巻・17巻『百姓伝記』農山漁村文化協会 昭和53年  
佐々木長生『農具が語る稲と暮らし』歴史春秋社 平成13年